

歯学部ニュース

平成27年度第1号 (通算127号)

特集 歯学部学生の今
JASSO海外留学支援プログラム特集
学会受賞報告

目 次

特集1 歯学部学生の今	1
歯学科 2年 酒井 佑樹／歯学科 3年 内田 俊／歯学科 4年 野村加奈実	
歯学科 5年 横関 麻里／歯学科 6年 目黒 史也／歯学科 6年 鈴木兼一郎	
口腔生命福祉学科 2年 崔 伽耶／口腔生命福祉学科 3年 坂井 遥	
口腔生命福祉学科 4年 牧野 未来	
特集2 JASSO海外留学支援プログラム特集	14
小松 貴紀・山崎 恭子・鈴木麻里恵	
入学者のことば	20
歯学科 池田恵一郎	
口腔生命福祉学科 宮澤帆乃花・春山 海帆	
包括歯科補綴学分野 設樂 仁子	
歯科矯正学分野 市川 佳弥	
口腔生命福祉学専攻博士後期課程 木村 有子	
口腔生命福祉学専攻博士前期課程 佐藤 茜	
入学を祝して	24
学部長 前田 健康・副病院長 高木 律男	
総務委員会だより	27
前田 健康	
国立大学改革強化推進補助金【特定支援型】による教員採用について ほか	
新入生宿研修を終えて	32
山中 裕介	
連載：「大学院に行こう」	35
高橋 直紀・齋藤 大輔・大貫 尚志	
学会受賞報告	41
白井 友恵・高嶋真樹子・曾我麻里恵・有松 圭・新國 農	
倉田 行伸・高辻 紘之・齋藤 一誠・君 雅水	
留学報告	50
加藤 寛子・真柄 仁	
教授に就任して	55
包括歯科補綴学分野（義歯診療科）教授 小野 高裕	
診療室・講座紹介	58
新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯科医学教育研究開発学分野	
新潟大学医歯学総合病院 歯科総合診療部 藤井 規孝	
診療技術支援部便り	63
小林実可子・土田沙耶香	
技工部便り	65
長谷川健二	
素顔拝見	67
加藤 祐介・柿原 嘉人・小玉 直樹	
同窓会だより	71
総合診療部を経験して	75
渡邊 大祐・網谷季莉子	
歯学部運動会を終えて	78
歯学科5年 森 昂大	
歯学部各種委員会	79
教職員異動	83
入学おめでとう	91
平成27年度歯学部歯学科入学者名簿・平成27年度歯学部口腔生命福祉学科入学者名簿	
平成27年度口腔生命福祉学専攻（前期博士課程）・平成27年度口腔生命福祉学専攻（後期博士課程）	
平成27年度大学院医歯学総合研究科（歯学科博士課程）入学者名簿	
編集後記	93



歯学生の今

歯学科2年 酒井 佑 樹

「入学者のことば」昨年このタイトルで歯学部ニュースに原稿を載せて頂いてから、早いものでもう1年が経ち、今、私は新たに2年生として、昨年とはまた違った気持ちで原稿を書かせて頂いています。

2年生になり、日々の学校生活を送っていく中で、大きく変わったな、と感じる事があります。それは「キャンパスが五十嵐から旭町に移動になった事」、そして「授業内容がより専門性を増してきた事」です。

1年次までは教養科目がメインであったため五十嵐キャンパスでの生活でしたが、2年生に上がると同時にキャンパスが移動となり、旭町での生活が始まりました。医歯学総合病院に隣接するこのキャンパスでは、多くの患者さんが病院を訪れ、緊急時にはドクターヘリが飛び、様々な医療関係者が行き交う光景が毎日見られます。「病院」という雰囲気を直接肌で感じる度、すぐ将来、目の前にある、この立派な病院の医療という現場に自分も立つのだ、と、強く意識させられます。また、ひとたび歯学部棟内に足を踏み入れるとたくさんの先輩方が、緑衣やユニフォームを着て現場に向かわれていたり、大きな器具をもって実習に臨んでいたりする姿が見られ、勉強へと向かう意識をより強くさせられます。

授業内容も大きく変わりました。人体解剖学や、発生学、歯科理工学など将来に繋がる内容がググッと増え、覚えることも多くなり1年次に比べ苦勞も感じていますが、専門性の増した内容に興味をそそられるとともに面白みも感じています。また、2年生になってからも早期臨床実習があり、1年生の時とは異なり、実際に人工歯を削らせて頂いたり、CTやレントゲン写真から病名

を説明して頂いたり、矯正治療で用いるワイヤーを曲げさせて頂いたりしました。どの工程も自分が歯科医になるのだというビジョンを深めることができ、これから学ばなければいけないことの多さに身の引き締まる思いがしました。

早期臨床実習では実際に治療を見学させていただくのですが、その中で私は、元気のいい初老の女性の患者さんに出会いました。その方は、「先生。私はどの方法がいいのかよく分からないから、私が先生の母親だったら先生はどうするか。それで選んだ選択肢を教えてくださいませんか？」と仰っていました。その言葉を聞いて私は、様々な事を考えさせられました。まず一番に考えたのは、患者さんは誰もがまず、治療に関して不安や悩みを抱えていて、お医者さんにそれをわかってもらい身近な存在のように寄り添って欲しいので



はないか。という事です。「自分を母親のように診て欲しい。」という、その発想は今の自分には全くなく、はっとさせられました。そして、母親のようにみる事で、今持っている視点とは別の視点をも、持てるのではないか。と思わされました。また、患者さんに行おうとしている治療はどのようなもので、どのような材料を使うのかということを知りやすく伝えることの重要性も考えさせられました。患者さんに分かりやすく説明するためには、まず、自分が一番内容を理解していなければならない。そのためにはやはり今、勉強を頑張る必要がある。自分の頑張りが患者さんの治療に影響するのだ。と、思った瞬間、自分の為、に行っていた「勉強」というものが不思議な広がりを見せ、まだ見ぬ誰かの為に学ばなければならないんだ。という強い意欲が湧きました。

勉強以外でも、部活動では男女ともに尊敬する

先輩方に囲まれて練習ができたりと、充実した日々を送らせて頂いています。2年生のこのメンバーと出会い、もう1年と半年が経とうとしています。浜辺でBBQをしたり、クリスマス会をしたりして、出会った頃より、遥かに仲の良さは増しています。2年になっても昼休みにはバカ騒ぎしたり、コンビニの店員さんが可愛い！とテンション上がったり…。そんな中でも、みんなで勉強し合ったり、分からないことを質問し合ったりと、和気藹々とした雰囲気の中にも歯学部生としての自覚が皆強く芽生えてきたように感じます。この仲間たちとなら最後まで、大学でしかできない貴重な時間を過ごしていけると強く思っています。こんな、愉快でも実は、しっかりしている仲間たちと共に、精一杯、少しずつでも、自分たちの将来に向けて、歩んでいきたいと思えます。



歯学生の今

歯学科3年 内田 俊

医療人にとって、無知は罪である。医師・歯科医師が行う「治療」の目的はひとつ、その病気・疾患を治すことである。しかしそのアプローチは多種多様だ。自らの知識・経験を総動員して治療に色付けをし、謎に立ち向かう。そこに「知らない」はない。おおよそ20歳の青二才な私たちでも、いずれプロとしての誇りと優れた能力を持ち、歯の生涯に、人の生涯に希望を灯すことであろう。そうでなければならない。そんな私たちの根幹は学習によって成り立つ。そこで私たちが日々尽力している「人体解剖学実習」について書かないわけにはいかないだろう。

解剖室に入る前に一礼をし、全身一式の身なりを整え、御遺体を前にして黙とうをする。線香のにおいと独特の雰囲気立ち込めた中、このようにして実習は始まる。私たちは御遺体を前にして、その生前の尊い精神に対して謙遜の意をもたざるを得ない。日々の実習のたびに、ここから何かを吸収しなければならないという使命感・義務感が自らを駆け巡り、ゾクゾクとした鳥肌を形を変え全身を奮い立たせる。実習では体のどこに何が通っているのか、どこに何があるのか、自分たちでメスやピンセットを用いて全身をくまなく解剖し、その三次元的な走行・位置を把握していく。だがご想像の通り教科書通りにはいかない。「これは何の動脈だろう。しっかり把握しないと。」「上行咽頭動脈が顔面動脈から分岐しているね。」大学一年生の時にカエルの解剖実習で鼻水が垂れるほど号泣していた仲間も鋭い眼差しでそうつぶやく。ふと周りを見渡せば、仲間の顔つきはかつてより少しばかり大人になり、ダボダボだった白衣もなんら違和感のない立派な装いへと姿を変えていた。

私が解剖学実習を通して一番印象に残っているのは口底部の解剖である。そもそも「口底部」と

いう言葉を耳にしたことがあるだろうか。口底部とは舌の裏面におおわれた下顎の内側の部分のことである。一般の方はともかく歯科医師でも目ごろは目にしない（目には見えない）領域である。そこには口腔内の様々な組織と関わりを持つ重要な動脈や神経、腺などが存在している。臨床、特に歯科インプラント治療ではCTなどでその走行や位置を把握しているのだが、将来そのインプラント治療をやりたいと考えている私にとって、様々な角度から生でその全景を観察できたことは正直この上なく意義あるものであった。この半年間に渡る実習の中では計4回の口頭試問が課される。口頭試問とは文字通り口頭でいくつか質問をされ、目の前の御遺体を用いてそれに答える試験だ。これはそれまでにやった一通りの知識を整理する良い機会である。しかしその前日や直前は緊張で食事や喉を通らなくなったり、何回もトイレにいったり、また徹夜2連続目などの次元の違う人が出てきてしまったりするなど、それほど身を引き裂かれる思いをする。これから先「逃げ出したい」と思うことがあった時、このことは必ず脳裏によみがえり、逃げそうになっている自分の心を初心に戻してくれるであろう。この解剖学実習で学んだことに無駄はひとつもなくそのすべてを



十分に理解することが、御遺体やそのご遺族、また一回の実習で7、8時間にも渡って私たちの実習に付き合ってくださいました先生方への一番の感謝であると私は実感した。

私たちが今後臨床的な学習をしていく中で、ひとりひとりが自らにしか出せない価値を創造することはとても大切だ。「枯れ木も山の賑わい」で

はなく、歯科医療という山で独特の色を放つ大きな大木とならなければならない。志高く日々研鑽に励み、これからの生活の中で自分にはどんな能力・工夫が必要なのかを考え、「いい医者になりたい」という思いが確固たるものとなるよう学生生活をより充実したものにしていきたい。いまこの時を大切にしてください。



4年生の今

歯学科4年 野村 加奈実

校舎改修工事の真っ只中に入学した私達も4年生となり、校舎や医歯学総合病院の雰囲気はすっかり様変わりした。先輩方に「君たちの学年はピカピカの実習室を使えるんだろうね～いいねえ～」と言われていたあの時が懐かしく感じる。それとは引き換え、チャホヤされていたのも遠い記憶……今や部活では幹部学年。お局、怖い人、おばさんなどと呼ばれるようになった。自分の立場も気づかぬうちに様変わっていたようである。

4年生のカリキュラムも今までとは一変した。座学が多かった毎日も、実習中心となり、白衣を着て歩く機会も格段に増えた。最初はたくさんの歯科材料が入ったあのお道具箱をウキウキしながら転がしていたのだが、そんな余裕もなくなっている。(エレベーター、廊下等々でご迷惑をおかけして申し訳ございません。)やる度にてんやわんやで、きれいな実習室も一瞬で粉まみれ。全部床義歯の実習のあとは小野教授に「祭りの後の土手ようだ……」と言われたほどである。自分の不器用さと格闘しながら、毎回与えられるノルマをクリアするのに精一杯の日々である。一方で、座学で勉強したぼんやりとしていたイメージも、自分で手を動かすことによって一本の糸のようにつながったり、歯科医師である父が実家で使っていたユニファストのにおいをかいで、これだったのか！とふと懐かしく感じたりもした。また、実習を通して、自分が作業している時でも優しく丁寧に教えてくれるクラスメイトをみて、たとえ自分が忙しくとも、困っている患者さんへの優しさを忘れず対応できる医療従事者になりたいと決意した。

そして、4年生になってホットなワードとなったのは「これ！国試にでるよ！CBTででるよ！」その度に胸が騒いでしまうのは、私だけじゃないだろう。去年より格段に増えた国家試験の話題は

合格率の低下だけでなく、世間のニーズに対する歯科医師のあり方さえも考えさせられる。いったい自分はどんな歯科医師になりたいのか。興味や適性を考慮しながら決めていかなければならないのだが、いろいろな話を聞くだけで決められずに焦るばかりであった。そんな話を何人かの先輩や先生に持ちかけると、自分の時もそうだったと口々におっしゃる。私自身もこの時期を一種のモラトリアムと捉え、いろいろな学びとの出会いや自分の成長を通して、ゆっくりと自分のやりたいことを見つけていこうと思うようになった。目の先の試験ばかりに目が行き、視野も狭くなりがちだが、大切なのは将来のビジョンを描いていくことだと思う。(と言って勉強することから言い逃れるつもりはない……以下略)

唯一変わらないものといえば、教室の中である。クラスのメンバーはもはや家族のようだ。各々がそれぞれ変わらぬアイデンティティーを獲得している。このクラスに収まっているということは自分にとっては偶然であり、運命でもある。これからも苦楽を共にしていくであろうクラスの仲間を大切にしていきたいと思う。これからもよろしくね！



5年生の今

歯学科5年 横 関 麻 里

歯学部ニュースとご縁があるようで、2回連続で原稿を書かせていただきます、歯学科5年の横関麻里です。

最近何かと集合写真をたくさん撮っている5年生。ですので、今回は、集合写真に沿って「5年生の今」についてお話していきます。

① 岩室温泉旅行

4月初旬、今年度もみんなで頑張っていこうと、47期の有志で岩室温泉へ一泊の温泉旅行に行ってきました。みんなで温泉に浸かり疲れを十分に取り、大広間を貸し切ったの美味しいお酒と料理。それは最高でした。ビンゴ大会などもあり(ちなみに最初のビンゴは私でした)、夜遅くまで大いに盛り上がりました。47期の結束をより固める良い機会となりました。



② ポリクリ・総合模型実習

5月になると私たちは緑衣デビューをしました。5年生になりポリクリ(臨床予備実習)が始まりましたが、10月から始まる臨床実習を意識する実習ですので、常に身が引き締まる思いでポリクリに臨んでいます。ポリクリは少人数のグループで各科を回りますが、その度に多くの先生方が手厚く指導してくださり、とても学ぶことが多い毎日です。

また相互実習で、初めて人の口の中、体に触れ、近い将来医療従事者になるのだと実感すると共に、自然と責任感もわいてきました。

また、5年生のカリキュラムには、総合模型実習という、歯科疾患を抱えた患者さんの治療計画を自分で立て、実際に模型上で治療を進めていく実習もあります。患者さんの主訴や口腔状態、全



身状態を考えて治療の順序を考えるというのとはとても難しいことだと感じました。実習を進めていくと、自分で立てた治療順序では上手くいかない状態になってしまうこともあります。私は、抜歯により咬合関係が不安定になってしまい、適切な補綴物を作ることが難しい状態に出くわしました。あらかじめ内容が決まっている実習とは違い、実際にやってみて初めてわかることがありとても勉強になる実習だなと感じています。

③ 運動会

5年生は運動会の幹部学年でしたので、運動会に参加するだけでなく運営にも携わりました。実行委員長の森くんを初め、クラスみんなが運動会を盛り上げようと一生懸命準備をしている姿を教室でみかけました。少し大げさですが、高校の文化祭前の盛り上がりを思い出し青春を感じました。

運動会当日は天候に恵まれ、多くの先生方にもご参加いただき、とても楽しい運動会となりました。5年生は最初の種目である玉入れで1位を獲得し、その良い流れに乗り、優勝することができました。とても良い思い出です。

④ 部活

5年生になってもなお部活を現役で頑張っている人がたくさんいます。ちなみに私はスキー部で、3月に新潟の妙高で開催されたデンタル（歯学部総体）に出場してきました。多くの部活は夏にデンタルがあります。5年生はCBTもありとても忙しい夏になるとと思いますが、デンタルに出場するみんなには頑張ってもらいたいです。

以上が「5年生の今」です。これから5年生を病院でみかけることが多くなると思います。先生方をはじめ、病院スタッフや事務の方々、先輩方、後輩のみんな。5年生をよろしく願いいたします。



筆者 中央奥



6 回目の春に思うこと

歯学科6年 目黒史也

新潟の短い春が来て、初々しい新入生の顔を見かけるようになった頃、ようやく学部最高学年になったのだという実感が腑に落ちた。どこか地に足のついていないような昂揚感に包まれたあの春から、もう5年とも、まだ5年とも感じられる。

入学当初、歯科医療に関して一般人と変わりのない知識しか持ち合わせていなかった頃からここまでの変化は、おそらく私の人生において後にも先にも最大の変化であろう。紆余曲折を経て、最高学年として、大学病院の看板を背負いながら臨床実習に励む今、歯科医師を目指すうえでこの学校を選んでよかった、と日々心から思う。

有体に言って、新潟大学歯学部の毎日は楽ではない。

1年間の一般教養を終え、本格的に2年生になってからは、殆どノンストップで講義や実習に追われることになる。2年生以降の講義は、どの科目も易しくはないし、実習は講義時間を過ぎてしまうことも多い。担当される先生方は、熱心で、どんな時も妥協が許される環境ではない。中にはあまりの忙しさに、心が折れてしまいそうになる人もいるし、何を隠そう、私自身がそうであった。そんな中担当して下さる先生方の叱咤激励と、友人たちからの励ましのお陰で、歯を食いしばりながら何とか前に進んでこられた。

そして、そんな忙しい毎日の中でも、私たちは単に歯科を究めるためだけに、大学へ毎日通うのではない。

毎年開催される歯学部運動会、学年対抗各種球技大会、医歯学祭に始まり、各部活動ごとで年に一回開催される全日本歯科学生総合体育大会への参加、あるいは大学独自のSSSVプログラムと称される短期留学プログラムへの参加、来学した留学生との交流、SCRPと呼ばれる研究プログラムへの参加をすることもできる。それぞれにおいて、新しい出会いがあり、学びがあり、忙しい毎日の中にも色彩が生まれていく。

5年生の秋になれば、共用試験を突破し、晴れて1年間の臨床実習に参加することになる。これほど内容の濃い臨床実習を行っている歯科大学は他にないだろうと思えるほどに、毎日が発見と猛省と勉強に溢れる、理想の実習環境である。

猛スピードで過ぎていく時間において行かれないよう、全速力で走り抜け、気づけば6回目の春を迎えている今、この学校を選んで本当に良かったと思っている。それは、もちろん新潟大学歯学部の熱意ある講義や、恵まれた実習環境に因るところも大きいがそれだけではない。多くの友人や先輩、後輩、先生方との出会い、そして何より、この大学で悩み、もがきながら前に進み続けてきたという自負が、5年前の自分とは比べ物にならないほど、私という人間の軸を確かなものにし、人間として成長している実感を与えてくれている。

もちろん、歯科医療従事者としてはまだスタートラインにも立てていないが、臨床を経験させていただいている恵まれた私たちは、敢えてより先を見据えるべきではないだろうか。

国家試験を乗り越えた先に待つであろう試練に屈することなく、いずれ歯科医療界をリードしていこうという気概を胸に、私は明日も緑衣に袖を通す。



歯学部生の今

歯学科6年 鈴木兼一郎



歯学部歯学科6年の鈴木兼一郎です。6年連続6回目の歯学部ニュースへの原稿掲載になります。そんな私は早くも6年生になってしまいました。新潟大学歯学部に入学したことが昨日のように思い

出されます。1年生の時からこの歯学部ニュースに自分の成長過程を載せていただいておりますが、遂に最後の掲載ということになってしまい、時間の経過の早さを感じると共に、自分の文章構成力の向上を感じております。前置きはさておき、例年に引き続き6年生になってからの学生生活を振り返ってみようと思います。

2015年4月をもって、新潟に初上陸したときは想像もしていなかった6年生になり、国家試験をあと半年後に控え、現在は臨床実習と共に国家試験対策勉強に励んでおります。5年の10月から始まった臨床実習では実際に患者さんに対し、歯科治療を行っています。もちろん先生の監視の下、診療を行っています。他の大学では味わえない貴重な体験をさせていただけるということに日々感謝しながら、一つの一つの経験を無駄にしないよう、日々実習に取り組んでいます。来年の4月から歯科医師となりますが（※国家試験に合格すれば）、この経験を単なる学生実習の一部として終わらせるのではなく、1人前の歯科医師になるための最初のトレーニングとして、残りの実習でもさまざまなことを学んでいきたいと思っております。また、このような貴重な経験ができるのは臨床実習に携わっていただいている多くの先生方と病院の職員の方たちのおかげだということを忘れないようにしたいと思います。

学業以外の面についてですが、特に問題なく生活できています。むしろ快適です。新潟に来て1年目はあの冬の寒さにやられ、なんて住みにくい県なんだと思いましたが、今となってはその寒さ

にも慣れ、新潟は住みやすいのではないかとこの錯覚に陥っています。気のせいかもしれませんが、最近の新潟は晴れている日が多いと思うようになりました。新潟に来て1年目は1週間の内、6日は雨でしたが、今はほぼ毎日晴れているような気がします。でも多分、気がするだけです。完全にマインドコントロールされてしまいました。自分の趣味はジョギングなのですが、晴れている日にはたいていやすらぎ堤をジョギングしています。なので、最近晴れていてとても嬉しいです。臨床実習が終わってから国家試験勉強に専念することになると思いますが、息抜きにちょうどよい環境があつてよかったなと思っています。これからの進路についてはまだ悩んでいますが、新潟に残ることについても前向きに検討したいと思います。

最後になりますが、昨年のある出来事について報告します。昨年12月のことです。自分は、毎年雪が降る福島県出身でありながら、雪道で滑って左側上腕骨を骨折し、左腕が全く動かなくなりました。人生初の骨折であり、23年も雪道の上を歩いてきたにも関わらず、初めて転ぶという…。この時いくら雪道に慣れていようと、油断していた自分が愚かだったなと感じました。何が言いたいかというと、これからの人生でいろいろなことがあると思っておりますが、何時如何なる時も驕ってはいけないうことです。働けば、日々の仕事に慣れてくる時が必ずくると思いますが、そんな時こそ更に気を引き締めて、患者さんに対して治療を行っていくようにしたいです。それこそが1人前の歯科医師になるために大切な心得だと思っております。そして、骨折した時に臨床実習を手伝ってくれた友達や、実習をそのまま継続させてくれた先生方には大変感謝しております。ありがとうございました。これからいろんな壁にぶつかると思いますが、その一つ一つの壁を丁寧に壊して、前進していこうと思っております。歯学部ニュース愛読者のみなさん、6年間自分の文章構成力の成長を温かく見守っていただいていたありがとうございました。

歯学生の今

口腔生命福祉学科 2年 崔 伽 耶

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科に入学してはや1年。私達は五十嵐キャンパスでの1年間の教養科目履修を終え、旭町キャンパスでの専門科目の勉強を始めた。今はまだ専門科目と言っても座学やPBLが基本であるが、これらが歯学の基礎知識・医療人に必要なスキルの大切な一歩目だとみな自覚し勉学に励んでいる。

歯学部棟は旧新潟大学歯学部所属病院であり現在の新潟大学医歯学総合病院と隣接していて、大学というより医療現場という雰囲気が強く感じられる。また歯学部の先輩方や白衣の先生方と会う度に、自分の近い将来そして少し遠い未来を考えずにはいられない。

そのため眠い目をこすりながらバスに乗って通学している時でも窓の外に「新潟大学病院」の文字が見えると自然と気が引き締まる気がする。

先ほども述べたとおり私達の今の授業の基本は座学とPBLである。しかし早期臨床実習ⅡBでは実際にいくつかの施設の見学を行った。実際に施設の様子を知り、そこで働く職員の方と話すことで今までは知識としてしか知らなかった医療・福祉の仕事ややりがい、難しさを自らの目と耳で感じる事ができた。

また私は歯科衛生士概論という授業も印象的である。この授業では実際に様々な現場で働いていらっしゃる歯科衛生士・社会福祉士の先生方の話を聞く事ができた。中には新潟大学の口腔生命福祉学科の卒業生の方もいらっしゃり、とても身近に感じられた。診療所の歯科衛生士、行政の歯科衛生士、特別養護老人ホームの社会福祉士、行政の社会福祉士などはそれぞれ仕事も役割も違い同じ資格でもとても幅広く可能性豊かな職だと感じた。

これらの授業で私は自分の将来についてとてもよく考えさせられる。高校時代、自分の将来を悩み考え、確固たる意志をもって歯学の道を志し口

腔生命福祉学科に入学したというのに、私はまた将来について悩んでいる。それはやはり歯科・福祉の世界の幅広さ・奥深さのためであろうか？

就職について調べたり、就職時の試験に向けて勉強を開始したり、また福祉のボランティアや海外派遣に参加するのも今だろう。

しかしそうはわかっている私達はどうしても目先の事柄にとらわれやすい。目の前の試験やレポート、部活やサークル、遊び…。もちろんこれらも決しておろそかにしてはならない。目の前の課題をしっかりとこなし、大学生の間しかできない楽しいことを目一杯経験することも自分の財産となるだろう。

しかし私達は大学2年生である。大学2年生は多くの学生が19歳から20歳になる年である。未成年から成人へ。ただの20回目の誕生日、そう思うこともあるかもしれない。確かに20歳になったからといって急激に成長したりはしない。けれど自分の節目を迎え、未来を見据えていくきっかけにするには十分である。

私達は将来医療人になる。専門知識と技術をもって多くの人を支えていく仕事に就く。どの分野でもそうであろうが、医療・福祉の道も易しくないだろう。正直、私の心と頭の中は不安でいっぱいである。後3年もしたら卒業し、就職しているというのに、今の私達はあまりに何も知らない。予防処置の方法も、保健指導の仕方、歯科の治療器具の使い方、終末期の患者の接し方も、QOL維持向上についても…。

これから学んでいくしかない。今知らないのだから。将来に向けてまた一歩踏み出す時だ。今すべきこと、今しかできないこと、今したいこと、それらを考え実行していかなければならない。自分の人生をより豊かなものにするために。そして医療人としての矜持を抱きながら微力ながらもこれからの社会に貢献していけるように。

歯学生の今

口腔生命福祉学科3年 坂井 遥

私が口腔生命福祉学科に入学して2年が経ちました。大学生活ももう折り返し地点を過ぎてしまい、将来のことを考えていかなければならない時期となりました。

3年生になって変わったことといえば、本格的に社会福祉士の勉強が始まったことです。2年次は歯科の勉強が主だったので、新しい分野を学び始めることにとてもワクワクしていました。前期の授業の早期援助技術演習では、特別養護老人ホームや障害者交流センター、障害者リハビリテーションセンター、児童相談所など、実際に社会福祉士が活躍する場を見学しに行きました。今までは社会福祉士の仕事について具体的なイメージがつかめませんでした。講義だけでは分からない、実際の現場の雰囲気や様子を感じることができ、これから社会福祉を学ぶ意欲が高まり、将来の視野を広げることができ、とても自分の身になる見学となりました。

また歯科の方の授業では、幼稚園に歯科保健指導に行ったことが一番印象に残っています。幼稚園で劇を通して園児たちに歯磨きや仕上げ磨きの大切さなどを伝えてきました。歯磨きの嫌いなもえちゃんのお口の中で悪さをするバイキン軍団を、歯磨きレンジャーがやっつけるというシナリオで、私はバイキン軍団を演じました。大道具や衣装をみんなで作り、先生方にもアドバイスをいただいてシナリオを何度も書き直しながら、放課後や昼休みにリハーサルを行ったのは大変でしたが、とても有意義な時間でした。当日、園児や保護者のみなさん、先生方の前で役を演じるのはとても緊張しましたが、楽しみながら歯科保健指導を行うことができたと思います。しかし、実際には人に自分の言葉で説明したり指導することはやはり難しく、戸惑うことも多くてまだまだ自分の力が足りないと感じました。今回の経験を、こ

れからの保健センターなどの実習でも生かしていきたいと思います。

一方、歯科の実習では病院に出ることも増えてきました。主に病院の歯科衛生士さんにつかせていただき、その治療や保健指導の内容などを見学させていただいています。時にはバキュームや歯周チャートの記録など簡単な補助もさせていただくことがあり、実際に患者さんと接するのは初めてだったので緊張しましたが、とてもよい勉強になりました。今、相互実習では超音波スケーラーを用いたPMTC、浸潤麻酔下で手用スケーラーを用いたSRPなどと様々な実習を行っています。そのような授業で学んだことを、実際の臨床の場で見学させていただき、自分のものにしていくことが出来たらと思います。

大学に入ってから2年以上がたち、みんなで試験を乗り越えて、実習にも取り組んで、どんどん3年生のみんなの結束力は強くなってきていると思いますし、本当にみんなの仲が良いなと感じています。これからは勉強でも実習でも、今までより忙しくなるし、大変なこともたくさんあると思いますが、これまでの経験を生かしながらみんなと一緒に頑張っていけたらと思います。



歯学生の今

口腔生命福祉学科4年 牧野 未来

3年生の春休みが終わろうとしている時、衝撃的な情報を目にしました。その情報とは、「4年生のガイダンスは4月1日から3日間、しかも1～5限までずっとガイダンスがある。」というものです。とりあえず目を疑い、あれ、ガイダンスって1日で終わるものじゃなかったかな?と思いました。でもふと気付きました。これから私達は口腔の学生が最も忙しくなる4年生になるのだったということ。大学に入学してから学科の先輩方や先生方から、「この学科は学年が上がるごとに忙しさを増すよ。」ということをよくお聞きしていましたが、それはやはり本当らしいということを確認し、ガイダンスに臨みました。ガイダンスでは、4年生の大学生活の大半を占める病院実習のことや特論のこと、約1ヵ月間外部で実習を行う福祉現場実習のことについて、今後どのようにそれらが進んでいくのかを把握しました。ガイダンスを受けて率直に感じたことは、「これからやっていけるかな。」ということ（笑）。そんなこんなで始まった4年生としての生活をこれからご紹介します。

私達は現在、週に4日病院の様々な診療科にて実習をさせていただいています。実習中は診療のアシストをさせていただいたり、オペや特殊な治療の見学をさせていただきます。診療科によって

実習期間が変わってくるのですが、1つの診療科につき1週間以上実習を行います。実習先が変わる時には学生間で引き継ぎを行い、診療科が移ってもスムーズに実習をできるようにしています。引き継ぎに際しては引き継ぎノートというものを作り、学生同士の情報共有を図っています。1日の実習を終えると実習日誌を書きます。今年はこの日誌についての過渡期で、診療科によって日誌を紙で出すかポートフォリオで出すか違ってきます。ポートフォリオというものが今年度から口腔の実習に新しく導入されたシステムで、日誌をパソコンで作成します。最初の頃はシステムがうまく作動せず、なかなか混乱した時もありましたが、今ではポートフォリオを不自由なく作成できるようになりました。また、1日の実習を終えて疲労感MAXの中で日誌を書くことにもだんだんと慣れてきました。昨年度までは、「明日1、2限ない!」という日が普通にあったように感じたのですが、今ではそんな日があったのなら奇跡的なことだと思えるようになりました。むしろ、毎週金曜日にある講義（1日）を、嬉しいとさえ思えるようになりました。人間の慣れてすごいなと身を持って実感しています…。福祉現場実習はもう既に実習を終えた学生、現在実習中の学生、これから実習へ行く学生それぞれなのですが、こちらも病院実習に負けず劣らず結構ハードです。実習前に施設の事前訪問へ行くことや計画書を作成すること、実習中に毎日日誌を書くこと、実習後は総括レポートを作成することなど、やるべきことが多くあります。そして、施設によっては夜勤をすることもあるようで、実際の職員の方と同じように実習中は過ごす感じになります。外部で実習を長く行うことは今までにあまりしてこなかったことなので、貴重な経験を今回の実習で積むことができると思います。実習の他に、4年生



ならではのものといえは特論が挙げられます。学生1人1人が自分の興味があることでテーマを設定し、先生の指導を仰ぎながら論文を完成させていきます。10月末が最終提出にあたるので、それまでに何とか仕上げていきたいと思ひます。

最後になりますが、4年生はそろそろ進路を具体的に決めて就活をしていく時期に入っています。どの道に進むにせよ、学科全員が自分の思ひ

思ひの場所で、新たなスタートを来年の4月から切れているといいなと思ひます。卒業前には2つの国試もありますが、全力でぶつかっていき、全員合格を達成したいです。皆が笑顔で卒業できるよう、今後の学生生活においても、辛いことは皆で乗り越えて、楽しい思ひ出をたくさん作っていききたいと思ひます。



JASSO海外留学支援制度に参加して

歯学科6年 小松 貴紀

カナダへの留学を終えた翌月のクレジットカードの請求額を見て驚いた。しかし何度も確認したが、すべて自分がカナダで使ったお金であった。仕方ない。滞在・移動費だけならば、ほぼ奨学金で賄えたはずであった。自分のテンションが上がりすぎてカナダで使いすぎてしまったツケが回ってきたのだ。私のなけなしのお小遣いによってカナダの経済はかなり潤ったことであろう。

今回、私達はJASSO海外留学支援プログラムで奨学金を頂き、バンクーバー（カナダ）のブリティッシュコロンビア大学（UBC）に2週間ほど、同学年の小松万記さん、清水梨沙さんと共に派遣させていただいた。UBCはカナダでも3本の指に入るほど大きな大学で、世界の大学ランキングでも常に上位に位置する、非常に優秀な大学である。私たちは、現地の学生の4年生（カナダでは最高学年）が行う臨床実習や3年生の基礎実習（マネキン実習）を見学したり、授業やPBLに参加し、日本と海外の臨床の違いや歯学部教育の違いを体験する事ができた。現地の学生はアジアのみならず、中東やヨーロッパ等、様々な国からきており、日本が大好きな学生も多く、お昼には学食で一緒に日本トークをしながらランチを取ってもらえたり、放課後にディナーへ連れて行ってもらえたり、謎のクラブに誘われたりと、非常に丁寧に対応していただいた。

休日は基本的に自分たちだけで行動した。日頃の力関係からして、2か月前から旅行本を読みこんでいた女の子2人がほぼ旅行のプランを決め、私はそれに頷くだけであった。しかし、2人のプランはどれもとても楽しかった。キャピラノ渓谷という大きな谷にかかる揺れる吊り橋では、バンクーバーの大自然を堪能することができ、極度の

高所恐怖症である私は、はしゃいでわざと橋をゆらし私を恐怖に陥れる2人と今後うまくやっていたのか不安であった。また、スタンレーパークという滞在地近くの、一周約10キロもある広大な公園でサイクリングを満喫した。さらに、現地のツアーに申し込み、ヴィクトリアという都市へ行ったりした。

バンクーバーには、日本でいう寿司のような、その国の料理というものが無い。かわりに、様々な国の料理店が立ち並び、もちろん、日本料理屋も現地では大人気で、寿司屋さんはもちろん、「ebiten」という店名のうどん屋があったり、日本風のラーメン店では毎晩のように行列ができていた。中でも、私たちの心に残ったのは、「ギリシャ料理」である。日本ではあまり口にすることがないが、私たちはその中でも人気のあったsouvlaki（スーブラキ）という料理をいただいた。スーブラキとは、串焼きにした牛肉やラム肉のことで、私たちが訪れた人気のお店ではその他にサラダとバターライスがワンプレートになっており、人生で初めて味わうとともにそのおいしさに感動した。

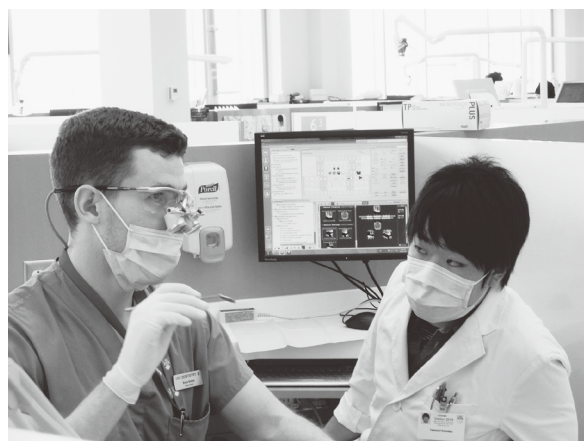
今回の派遣で現地の学生から学んだことは、英語が上達したことや、臨床の細かい技術などはもちろんだが、一番は彼らの実習のモチベーションの高さである。我々は臨床に出て間もない時期に短期留学へ行ったが、私の診療と比べて彼らは患者さんに対して堂々と自分の診療を行っていた。しかし、そのためには事前にその日行う診療をしっかりと勉強しておかなければならず、そのための準備を彼らは決して怠らない。また、1つ10万もする診療用の顕微鏡を1人1つ持参しており、意識の高さが伺えた。もし私がその顕微鏡を

使用していたら、周りから後ろ指をさされる事だろう。もし、みんなで共同購入しようと言えば、大バッシングを食らうだろう。しかし、彼らにとってみれば、最高の環境で最高の実習をするために、最高意欲と最高の道具をもって実習を行うことが当たり前となっている。私は自分の診療を振り返った時、自分の診療や準備にどこか甘い部分があり、堂々と自分の診療が行えない部分があった。同じ歯学部生なのに国が違うだけでここまで勉強の姿勢が違うことが少し悔しくて、日本に帰国し、私はせめて自分の診療や準備を怠らず、堂々と診療を行うことを心がけることにした。これが、学んだことの中で1番自分のなかで生きている事である。

大学に来て、学生のうちから経済的支援をうけて、短期留学ができるこのJASSO海外留学支援制度は最高のプログラムである。歯学部に来て、海外の歯学部や臨床を学生のうちから肌で感じることができ、海外の言語や文化、習慣も学ぶことができる。海外に行くことは、多くの人にとっては非常にハードルが高いことだろう。安全面や英語力とさまざまな不安があるだろうが、実際行ってしまえば全く問題にならない。奨学金を得て海外に行く素晴らしい機会があるのだから、学年は関係なくとにかくプログラムに参加することに意義がある。私は後輩のみなさんにはこのプログラムを利用して気軽な気持ちで海外へ行ってほしい。



左から清水梨沙さん、筆者、小松万記さん



現地の学生の診療介助

JASSO海外留学支援プログラム報告

～ペンシルバニア大学を訪ねて～

歯学科6年 山崎 恭子

5月16日より約2週間、日本学生機構(JASSO)のプログラムによりアメリカ・ペンシルバニア大学を訪問しました。ペンシルバニア大学はペンシルバニア州フィラデルフィアに本部を置く全米で4番目に古い大学で、アメリカで最初に医学部が設立された大学でもあります。歯科分野では特に歯内療法が有名な大学です。

訪問中は主に病院での診療見学を行いました。毎日異なる専門科の診療室を見学させてもらい、症例の説明を受けたり外科手術を見学したりしました。その中で特に印象に残ったのは感染症を保持する患者に対する診療です。新潟大学とは異なり、ペンシルバニア大学には感染症患者専門の診療室(oral medicine clinic)が存在します。ここではAIDSや肝炎をはじめとする様々な感染症や全身疾患を持つ患者に対して定期的なメンテナンスを行い、顔面・口腔領域のみならず全身状態の経過を観察しています。ドクターは血液検査結果など医科領域における患者のデータも広範に所持しており、患者の全身状態を詳細に把握し、診療に臨んでいました。普段臨床実習を行う中

で、歯科に関係のある全身疾患についてはよく調べて診療を行うようにしていましたがその他の全身疾患については基本的な知識しか持っておらず、自分がいかに勉強不足であるかを思い知らされました。

見学を行う中で日本とアメリカの診療の違いを最も大きく感じたことは、保険制度についてです。皆保険制度を採用していないアメリカでは治療費の安い大学病院に低所得層の患者さんが多く来院します。例えば根管治療の必要な齲蝕が存在した場合、患者さんは根管治療を行うか抜歯するかの二択を迫られます。そこで根管治療に必要な金額(約700\$ほどだそうです)が払えない場合は抜歯となってしまいます。低所得層の患者さんの多くは治療費が払えないため、明らかに保存可能な歯を抜歯することになるとのことでした。自分たちと同年代の女性の残存歯がすでに10本を切っている様子を見て残念に思うと同時に、日本の医療制度の充実を感じさせられました。

2週間のアメリカ滞在中では、現地の文化に触れる機会も多々ありました。フィラデルフィア



左から筆者、飯田育葉さん、原さやかさん



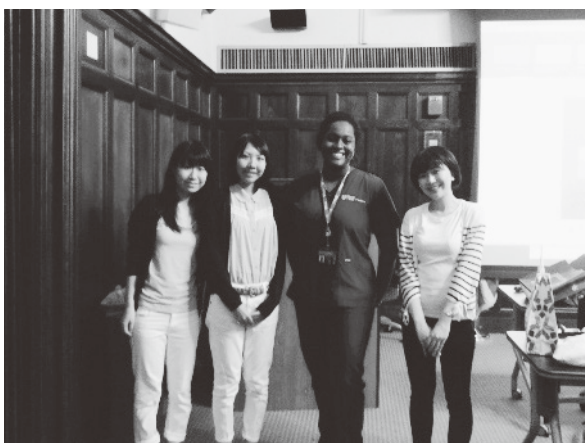
診療風景

は独立宣言が採択されたアメリカ発祥の地であり、アメリカの歴史に関する建造物が多数存在します。アメリカ独立のシンボルと呼ばれるリバティーベルやフィラデルフィア美術館を見学し見聞を広め、合間にはマーケットやショッピングセンターでの買い物を楽しみました。

また、週末にはアムトラックでワシントンD.Cを訪れました。日帰りでの訪問だったので時間は十分とは言えませんでした。航空宇宙博物館と自然史博物館で様々な展示物を見学し、ホワイトハウスにも足を運びました。JASSO海外留学支援プログラムでアメリカの大学を訪問した場合、食事や休日の過ごし方などは自分たちで決める場合がほとんどです。慣れない英語でのコミュニケーションに悪戦苦闘しながらも、自分たちで計画を立て、公共の交通機関を利用して行動するということはとても良い経験になりました。

臨床実習の真っ只中でのJASSO海外留学支援プログラムの参加は可能なのか、申し込む前はもちろんのこと、出発直前にも大変悩みました。しかし2週間の滞在を終えて、参加して本当に良かったと思います。学生の中に海外の歯科医療の現状を知る機会というのは滅多にないことであり、意識の高い学生や先生方との触れ合いは大きな刺激となりました。臨床実習の最中であつたからこそ、診療見学を通して学ぶことは多かったように感じます。個人的には、引っ込み思案な性格を変える大きなきっかけにもなりました。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった魚島先生をはじめ、石田先生、快く送り出してくださった臨床実習ライターの先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。



留学担当のK'SHELLEと



フィラデルフィアの街並みと共に

JASSO海外留学支援プログラム 三大学合同派遣に参加して

歯学科6年 鈴木 麻里恵

今年の3月に初めてタイ（コンケン大学）への短期留学に参加させていただきました。私が参加したプログラムは、今回初めて実施された三大学合同派遣でした。これは、東北大学、広島大学、新潟大学が連携し、より高度な歯学部教育を目指す事業の一環として行われたものでした。滞在期間は11日間で、東北大学から6人、広島大学から3人、新潟大学から6人の学生が参加しました。ここから私が体験したことについて、項目別に述べていきたいと思います。

①留学プログラムについて

コンケン大学でのプログラムは病院見学が主体で、そこにコンケン大学ツアーや開業歯科医院の見学、ワールドカフェなどが組み込まれていました。コンケン大学の病院は日本とは全く違う雰囲気でした。暑い気候からなのか、全体的に開放的なつくりになっていて、患者さんが裸足で歩いていたのが驚きでした。どの診療科においても学生が実習していて、先生のみならず学生たちがいろいろと説明してくれました。開業歯科医院は大学

病院と違ってかわり、2階建のとてもおしゃれな建物で、ホテルのロビーのような待合室があったことが印象的でした。ワールドカフェとは、グループを3つ作って議題について意見し合う討論会で、みんなでタイ滞在で学んだことを共有していました。

②タイでの生活について

コンケン大学の学生はみんなフレンドリーで親切で、いつも私たちのことを気にかけてくれました。さらに彼らの英語はとても分かりやすかったので、英語が苦手な私でもなんとかコミュニケーションを取ることができました。毎晩ご飯に連れていってくれたり、買い物につれていってくれたり、まるで現地の学生のように過ごすことができました。食べ物やビールはおいしいし、気候に関しても信じられないほど暑いわけでもなく、快適な生活を送ることができました。

③タイと日本の違いについて

タイと日本の大きな違いは、臨床実習の内容だ



コンケン空港にて



ソーラン節披露

と思います。コンケン大学では臨床実習は4年生から始まり、ミニリクも私たちの2倍3倍もありました。これは、タイの歯科医師不足問題が理由と考えられました。即戦力となる歯科医師を育成するため、大学のうちから多くの症例を経験させる方針のようです。英語教育も充実していて、授業やカルテ記載はほぼ英語が使われていました。そのため、タイの学生は日常生活においてだけでなく、診療内容についても英語でスラスラと説明することができていました。

④三大学間の違いについて

三大学間でも異なる点が多々ありました。新潟大学の強みは、診療参加型の臨床実習だと思いません。他の大学はやはり見学することが多いようで、うらやましがられました。東北大学は研究が盛んで、学生のうちから研究室に足を運ぶ人が多いようです。広島大学は英語教育に力を入れていて、英語を使った授業が行われていたり、留学に

参加する学生も多いようです。同じ日本国内の大学でも様々なところに違いが見られ、改めて自大学の長所に気づくことができました。

私がこの短期留学に参加したいと思ったきっかけは、海外で友達が作れたらいいなという思いと、さらに日本の他大学の学生とも交流できたら、人数も多くなって楽しそうだなという漠然としたものでした。そのような軽い気持ちから始まったのですが、予想した以上のことを学び、感じるすることができました。このプログラムが他のプログラムと異なることは、三大学が参加しているので、所々で自分の大学と他の大学を比較したり意見を言い合ったりすることができたことです。

たくさんの人と出会い、とても良い刺激を受けました。今の自分に満足せず、もっと上を目指していけるように努力したいと思いました。このような貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。



新潟大学メンバー



病院見学

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 池田 恵一朗



初夏に突入し暑い日々が増えてきた今日この頃、私たち新入生は新潟大学の学生として2か月が経ちました。一人暮らしや大学に慣れることに追われたあつという間な2か月でしたが、

とても密度の濃い時間を過ごしていると確信しています。たくさんの新しい友人や先輩、教授と出会いました。友人や先輩は実に様々なところから新潟に来ていて、地元では得られなかったような体験をしています。同級生は個性豊かな人たちが多くて一緒にいて飽きることがありません。先輩方は特に様々な価値観を持っていてそれを聞いているだけで勉強になります。私は男子校出身なのですが、とても楽しい学園生活を送ってきたので、高校の友達や先輩より楽しいと思える友人はいないだろうと思っていました。しかし今は高校の時より楽しくなるのではないかと考えています。そういう意味で一人暮らしというのは最高だと思います。掃除などの家事をするのは大変ですが何時に帰っても問題ないわけですから、友人と好きな時間まで遊ぶことができます。地元に戻りたいとは微塵も思いません。これからも一人暮らしを謳歌していきたいと思います。教授は優しい先生方ばかりで、とても恵まれたところに入校したと思っています。上級生になって受けられる講義が楽しみです。大島先生とは同じ高校出身だということが入学式後の懇談会でわかり、人とのご縁をひしひしと感じ大事にしていきたいと思いました。

このように、いかに自分が恵まれ幸せな時を過ごせているかを実感しています。これから6年間

長いようであつという間だと思えます。お金を出してくれている両親に感謝して、悔いの無いように時間をうまく使ってたくさんの経験をして有意義な6年間にしたいと思います。

拙い文章であります。これで入学生のことばとさせていただきます。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 宮澤 帆乃花



もともとわたしは料理をすることが好きで、将来は食べることに関する仕事をしたいと考えていました。それだけでなく医療や福祉の分野にも興味があったので、歯科衛生士と社会福祉士の両方を目指すことができる新潟大学歯学部口腔生命福祉学科の受験を決めました。

この学部の特徴である早期臨床実習では、治療の際に使用する道具の名称や使い方以外にも、患者さんとの接し方や歯科医師と歯科衛生士の仕事についてなど実際の現場でしか学べないことを学べるので、歯学に関する授業が少ない1年生にとって非常に貴重な機会だと考えています。1回1回の実習が常に新たな刺激となっています。

口腔生命福祉学科は20人という小規模な学科ではありますが、その分仲の良さはどの学部・どの学科にも負けないと思います。入学が決まったとき、新たな場で友達が出来るか不安でしたが、赤塚での宿泊研修や歯学部運動会などの行事を通じて仲良くなれました。全員女子の学科であるため、誰とでも気兼ねなく話せるところが私は好きです。先日初めて「口腔会」と称される女子会を開催しましたが、大盛況でした。次回の開催が今から非常に楽しみです。

また、私は医歯学合同の軟式テニス部に所属しています。中学でソフトテニスをしていただけで、大学では他のスポーツをしたいと考えていました。しかし、友達に誘われて一緒に見学に行ったとき、和気藹々とした部の雰囲気や優勝を目指してひたむきに努力する姿に惹かれて入部を決めました。優しく面白い先輩方や個性派勢揃いの同期とともに行う部活動はとても楽しいです。医歯学合同なので、さまざまな学科の人と交流できる点にも魅力を感じています。

率直に言うと、卒業後のビジョンはまだ明確には描けていません。だからこそ、これからの大学生活でいろいろなことを学び、4年後に後悔のない決断を下せていたらいいなと思います。

入学生の言葉

口腔生命福祉学科1年 春 山 海 帆



新潟大学歯学部口腔生命福祉学科に入学しました。これまでの人生にはなかったことをたくさん経験しています。

まずは、新潟での一人暮らしです。私は岩手県出身ですので、まったく知らない土地で生活していくのは不安でした。しかし、いざ始めてみると、目的地に行くことなどはもちろん、家事もしっかりこなせています。一人暮らしを始めて、自分はやればできるのかもしれないと思いました。また、自分の身の回りのことを積極的に手伝ってくれた家族への感謝の気持ちも確認することができました。

新潟大学歯学部の大きな特徴のひとつである、1年生での早期臨床実習も充実しています。大学病院内をユニフォームで歩いたり、患者さんや病院のスタッフの方々とコミュニケーションをとったりなどを授業で体験することができ、とてもうれしく思っています。また、治療中の作業を少しお手伝いさせていただくこともあります。まだ専門科目の授業は始まっていませんが、実習を通じて将来の仕事内容を知ることができます。それと

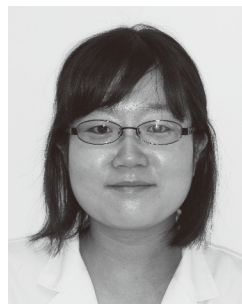
同時に、国家試験合格をめざし勉強に励む意欲も湧いてきます。

口腔生命福祉学科は、歯科衛生士と社会福祉士両方の資格取得を目指したカリキュラムとなっているため、幅広い知識が身につけられる学科だと感じています。とくに社会福祉士の仕事内容は多岐に及ぶと聞きます。だからこそ、私は実習以外の一般教養の講義も重要だと感じました。多様な知識を持つことは社会に出ても強みですし、なによりも視野が広がっているという実感が湧くととてもうれしいです。新潟大学には多数の学部が揃っているので、所属する学部以外の分野も気軽に学ぶことができます。このような大学の長所を、自分の成長に役立てていきたいです。

数カ月の生活のなかで、「大学は人として大きく成長する場」だと思いました。これからも大学での経験から様々なものを吸収し、自分の理想に近づいていこうと思います。

入学者のことは

包括歯科補綴学分野 設 楽 仁 子



今年の4月に新潟大学大学院医歯学総合研究科の包括歯科補綴学分野へ入学し、早3ヶ月が経とうとしています。指導医の先生のもとで迷惑をかけながら、臨床や技工物の製作をする

毎日です。そもそも私は学生の頃は大学院進学について全く考えていませんでした。研修医時代に臨床に少しずつ携わっていくにつれ、今の自分が開業医でやっていけるのだろうか、それとももう少し大学で勉強しようかと悩むようになりました。先生方や先輩に相談し、大学院進学を決めましたが、どの科に入学するかをずっと迷っていました。ぎりぎりまで悩み、結局決断をしたのが大学院願書提出締切日当日でした。研修医で一番診療に関わったのが義歯でありもっと勉強したい、また、顎義歯もやってみたいと思ったのがきっかけでした。

大学院入学後は日本補綴学会と顎顔面補綴学会に参加させていただきました。今までほとんど学会に参加したことのなかったのでとても新鮮であり、貴重な体験でした。特に顎顔面補綴学会での質疑応答の時間は白熱があり、圧倒されていました。8月には顎口腔機能セミナーのサマーセミナーに参加します。他大学の大学院生とグループと徹夜しながら研究すると聞き、研究をしたことのない私はとても緊張していますが、他大学の院生との交流は楽しみです。学生時代、他大学生と交流してこなかったのでこの4年間は様々な大学の学生や職種の人と積極的に関わっていききたいなと思っています。

今後研究が加わるとさらに忙しい毎日になりますが、研究と臨床ともに頑張っていきたいと思えます。ぼんやりとしかどのような研究を行いたいかはみえていませんが…。4年間勉強させていただける機会を得たので後悔のないよう精進していきたいです。ご迷惑を多々おかけすると思えますが、先生方今後ともよろしくお願いいたします。

入学者のことば

歯科矯正学分野 市川佳弥

臨床研修終了後の進路に悩む先生は多いと思います。私も大学院進学か一般開業医への就職か悩んだ末、歯科矯正学分野への進学を決めました。

歯科矯正に興味を持ったのは自らが幼い頃に矯正治療を受けたことがきっかけです。治療前後の顔貌写真やエックス線写真を比較して、その変化



新人歓迎会にて指導医朝日藤先生（右）と。（筆者左）

に感銘を受けたことを今でも覚えています。大学は矯正歯科医になることを目標に歯学部へ入学しました。しかし、卒後1年間臨床研修を行っていく中で、矯正治療の必要性を実感するとともに、矯正治療のデメリットについても学び、疑問を持つこともありました。実際に自分で診療したことで一般歯科への興味も湧き、開業医へ就職することも考えましたが、大学院及び開業医の双方の先生方にお話を伺い、やはり1番興味のある歯科矯正をデメリットも含めてじっくり学びたいと考え、大学院へ進学することとしました。

入局当初は不安と緊張でいっぱいでしたが、医局の先生方は気さくで明るい方ばかりで、忙しくも楽しくあつという間に3ヵ月が過ぎました。この3ヵ月間は主に日中は先生方の診療の見学や講義、診療終了後は実技実習を行ってきました。恥ずかしながら初歩的な質問ばかりしていますが、どの先生も快く親身にご指導してくださり、素晴らしい先輩方に恵まれたと感じています。診療後には食事に連れて行っていただき、他愛のない話から矯正の話までしていただきます。そんな中で、矯正は奥が深く（どの分野もそうですが）、まだまだスタートラインにも立てていないのだと実感しました。

この先、たくさんの苦難が待ち受けていると思いますが、このような恵まれた環境で学ばせていただけること、ご指導して下さる先生方、応援してくれる家族への感謝を忘れずに大学院生活を送っていききたいと思います。

「入学者のことば」

口腔生命福祉学専攻 木村有子
博士後期課程



この度、口腔生命福祉学専攻博士後期課程に社会人入学致しました木村有子と申します。平成25年3月に口腔生命福祉学専攻博士前期課程を卒業いたしまして、2年ぶりに新大に戻って参りました。どうぞ宜しくお願いいたします。

今回「入学者のことば」の執筆の依頼を頂きまして何を書こうかと迷いましたが、やはりこの歳（笑）で大学院で学ぶことになりました経緯をお話させていただきます。私は東京にある大学附属歯科病院に勤務して20数年になります。博士前期課程入学の際の動機としては、自分の母校である専門学校が廃校となり、なんとなく心の拠り所がなくなったと感じておりました。また、自分が今まで業務として経験してきたことを何にも形に残せてないな…とも感じておりました。歯科衛生士歴20年を目前にこの先の自分の歯科衛生士像が描けずにいたようです。そんな時に口腔生命福祉学科の非常勤講師としてお世話になっておりました福島先生や隅田先生に相談したところ、大学院の社会人入学という道があることを教えていただき、「論文を書いてみたい」という思いから門を叩くことになりました。ちょうど入学時期に職場の異動も重なり、大学院との両立は想像以上に目まぐるしい日々でした。なかなか論文が進まず先生方には多大なるご迷惑をお掛け致しましたが、何とか無事に卒業することができました。あれから2年が経過し、論文投稿・雑誌掲載も一段落したことから本年4月に博士後期課程に入学いたしました。後輩からは「あの苦しかった日々を忘れたのですか？」と驚かれましたが（笑）、博士前期課程を卒業し新たに母校や恩師が出来たこと、また当初の目標であった「論文が書けた」ことは私の中で少なからず自信に繋がっているようです。今年度新たに勤務先で「臨床教員」という役割を担うことになりました。博士前期課程で学んだこと、更に博士後期課程で学ぶことを糧に今後も臨床家として新米研究者として邁進して参りたいと思っております。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻 佐藤 茜
博士前期課程

4月より口腔生命福祉学専攻博士前期過程に入学しました佐藤茜です。私は、今年の3月に新潟大学歯学部口腔生命福祉学科を卒業しました。4

年間の思い出というものは数えきれなく、正直勉学に励んだというよりは、学校外での活動ばかりが中心の毎日でした。実習が終わると同時に走ってアルバイト先に向かい、稼いだお金を貯めて週末や長期休みには国内、海外様々なところへ出かけました。あまり勉強熱心な学生ではなかったかもしれませんが、とても楽しい4年間でした。そんな私が大学院に入学しようと思ったきっかけは、海外で働きたいと思ったからです。これからの将来を考えたとき、今のまま社会人になった自分の姿を想像し、純粋に面白くないなと思いました。そして知識も経験もない状態では、外国の歯科衛生士資格をとろうと思っても無謀であり、修士課程へ進み学びを深めることがその道につながるのではないかなと考えたからです。

現在、私は摂食嚥下リハビリテーション学分野の諸先生方のお世話になり、日々病棟で臨床経験を積みながら、勉学に励んでいます。最初は、自分の想像していた大学院生活とのギャップに戸惑うことが多く、このまま大学院での勉強をつづけるべきかどうか悩んだ時期もありました。しかし、今までの自分の甘さを反省しこれからの2年間は強い意志を持ち勉学に励みたいと考えています。臨床の場面では、自分の知識不足を痛感する日々が続いています。しかし、先生方の熱心なご指導もあり恵まれた環境の中で、少しずつではありますが成長を感じています。井上誠教授からは「2、3日寝ないで論文をよむ日があってもいい。泣くくらい勉強しろ。」とのお言葉をいただき、泣きたくないなあと思っているのが本音ではありますが、2年後に胸をはって卒業できるよう頑張りたいと思います。



(筆者右)

入学を祝して



入学を祝して

歯学部長 前田健康

平成27年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。新潟大学歯学部に入學された皆さんに、教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。厳しい入学試験を突破し、大学での新たな生活への期待に胸を膨らませていることと思います。また保護者ならびにご家族の皆様の方々にも心よりお慶び申し上げます。皆様方のご期待にそえるべく、新潟大学歯学部でその能力をさらに大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

新潟大学歯学部は1965年に設置され、本年、創立50年目を迎えました。半世紀にわたる新潟大学歯学部の歴史は在学生、全国各地で活躍している卒業生、教職員の努力の上に築かれてきたもので、新入生の皆さんと新潟大学歯学部のさらなる歴史を築いていきましょう。

超高齢社会を迎え、歯学に対する期待は単なる虫歯や入れ歯の治療から大きく変わり、歯科治療も健常者型から高齢者型へと変化してきています。国立大学改革が進む中、文部科学省は各大学、各学部のミッションの再定義 (http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1341970.htm) を進め、その中で健康長寿社会実現への貢献、医療イノベーションの創出、国際的な医療課題の解決の3点を歯学への社会的な要請として明示しました。また新潟大学歯学部のミッション (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/04/28/1341977_01.pdf) として、問題解決能力を持った歯科医師養成と国内外の人材養成モデルの構築、口腔のQOL向上を目指した基礎・臨床研究、有病・高齢者への対応や歯科再生医療の実践を定めました。この1番目のミッショ

ンは教育に関することですが、私ども歯学部の教育目標として、歯学・口腔保健福祉学の分野に貢献する専門職業人の育成を掲げています。皆さんがこれから学ぶ新潟大学歯学部では「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。新潟大学歯学部の教育スタッフは、学部教育を生涯学習の第一段階と位置づけ、課題探求・問題解決能力の育成を重視し、その後続く学習を通して、主体的に専門性を向上させる人材を養成することを目指しています。このため、私どもは常に教育改善に目を向け、全国歯科大学・歯学部の中でも早くから、課題探求・問題解決能力の育成に注目し、Problem-based learning (PBL) という学習方法を導入しています。このPBLでは教員は学習者の補助者にすぎず、「学習の主体は学生である」という概念で、学習が進んでいきます。また、歯科医療・口腔保健医療教育の集大成である臨床実習は、新潟大学医歯学総合病院を学びの場として、学生諸君が担当医の指導の下、診療参加・実践型の臨床実習を展開しています。ここで強調しておきたいのは、新潟大学歯学部の教育の主役は、教員ではなくて、学生諸君であるということです。自ら努力して勉強しなければ、皆さんが望む成果を得ることができません。皆さんと教職員が協働して皆さんの夢を叶えましょう。

平成16年度にすべての国立大学は法人化され、私ども新潟大学も国立大学法人新潟大学となりました。この国立大学法人化により、全国国立大学歯学部同様、新潟大学歯学部も厳しい競争的社会の中に置かれることとなりました。新潟大学歯学部はこの厳しい環境の中、各種競争的資金を獲得し、次世代を担う若手人材の育成に力を注いでいます。平成18年度の文部科学省事業「特色ある大

学教育改革支援プログラム」、平成24年度の文部科学省事業「大学間連携共同教育推進事業」に採択され、全国歯科大学・歯学部のモデルケースとして高い評価を受けるとともに、歯学教育改善の先導的な役割を期待されています。また、大学院課程では平成17年度「魅力ある大学院教育イニシアチブ」、平成20年度には「大学院教育改革支援プログラム」に採択され、学士課程から大学院課程まで、第三者によるレビューに裏付けられた高い教育の質を担保し続けています。また、平成21年度には「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に歯学部単独のプログラムとして、全国で唯一採択され、近年では学部学生の海外交流事業に平成23年度から5年間連続で採択され、グローバルに活躍できる人材の育成にも力を注いでいます。

厳しい国家財政の中、平成25年2月から始まった歯学部大型改修工事が進められてきましたが、本年夏には3期にわたる歯学部校舎大型改修工事が完了し、既に竣工済みの第1期、第2期工事分

と合わせ、17,500㎡の校舎改修が終了し、新たな教育環境で教育・研究が進められることとなっています。また、学生教育環境整備にも力を注ぎ、歯科治療をシミュレートする実習設備（ファントム実習設備）の整備、ポリクリ用の相互実習室の新設、学生診療用の歯科ユニットおよび学生技工機の更新に代表されるように、各種教材、教育機器の整備・充実にも努めています。これらの高度かつ快適な教育環境を積極的に活用し、自己の目標達成のために、切磋琢磨し、たゆまない努力をお願いします。

勉強の話ばかり致しましたが、20代前後のこの時期、勉強のみでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、教養のある社会人となるよう人間性を磨いてください。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に、平成27年度新入生および保護者の皆様全員でまた朱鷺メッセで喜びを分かち合いましょう。





入学を祝して

医歯学総合病院総括副病院長
(歯科担当) 高木 律 男

歯学部歯学科、口腔生命福祉学科の新入生・編入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、ご家族の方々も受験生の方々と同様に肩の荷が下りたことと思います。既に入学が決まってから少し時間が経過しましたが、人生における一つの節目を乗り越えたという達成感と大学という新しい勉強の場にいろいろな期待感と若干の不安感を抱いていることと思います。遠く全国から親元を離れて新潟の地に来られ、一人暮らしを始めた方も多いでしょう。これまで以上に自由になったことが多いと思いますが、逆にそれは自分の責任となることを意味しており、これからの生活そのものが多くの自己責任の上に成り立っていることは忘れないでください。

まず、気を付けていただきたいのは健康管理です。原則は規則正しい生活と良い睡眠、良い食事ということになります。すなわち、良い生活習慣を身につける時期ということになります。もちろん、大学生として「よく学び、よく遊べ」ということが可能な若さ(元気)のある時期ですので、ある程度の無理もきくのかもかもしれません。講義に出る、実習に出る、さらには将来的に病院に出るということを考えると、遊ぶ時間と学ぶ時間のけじめをしっかりとつけて、有意義な大学生活を送っていただきたいと思います。なお、不正薬物などについては、一時的な問題にとどまらず、一生を台無しにする可能性が高いことから、絶対に手を出さないでください。

次に病院についてです。歯学部は歯科医師または歯科衛生士、社会福祉士としての専門性が問われる分野に進むための学部ですので、学生の間頑張った力が潜在能力として一生の宝となり、いろいろな場面で生かされることになります。医療の中心は患者さんに対する診療行為ということになり、歯科関係では口の中の狭い場所に対して細かな処置を行うという特殊な技術の修得が求められます。当然ですが、知識と技術の積み上げが必

要で、1年生からの座学とともに、学年が進むにしたがって基礎実習、臨床実習という流れで患者さんへの診療が可能になります。既に早期臨床実習において新潟大学医歯学総合病院内を歩いてみたと思います。歯科は病院外来棟の4階にあり、1フロア全体にユニット(診療台)が配置されています。臨床実習ではこれらのユニットを使用して患者さんを直接診療するという診療参加型臨床実習を行います。そのための準備として、5年生の夏に知識を問うCBT(Computer Based Testing)というコンピューターを使用しての試験と技術・態度を確認するOSCE(Objective Structured Clinical Examination)が行われます。これらの試験は全国的に実施されるもので実施機構から試験監督の先生がお二人いらっしゃるという厳粛な試験です。その試験結果は臨床実習への進級判定としても使用され、臨床実習を行うための最低限の知識・技術・態度が担保されます。膨大な知識ですので、それまでに行われる座学・実習で得られる情報や技術を少しずつ体得してください。共用試験を合格してからは、臨床実習における日々の診療において応用することで、知識はより深まり、歯科医師国家試験への対応も十分に行えることになるでしょう。

最後に、人間関係についてです。大学生活では一生付き合える大切な友人との出会いがあります。1学年が1クラスですので、皆の名前を覚えることも可能でしょうし、実習でペアになったり(相互実習も含めて)、一緒に提出物を考えたりということも多いと思います。さらに、部活などに参加すれば、より多くの人との出会いが待っています。いろいろな人との付き合いも、臨床に出て患者さんとのコミュニケーションをとるためには必要不可欠です。ぜひ、多くの事を学び、元気な挨拶に始まるコミュニケーションを大切に実りある学生生活になることを祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

国立大学改革強化推進補助金 【特定支援型】による教員採用について

文部科学省は「国立大学改革プラン」において、優秀な若手・外国人の力で大学力を強化するため、シニア教員から若手・外国人へのポスト振替等を進める意欲的な大学を資金面で積極支援することとしています。新潟大学本部のご協力の下、歯学部では特定支援型「優れた若手研究者の

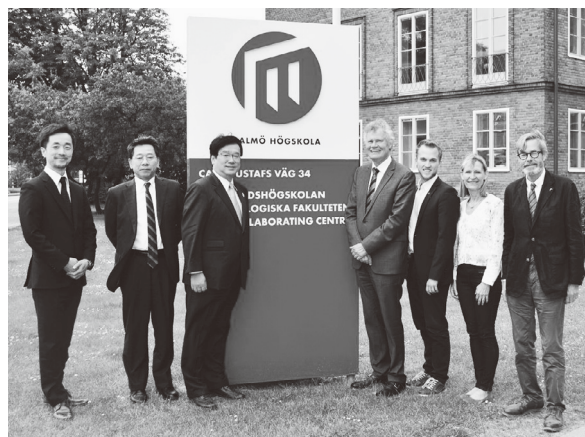
採用拡大支援」の配分を受け、平成27年3月1日付で特任助教として3名を採用し、同年4月1日付で年俸制教員に移行させました。この3名の教員は前川知樹、川崎勝盛、加藤寛子の3氏で、平成27年度文部科学省特別経費で設置された高度口腔機能教育研究センターに配置されました。

部局間交流協定の締結について

歯学部として学生・教員交流によるグローバル人材の育成、共同研究の推進、国際協力・医療貢献活動を念頭におき、外国歯科大学・歯学部と部局間交流協定の締結を推進してきましたが、平成27年6月16日に、前田歯学部長、宮崎副歯学部長と小川准教授（現在、WHO口腔保健統括官として派遣中）がスウェーデン王国・マルメ大学歯学部を訪問し、部局間交流協定を締結しました。

相互の大学・学部紹介の後、学生交流を含めた

姉妹校交流について意見交換、協定締結合意後、両学部長が協定書に署名しました。マルメ大学歯学部はPBL教育で著名であり、その教育手法はマルメモデルとして全世界に知られており、また北欧は口腔保健の分野において世界をリードしているため、歯学科、口腔生命福祉学科学学生のみならず、大学院、教員レベルでの交流が期待されます。



平子文科省医学教育課企画官FD講演会について

4月16日に文部科学省高等教育局医学教育課平子企画官をお招きし、「歯学教育の現状と改革の方向性について」との題目でFD講演会を開催しました。講演は現在の歯学教育をとりまく環境、歯学教育の改善・充実、歯学教育分野別認証評価、高等教育改革の最近の動向の4つの視点から構成されていました。

平子企画官からは歯科医療サービスの提供体制の変化について、地域包括ケアや多職種連携の視点も踏まえ、これからの歯科医師には医療、介護に携わる多職種が綿密な連携体制をとり、適切かつシームレスな医療・介護を行う必要があることから、コミュニケーション能力が重要であることや、歯科医師の需給問題について講演いただくとともに、広く国立大学を取り巻く情勢と、大学改革の必要性について、豊富なデータと若手教職員にもわかりやすい講演をいただき、満員の会場からは「多職種連携のため、積極的にコミュニケーションをとっていきたい。」「こ

れからの歯科医師に求められる新たな教育の必要性がわかった。」などの声が多数聞かれました。

講演終了後、歯学部長ら歯学部執行部との意見交換が行われ、その後、新潟大学歯学部が積極的に行っている診療実践型臨床実習の現場を視察し、平子企画官から新潟大学歯学部の学生教育の取組について期待の言葉が述べられました。



タイ・チェンマイ大学歯学部、インドネシア・インドネシア大学歯学部からの研修について

4月7日にタイ・チェンマイ大学歯学部から6名の訪問団が本学歯学部を訪問し、学部長懇談、高齢者歯科医療および摂食嚥下リハビリテーションについての研修を行った後、チェンマイ大学の高齢者研究プレゼンテーションに引き続いて研究交流について意見交換を行いました。また5月20日にインドネシア・インドネシア大学から歯学部長以下4名の歯学部代表が本学歯学部を訪問し、大学間の学部学生交流

(SS/SV短期留学プログラム) および教員・研究者交流について協議を行いました。



新潟高等学校特別講義の開催について

新潟県立新潟高等学校は、「新潟県の医歯学の大学研究施設の訪問研修を通じ、最先端の医療施設、医療技術に関する知見を広げる。また、医師の講演を聴いたり実習体験したりして、高い動機付けを行うとともに、医療に従事する倫理観の涵養を図る」ことを目的として、「新潟大学医学部・歯学部訪問」を実施しています。今回、平成27年8月5日に、同校理数科メディカルコースの高校2年生45名ならびに教諭2名が新潟大学歯学部を訪問しました。

歯学部長の前田健康教授の挨拶の後、微生物感染症学分野の寺尾豊教授による「口の健康と微生

物学：観て考えて」、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授による「摂食嚥下障害とその治療」の2つの模擬講義が開講されました。また、新潟高等学校出身で新潟大学歯学部歯学科を卒業し、現在、臨床研修医として診療に従事している2名の若手歯科医師から、なぜ歯学部に進学したか、大学生活や将来の夢などについて話がありました。高校生たちは、講義や高校のOBとの懇談を通して、自分の進路や適正について深く考え、将来、医療職を目指す気持ちを新たにしようでした。

(本項 小野和宏教授 執筆)



平成27年度オープンキャンパスの開催について

8月10日全学主催のオープンキャンパスが開催されました。当日、32℃を超えるうだるような猛暑の中、県内外から165名の参加者がありました。学部長挨拶のあと、小野学務委員長による全体説

明、寺尾入試委員長による入試説明、井上教授による模擬講義、卒業生による学部紹介、施設等見学が行われました。



日本歯科医学教育学会システム開発賞の受賞について

7月10、11日の両日、鹿児島市で開催された第34回日本歯科医学教育学会総会および学術大会において、小田陽平先生（組織再建口腔外科学分野助教）が「診療参加型歯科臨床実習におけるweb公開型eポートフォリオー第2報 運用実績とシステム改善についてー」という演題で口演し、日本歯科医学教育学会システム開発賞を授与されました。本研究内容は本学で独自に開発した電子ポートフォリオに関するもので、臨床実習において「何をやったか」だけでなく、そこから何を学び、何を考え、どのような学習をしたか、また、

それに対して教員からどのような指導を受けたか等の「コンテンツ」を実体化し、さらに電子化、データベース化して蓄積することにより、検索や振り返り学習に役立てようとする新潟大学歯学部オリジナルの特色ある取り組みです。診療参加型臨床実習のさらなる充実が叫ばれている昨今、全国の歯学教育関係者から注目されることとなりました。なお、この電子ポートフォリオシステムは2013年度から運用を開始し、現在に至るまで歯学科および口腔生命福祉学科の臨床実習で活用されています。

歯学部納涼会の開催について

7月22日（水）にホテルオークラ新潟において恒例の歯学部納涼会が開催されました。この会は数年前までは教授会納涼会として開催されていたものですが、助講師会、助教会の先生方にも参加を呼びかけ、一昨年からは大学院学生にも拡大し、本年は総勢97名の参加者となりました。教員、大学院生の親睦を深めるため席順は抽選とし、短い時間ながら職種を超えた会話が進み、有意義なひとときを過ごすことができました。



新入生合宿研修を終えて

う蝕学分野 助教 山中 裕 介

平成27年4月11日（土）、12日（日）の2日間、新潟市西区赤塚のメイワサンピア新潟にて、新潟大学歯学部新入生合宿研修が開催されました。この研修は、歯学科および口腔生命福祉学科の新入生および3年次編入生を対象として行われるものです。今回は、歯学科44名（3年次編入生5名を含む）、口腔生命福祉学科24名（3年次編入生4名を含む）、学生アシスタント6名、教員24名、そして事務職員3名の総勢101名での2日間にわたる研修となりました。これから6年間もしくは4年間共に過ごすクラスメートや教員との交流を図り、さらにはグループ討議、様々な講習会や講演会を通じて、歯学部生としてのあり方、歯学に対する修学心を高める事を目的としております。私も、自分が入学した2002年度以来の参加であり、自分の時はどうだったかな～、と昔を思い出しつつ、参加を楽しみにしておりました。

初日は、歯学部集合組と新大西門集合組に分かれ、それぞれのバスに揺られてメイワサンピアに到着しました。私は一足先に、会場で他の先生方と一緒に待っていました。全員が到着して早々、山村教授のかけ声のもと、玄関で集合写真撮影。ほぼみんな笑顔で写っているの、最初からリラックスできていたのかな？と言ったところで（写真1）。



(写真1)

2階の会場に移動してからは開会式が行われ、前田健康学部長、高木律男副病院長の挨拶に始まり、参加スタッフの自己紹介の後、歯学科および口腔生命福祉学科のカリキュラム、健康管理に関する事など、充実した学生生活を過ごしていく上で重要と思われる事柄について各担当教官から説明がありました。その後、PROGテストが行われました。厳しい大学入試試験を終えて数ヶ月…テストです。と言っても、学力を診査するものではありません。PROGテストは、専攻・専門に関わらず、一社会人として求められる汎用的な能力・態度・志向を評価するためものです。“今の自分”を見つめる機会になったでしょうか（写真2）。

休憩を挟み、8～9名の8班に分かれて、ニックネームを記したネームプレート作りと自己紹介の後、2年生の学生アシスタントの登場です。1年前はこの新入生合宿研修にいた彼らが、頼もしく堂々と自己紹介している姿は、新入生にとって身近な目標となったと思います。その後は、みんなで昼食をとり、全体の雰囲気もより和やかになってきたようでした。

昼食後の自己研鑽セミナーⅠでは、魚島教授司会のもと、「砂漠で遭難したときにどうするか」



(写真2)

と題したコンセンサスゲームが行われました（写真3）。各自が渡されたリストにある12の品物に必要な度の順位をつけて、それを各班の中で意見をまとめていくというものです。みんなそれぞれの意見をぶつけあいながら、仲良くまとめていきました。続いて行われた自己研鑽セミナーⅡでは、藤井教授から「面接試験を再考しよう！」と題して、面接試験の質問内容についての問題点と受験生の視点から見た適切な質問内容を検討しました（写真4）。各班の中で、印象に残った面接官の質問を列挙し、K-J法（挙げられた項目全てを同列に列挙、分類し、図解等にまとめる方法）を用いて、質問のグループ分けをしました。その後、まとめたグループプロダクトをみんなの前でプレゼン。緊張してうまく話せないかなと思いきや、意外と慣れた感じが出ていたのには驚きました。

初日の行事は終わり、夕食です。会場前で、2年生の学生アシスタントが準備した席のクジを引いて、1日過ごしたグループとは異なったメンバーとの会話の機会がもたれました。同時に、2～6年生による部活動紹介が行われ、1年生はひ

とつひとつ熱心に聞いていました。各部とも、一緒に活動してくれる部員を求め、熱烈な勧誘合戦が繰り広げられました（写真5）。私としては、先輩達と、いずれは後輩達との交流の持てる部活動には、是非参加してもらって、充実した学生生活を送ってもらいたいと思います。夕食後は、教職員との懇談の場が設けられ、準備しておいたお菓子やジュース等を飲みながら、夜遅くまでにぎやかに会話を楽しんでいました。

2日目は、朝食後に学生アシスタントによるガイダンスとクラス幹事の選出、教員によるガイダンスでダブルホーム（第一ホームは、専門の「学部・学科」。また、第二ホームは、本学の教員が地域と連携して取り組んでいるプロジェクト。）、学生支援、セクハラ相談や健康管理についての説明がありました。

その後、瀬尾教授によるBLS（Basic Life Support）の講習会が行われました。BLSとは、心肺停止状態の人に対して行う救命処置のことです。講習では、専用のマネキンを用いて、気道の確保、人工呼吸や心臓マッサージを行いました。



(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)

さらに、AED（自動体外式除細動器）の使用方法についても学びました（写真6）。BLSは、患者さんが容体急変などで心肺停止状態に陥ってしまった時の即時対応として行われています。今後、医療従事者として様々な人と接していきますが、いざという時にBLSの知識があれば、慌てることなく適切な処置を行うことができます。

BSL講習後の閉会式では宮崎副学部長のご挨拶をいただき、2日間の研修が終了となりました。この研修を通じて、学生同士の距離が縮まったように思います。これからの長い学生生活の苦楽をともにする仲間となるので、みんなで切磋琢磨して、6年後あるいは4年後に訪れる大きな目標を乗り越えていてもらいたいと思います。



ここが知りたい！ What's 大学院？

歯周診断・再建学分野 高橋直紀



歯周診断・再建学分野の高橋です。大学院を卒業してかなりの年月が経ってしまいましたが、原稿依頼を頂きました。知っているようで知らない大学院の世界をQ&A形式で書こう

と思います。大学院や医局によっては若干異なる部分もあると思われるのであしからず。大学院進学を考えている方の参考になれば幸いです。

Q1：大学院ってそもそも何ですか？

大学院（だいがくいん）とは、大学の学士課程の上に設けられ、学士課程を卒業した人、およびこれと同等以上の学力を有すると認められた者を対象に、学術の理論および応用を教育研究し、文化の進展に寄与することを目的とするものである（学校教育法第99条）〔Wikipediaより〕。すなわち簡単に言うと、学部を卒業した人がもう少し専門的な勉強したいと思って入る組織のことです。

Q2：博士課程って何ですか？

我々が言う博士課程は博士後期課程のことで、大学院4年間のこととなります。必修講義の履修と、学位論文を書いて学位審査に合格すれば、晴れて博士（歯学）になることができます。博士にも、博士（医学）、博士（薬学）など、様々な種類がありますが、英語にするとすべてPh.D. (Doctor of Philosophy) です。ちなみに、歯学部を卒業して歯科医師国家試験に合格すると、D.D.S. (Doctor

of Dental Surgery) の称号が与えられます。先生方の肩書きにある「Ph.D」「D.D.S.」にはそのような意味があるのです。

Q3：博士号を取得するといふことがあるのですか？

単なる肩書きです（笑）ただ、本当に大切なのは、その肩書き自体ではなくて、それを得るための過程で培われた様々な「力」です。自分の研究に必要な情報を文献やインターネットから入手し、有用な情報だけを取捨選択する「検索力」であったり、英語論文の読み書きから得られる「語学力」、学会発表で多くの研究者との意見交換を通して培われる「コミュニケーション力」、実験で得られた個々のデータを論理的に考える「考察力」など、社会人として必要な能力ばかりです。いずれは臨床家となる上でも必要不可欠な能力だとは思いませんか？それらを系統立てて効率的に習得することができる場所、それが大学院なのです。

Q4：大学院生って普段何をしているの？

大学院生の本業である「研究」がメイン活動であることは言うまでもありません。それに加え、必修講義の履修、外来での診療、講義や学生実習のアシスタント、医局のお仕事、連携病院でのアルバイト等々。今さっと思いついただけでもこんなにありますが、無駄な仕事はひとつもありません。いつの日かどこかで役に立つ経験となるはずです。学部生よりも自由度が高い分、自分できちんと計画性を持って、積極的に学習しようとする姿勢が必要になってきます。

Q5：研究ができるか不安なのですか？

まったく心配いりません。学部生の頃から基礎系の教室に出入りしていた方を除いて、ほぼ全員が研究の初心者です。DNA、RNAとは何か？ピペットの持ち方は？など、基本的なことから優しい先輩たちが手とり足とり教えてくれるに違いありません。

Q6：経済的にどうなのですか？

研修医を終えた後、再び学生に戻るわけですから経済面は皆さん心配されるようです。確かに学費・生活費はかかりますが、授業料免除制度や、無利子の奨学金があります。しかも大学院中に優秀な成績を収めると奨学金が返済免除になる制度もあり、実際に免除になった方も周りにいます。また、TA（ティーチングアシスタント）、RA（リサーチアシスタント）、連携病院でのアルバイトなどにより、普通の生活ができる程度の収入は得られます。もちろん学業が最優先ですので、その辺はバランスよく行うことが大切です。

Q7：大学院を卒業した後の進路は？

色々です。大学で上を目指す、基礎研究者になる、海外留学する、開業する、勤務医になる、結婚して永久就職する等々。これらの選択肢を残しておいて、自分の適性を判断するために大学院へ進学するのもよろしいのではないのでしょうか。長い人生の中のたった4年間、決して遠回りではな

いと思います。ちなみに、私は大学院卒業直ぐに渡米し2年間の留学を経て、今現在は歯周診断再建学分野のスタッフとして、研究を中心に臨床と教育に励んでいます。

Q8：どこの大学院がおすすめですか？

その分野に興味がある、専門的な知識・技術を習得したい、誘ってくれる先輩がいる、医局の雰囲気良さそうなど、大学院の分野を選ぶ理由は何でもいいと思います。大切なのは「どこに入るか」ってことより「そこで何をするか」です。博士号+αの付加価値を見出すために最大限の努力をする、それが大事です。

ちなみに最後に宣伝になりますが、当分野の大学院では卒業までに「博士（歯学）」と「日本歯周病学会認定医」を取得できるような体制が整っています。研究と臨床のバランスを取りながら大学院生活を送りたい方にはいいかもしれません。もしご興味があれば、まずは周りにいる先生方に直接話を聞いてみて下さい。

参考ホームページ



歯周診断・再建学分野HP



歯周-全身プロジェクトHP

『大学院に行こう』

鶴岡市立荘内病院 歯科口腔外科 齋藤大輔

はじめまして。口腔再建外科の齋藤大輔です。私はこの春、無事に新潟大学医歯学総合病院組織再建口腔外科学分野の大学院を卒業し、現在は山形県の鶴岡市立荘内病院歯科口腔外科に出向中です。今回「大学院に行こう」への原稿依頼がありましたので、自分の大学院での生活や学んだことなどを紹介したいと思います。

皆さんは大学院と聞くとどのようなイメージを持っているでしょうか？朝から晩まで研究漬けで、研究室に籠もりっぱなしというイメージでしょうか？研修医時代の自分はそのようなイメージを持っていました。ところが口腔外科系の大学院の1年目はひたすら臨床です。私が大学院1年目の時はローテーターとして外来・病棟・麻酔科を4か月ごとで回り、口腔外科・歯科麻酔科の基礎を学びました。指導医のもと埋伏抜歯や小手術を学ぶのですが、最初からうまくいくわけもなく、ひたすら汗をかく毎日でした。また歯科麻酔科では、優しい先生方からラインの取り方から挿管、術中管理と丁寧に教えてもらいました。もちろんラインがとれず失敗したり、挿管がうまくいかないことも多々あり、汗だくになりながらやっていました。初めて経験することが多すぎて、この1年間はあっという間に過ぎてしまいます。2年目からいよいよ研究がスタートします。当科では基礎研究と臨床研究があります。基礎研究へ進む人は臨床を離れ研究に専念します。臨床研究の場合は臨床を継続しながら対象患者からデータを採取していきます。自分の研究テーマは『顎変形症』に関する臨床研究であったので、臨床を続けながら研究をすることとなりました。前任の齋藤力名誉教授、小林正治教授のもとで顎変形症を学びながら必要なデータを採取しました。3年目になるとデータも徐々に集まってくるので様々な統

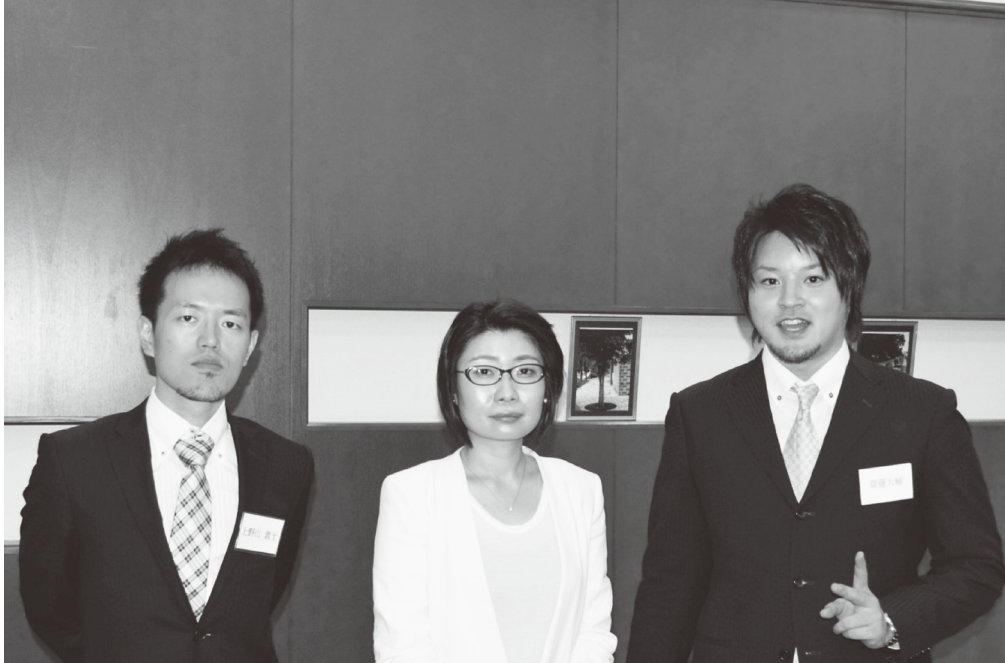


計的手法を用いてデータの解析を始めました。もちろん予想通りの結果は出ないので、追加の研究もはじまりました。そんなこんなしているとあっという間に大学院4年目に突入です。この年で研究結果をまとめ英語で論文を書かなければなりません。自分の場合は論文を仕上げるために最後の3ヶ月間は臨床を離れ研究に専念することとなりました。この期間はさすがに夜遅くまで大学に残ったり、時には朝方まで研究や論文作成をしていましたが、教授や指導して頂いた先生方の手もお借りし、何とか論文を仕上げることができました。

大学院を卒業した今振り返ってみると、大学院の4年間は忙しかっただけとても充実していたと思います。学生時代の勉強は与えられた範囲の知識を詰め込むことがメインでしたが、大学院での勉強は自分で考え発展させていかなければなりません。そのためには文献を読み漁ったり（これが一番苦手）、それをもとに多方面から物事を考えたりということが必要です。これは1つのテーマにどっぷり浸かって、時間を費やして初めて身に着くスキルではないでしょうか？自分の場合は臨床研究でしたが、基礎研究の場合も同じだと思います。大学院は研究のスキルを学ぶことはもちろんですが、物の考え方や勉強の仕方を学ぶ場

もあると思います。研究に興味があり研究者になりたい人はもちろん、臨床にも研究にも興味がある人、臨床研修後の進路に迷っている人はぜひ大学院への進学をお勧めします。大学院で学んだこ

とはその後臨床にでてからも必ず役に立つと思います。人間としての幅を広げるためにも大学院への進学も選択肢の一つに入れてみてはいかがでしょうか。



同門会にて顎外科同期と!!

大学院もひとつの道

顎顔面口腔外科学分野 大 貫 尚 志

大学院へ行こうというテーマで、原稿依頼がきました。大学院を卒業してかなり経つと思いきや、まだ3年ちょっとしか経っていませんでした。何を書こうかと悩みましたが、私は、歯学部入学までに他大学や会社勤めを経験しており、また最近では編入試験での入学者もいますので、自分のように少し遠回りした人が大学院進学を考えるきっかけになってもらえるように、大学院入学に至った経緯を中心にお話しします。

私は、歯学部入学以前は化学を専攻し、学部、修士課程修了後、会社勤めをしておりました。会社時代も同僚や先輩、後輩に恵まれ非常に良い環境の職場でした。仕事は嫌ではないものの、医療系への興味も捨てきれず、自分の人生一度きりとの思いで歯学部受験を経て、入学しました。歯学部は卒業まで6年という非常に長い時間がかかります。卒業してみるとあっという間なのですが、年だけは取っているにもかかわらず、学生という甘い立場で過ごした6年は、同世代の人間と比べた時に自分の力のなさを思い知らされます。会社の同僚とは今でも時々会いますが、同僚が後輩の指導やさらにグループのリーダーになっている話を聞くと、自分が成長していないことに気付かされます。

歯学部を卒業すると1年間の研修が義務化されています。私は、1年間の研修で前半は顎顔面口腔外科で、後半は長岡赤十字病院で研修を行いました。研修を通して、口腔外科をさらに深く学ぼうという気持ちが強くなり、顎顔面口腔外科学分野に入局する意思を固めました。当初は臨床さえ出来れば良いと思い、大学院は考えておりませんでした。しかし、口腔外科を深く学ぶためにはしばらく大学に残ったほうが良いと考えました。そこで、大学で勉強していくならやはり、大学院まで進み、臨床だけでなく基礎研究の目を養い、総



合的に成長する必要性を感じたわけです。ところが、大学院進学となると生活ができるのかどうか不安になります。ここで進学をあきらめてしまうことが多いと思いますが、最低限の生活ができるようにするためにはどうしたら良いか考えました。研修終了後1年間のレジデントコースがあり、社会人大学院への進学も並行する事が可能であることを知り、顎顔面口腔外科学分野の高木教授に相談し、レジデントとしての受け入れを許可していただきました。レジデントを受け入れてもらえるかどうかは医局の体制によるものでしょうから事前に相談してみましよう。生活は何とかできるようになり、私生活でも大学院3年生時に結婚できました。私の少ない給料でも何とか一緒にいてくれた妻には感謝です。

さて、大学院での生活はどうだったか？1年目は社会人大学院のため、昼間は外来、病棟診療に従事することができました。研究の方は口腔解剖学で研究できるように高木先生から前田先生に頼んで頂き、2年目から本格的に研究が開始され

ました。泉先生に基礎からみっちり鍛えて頂きました。研究のための情報収集を行い、学会発表、論文作成まで一連の仕事を教えて頂きました。海外での発表も貴重な経験となりました。研究で培われた思考は、臨床の場でも大いに生きるものであり、現在の思考の礎となっています。

卒業後は、関連病院に出向し臨床経験をたくさん積むことができました。今後は大学に残り、お世話になった医局に貢献するよう努力するとともに、

自分自身が成長するように精進しなければなりません。まだまだ未熟ですが、今の自分がいるのも大学院での4年間を経験したからこそと思います。

最後に、この経験の話が、大学院進学を考えるきっかけになればうれしいです。口腔外科に興味がありましたら、いつでもお話に来てください。お待ちしております。



学会受賞報告

第25回日本スポーツ歯科医学会 研究奨励賞（ロッセ賞）

受賞報告

顎顔面口腔外科学分野 白 井 友 恵

このたび、平成26年6月28、29日に大阪で開催された第25回日本スポーツ歯科医学会総会・学術大会におきまして、研究奨励賞（ロッセ賞）を受賞致しましたので報告させていただきます。

今回の演題名は「S-PRGフィラー含有マウスガード材料のう蝕抑制効果」で新規マウスガード材料の臨床応用に向けた基礎研究です。外傷予防の観点から様々なコンタクトスポーツ競技においてマウスガードの装着が推奨されています。本邦においては、平成18年に高校ラグビーにおいてマウスガード装着が義務化され、平成20年には国際歯科連盟（FDI）がマウスガードの政策声明を正式採択し、マウスガードのニーズが高まっています。その一方で、スポーツドリンク等の飲料水に含まれる糖を摂取することは、う蝕の感受性が高い幼若永久歯が多く存在する口腔内においてう蝕の誘発が懸念されます。

そこで私達は、う蝕抑制効果を持ったマウスガード材料の開発が急務と考え、3層構造の Surface reaction-type pre-reacted glass-

ionomer（S-PRG）フィラーをマウスガード材料として応用するにあたり、そのう蝕抑制効果を検証しました。S-PRGフィラーはフッ化物ストロンチウム、ナトリウム、アルミニウム、ケイ酸、ホウ酸等の6種類のイオンを徐放し、その効果により歯質強化と脱灰抑制、酸緩衝能、抗プラーク形成能等のバイオアクティブ効果をもたらすことが多くの研究機関から報告されており、現在コンポジットレジン、フィッシャーシーラント、歯面コーティング材等の歯科材料に既に応用されています。

本研究により酸緩衝能と脱灰抑制能があることが示唆されたため、今後マウスガードへの応用に向け、研究を続けていきたいと考えています。

最後に、今回の受賞に際して、ご指導頂きました高木律男教授をはじめ、荒井良明准教授、韓臨臨先生、高橋直紀先生、高嶋真樹子先生、河村篤志先生にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



日本顎関節学会 優秀ポスター賞受賞報告

顎関節治療部 高 嶋 真樹子

2014年7月に福岡市で開催されました第27回日本顎関節学会にて優秀ポスター賞を受賞いたしましたのでご報告致します。演題は「咀嚼筋痛障害患者の終日咬筋の筋活動分析」です。

顎関節症の症状の中では咀嚼筋痛症状を呈する患者さんが最も多く、その筋痛の多くは筋の過負荷に起因すると考えられています。しかし、終日のいつどのようにして筋に過負荷が生じ、筋痛が惹起されているのかは明らかになっていません。そこで本研究では、咀嚼筋痛障害患者の筋活動の特徴を明らかにすることを目的として、健常者と咀嚼筋痛障害患者の筋活動を筋電計にて24時間記録して、記録を覚醒（除食事）・睡眠・食事の3状態に分類し、各状態における筋活動の強さ（100%MVC：最大随意噛みしめの筋活動）と持続時間を比較検討しました。その結果、覚醒時の10%MVC以上の筋活動持続時間において、患者群は50分を超え、健常者群（15分程度）よりも有意に長いことがわかりました。意識下でのlow-levelで持続性のある筋活動が主体ですので介入が可能であり、介入の効果が大きく顎関節治療にとって大きな意義があると考えています。

顎関節症に初めて興味を持ったのは、歯学部4年生の試験前に開口量が1横指程度となり、特殊

歯科（現顎関節治療部）に駆け込んだ時です。「試験が終わったら治るよ」とあっさり言われたことを覚えています。入局後に、自分自身が普段から噛みしめ等をしていることに初めて気付いたことで、顎関節症を更に理解したい・知りたいと思い大学院で研究を行うことを決めました。

このような臨床にもとづいた研究を大学院で行え、ポスター賞を受賞できた幸運をとっても有難く思います。臨床から研究まで指導して頂いた荒井良明准教授、このような機会を与えて下さった高木律男教授をはじめとする臨床を支えて頂いている顎関節診療班の先生方にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。



顎関節治療部部長 高木律男教授を囲んで顎関節診療班の先生方と一緒に、筆者は後方右から3番目

日本歯科放射線学会優秀ポスター賞受賞報告

歯科放射線科 曾 我 麻里恵

2015年6月5日から7日にかけて開催された、日本歯科放射線学会第56回学術大会におきまして、優秀ポスター賞を受賞いたしましたので報告させていただきます。

演題名は「放射線治療後のう蝕・知覚過敏の発生率の調査と歯科管理の効果の検討」です。頭頸部放射線治療患者の大部分は不可逆性の唾液分泌低下症に悩まされます。唾液分泌低下症は知覚過敏やう蝕のリスクを上昇させ、口腔機能を低下させる可能性があり、現在、大変注目されています。

当科ではこのような患者に対し、3カ月毎のスケーリングとフッ素塗布を中心とした定期的な歯科管理を行っていますが、今回この歯科管理の有効性を検証するために、対象患者のう蝕と知覚過敏の発生率と特徴について、放射線治療終了直後から3年間縦断的に調査しました。

その結果、知覚過敏の発生率は6カ月に約10%と高くはないのですが、う蝕に関しては治療後6カ月で患者の約50%、3年間では約90%と高い発生率を示すことがわかりました。これらは放射線量や口腔衛生状態に関係なく発生し、現在の歯科管理では効果的にう蝕発生率を減少させているとは言えない結果となりました。

頭頸部放射線治療患者は、口腔内のpHが酸性に傾き歯面の脱灰が進行しやすく、また口腔内のCa²⁺の量が少なくなるため再石灰化が行われにくいことが考えられます。また組織学的、細菌学的にも慢性う蝕や根面う蝕のリスクが極めて高い環境になることが知られており、頭頸部放射線治療後のう蝕の発生率を減少させるには、このよう

な放射線治療後の問題点を考慮し、歯科管理の内容や方法を再考する必要があることが示唆されました。

今後、当科に限らず歯科界全体でこのような患者を診る機会が増加すると思われます。その際により多くの患者のQOL向上に繋げられる効果的な歯科管理法の構築に、今回の結果を繋げていきたいです。

最後に、今回の受賞にあたり御指導を賜りました林 孝文教授、勝良剛詞先生、顎顔面放射線学分野の先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



学会受賞報告

歯周診断・再建学分野 有 松 圭

この度、2015年5月に幕張で行われました第58回春季日本歯周病学会学術学会にて日本歯周病学会奨励賞を受賞いたしました。大変嬉しく、光栄に存じます。今回の受賞につきましては、私が大学院で研究し、学術論文として発表いたしました「Oral pathobiont induces systemic inflammation and metabolic changes associated with alteration of gut microbiota」が表彰されました。

論文の内容については、歯周炎が全身疾患を進行させる新たなメカニズムを発表いたしました。近年、腸内細菌叢の変動が歯周炎と同様に様々な全身疾患に影響を及ぼすことが報告されています。そこで、我々の研究グループでは、重度の歯周炎患者さんの口腔内には大量の歯周病原細菌が存在し、毎日唾液と共に飲み込まれていることが

ら、飲み込まれた細菌が腸管において腸内細菌叢に影響を及ぼすことで全身疾患のリスクが上昇するのではないかと仮説を立てました。実際に歯周病原細菌の一つである *Porphyromonas gingivalis* をマウスの口腔へ繰り返し投与したところ、腸内細菌叢が変化すると同時に各組織と全身における炎症及びインスリン抵抗性が惹起されることが明らかとなりました。

今回の受賞を励みに、今後もより一層、研鑽を重ねてまいりたいと思っております。

最後になりましたが、ご指導頂きました山崎和久教授、多部田康一先生、中島貴子先生ならびに、吉江弘正教授をはじめとする歯周診断・再建学分野の先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。



学会賞報告

顎顔面放射線学分野 新 國 農

この度平成26年度NPO法人日本歯科放射線学会賞・学術奨励賞を受賞しましたので、この場をお借りしてご報告いたします。受賞論文は「Clinical significance of T2 mapping MRI for the evaluation of masseter muscle pain in patients with temporomandibular joint disorders」、学術誌Oral Radiologyに掲載されており、私のphDの学位論文でもありません。

顎関節症に伴って咀嚼筋に痛みを有する患者さんは多く見られます。痛みを画像化するのは難しいのですが、痛みの原因、または痛みを反映した筋組織の変化を画像化する方法はいくつか研究されています。私たちはMRI撮像シークエンスの一つであるT2マップが筋疲労、筋活動の評価のために用いられていることに注目し、T2マップを用いて痛みを有する咬筋の評価を試みることにしました。T2マップとは関心領域におけるT2値の分布をマッピングして画像化したものです。MRIの原理である核磁気共鳴反応では、エネルギーを与えられた原子核が静磁場の状態へとエネルギーを失っていく現象と緩和と呼び、これにはT1緩和とT2緩和があります。ある組織におけるT2緩和の速度を表したものがT2値です（時間の単位で表されます）。炎症による浮腫性変化等で組織内の細胞外液が増えると、その組織のT2値は上昇します。つまり炎症が画像化される

のです。結果としては、痛みを有する側の咬筋T2値は痛みを有さない側の咬筋T2値よりも有意に高値を示すということになりました。これは咬筋内部に浮腫性の変化が生じたということを示唆しており、痛みの画像化ということに一步近づいた結果を得たといえます。

T2マップは通常のMRI検査とは異なり定量的な評価が可能なため、医科領域では整形外科（変形性膝関節症）や循環器内科（心筋の線維化の評価）等、様々な科で応用が広がっています。歯科領域においてもその応用は（研究段階ですが）盛んになってきており、現在は歯科放射線学会内でも、顎関節円板や下顎頭の骨髄についてT2値の変化と臨床症状との関連を検討する研究がされており、学会においても盛んに発表されています。

本学術奨励賞は歯科放射線学会が若手に向けて授与する賞という位置付けと聞いております。今回の受賞は今後も歯科放射線科医としてしっかり仕事をするようにとの叱咤の意味も込められていると捉え、日常の臨床、研究、教育に従事していきたいと思えます。

最後になりましたが、本研究について研究のヒントから具体的な方法までつぶさにご指導賜りました西山准教授、論文執筆をご指導して下さいました林教授にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本ペインクリニック学会優秀論文賞受賞報告

歯科麻酔学分野 倉田行伸



2014年7月24～26日に東京で開催された第48回日本ペインクリニック学会におきまして、優秀論文賞（原著臨床部門）を受賞しましたことをご報告いたします。

対象となった論文は2013年に日本ペインクリニック学会誌に掲載された「末梢性三叉神経損傷における触覚閾値低下の予後判定基準について」です。末梢性三叉神経損傷では、長期に後遺する感覚障害は摂食や会話等の日常生活に影響を及ぼす可能性があるため早期に診断、治療を行うことが望ましく、以前、外科的顎矯正手術を受けた患者を対象として、感覚障害の予後を予測するための方法について検討した結果、初回の感覚評価時に触覚閾値が0.84g以上を示した患者では、感覚が自然に回復しにくい可能性が高いことを示唆し

（瀬尾ら、日本歯科麻酔学会雑誌 2002）、当科ではこの結果をもとに早期に薬物療法等の治療を行うかどうかの基準としていました。本論文は外科的顎矯正手術だけではなく、抜歯等を含めて感覚障害の発生原因の対象を広げて、受傷後早期における触覚閾値の予後判定基準を検討しました。その結果、受傷から1～2週間の触覚閾値が3.0g以上であると感覚が自然回復しにくくなることが示唆されました。

掲載された学会誌は主に医科領域のペインクリニック関連の論文が掲載されるため、歯科領域である本論文が優秀論文賞に選出されたことは非常に驚きでしたが、今後もこのような臨床の場で役立てられるような研究ができればと考えております。

最後に今回の受賞に際して、ご指導いただきました瀬尾憲司教授をはじめ、歯科麻酔学分野の先生方に深く御礼申し上げます。

受賞報告

組織再建口腔外科学分野 高 辻 紘 之

今回私は2014年10月30日から11月1日にかけて韓国のソウルで行われましたThe 53rd Congress of the Korean Association of Maxillofacial Plastic and Reconstructive Surgeonsにおいてポスター発表する機会をいただき、さらにはoutstanding poster competitionという賞をいただきましたので、その概要について報告させていただきます。

顎矯正手術の目的は、顎変形に起因した機能的ならびに審美的な問題を改善することですが、心理学的に問題を抱えている患者においては術後の満足度が低くなる傾向にあることが報告されています。そこで顎変形症患者の術前後の心理学的特性を心理テスト（ミネソタ多面的人格目録：MMPI）によって解析し、顎変形症患者の心理的特性および顎矯正手術が心理面に及ぼす影響を調べました。

顎変形症患者と標準化集団との比較では、術前に抑うつ度をみる抑うつ（D）尺度、ヒステリー反応の起こしやすさをみるヒステリー（Hy）尺度、強迫的思考などをみる精神衰弱（Pt）尺度、社会的接触との関係性をみる社会的内向性（Si）尺度が患者群で有意に高値を示し、また、D尺度、Hy尺度は術後に有意な減少を認めました。

次に各症型間および偏位の有無とMMPIスコアとの比較においては、骨格性Ⅲ級症例において、術前にD尺度が高値を示し、術後にD尺度およびHy尺度の有意な減少を認め、非対称群においては術後にD尺度とHy尺度の有意な減少を認めました。

以上のことから、特に骨格性Ⅲ級患者においてD尺度が有意に高いことから、社会的に強い心理的ストレスを受けていることが示唆されましたが、術後にD尺度およびHy尺度が有意に減少し

ており、顎矯正手術により心理面に陽性の影響を及ぼすことも示唆されました。また、全患者の31%に何らかの臨床尺度で高値を認め、そのうちの5名は術前に何らかの精神疾患の診断を受けていたが、慎重に対応することで術前後に大きな問題を生じることなく治療を行うことができました。

顎矯正手術による満足度は一般的に高いとされていますが、特に心理学的に問題の多い患者は術後の満足度が低くなる傾向があることが報告されています。したがって、術前にこのような患者を抽出できれば、治療計画を立案する上でも有用であると考えます。

最後に受賞に際しまして、本研究のご指導を賜りました小林正治教授、小島拓先生、長谷部大地先生、組織再建口腔外科学分野の先生方およびご協力をいただきました研究参加者の皆様に心から感謝申し上げます。



受賞報告

小児歯科学分野 准教授 齊 藤 一 誠

この度、第53回日本小児歯科学会大会および総会におきまして、平成26年度町田賞研究奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

町田賞とは、第5代日本小児歯科学会会長町田幸雄先生からのご寄付を原資とした賞で、研究奨励賞は、平成27年5月に行われた第53回日本小児歯科学会大会および総会にて新設された賞です。町田先生は、東京歯科大学の小児歯科学講座の発展のみならず日本小児歯科学会の発展に大いに寄与され、特に咬合誘導に関する分野では数多くの著書があり、また優秀な門下の先生方を数多くの輩出されております。私が小児歯科学を志した頃には、すでに町田先生は東京歯科大学をご退官されており、私にとっては伝説の方で、雲の上の存在でした。ご退官された後も、小児歯科学会の会員のためにご支援されているその姿勢に深く感銘を受けます。また、今回私が受賞第一号であることは、身の引き締まる思いと共に、大変名誉なことだと感じております。小児歯科における臨床研究を助成することで、小児歯科学の研究を盛り上げていきたいとの町田先生のご意志を真摯に受け止め、次世代に引き継いでいきたいと思っております。

本研究の背景としましては、重症齲蝕にて乳臼歯や前歯が崩壊した症例や外胚葉異形成症などで先天的多数歯の乳歯欠損が認められる症例において、小児義歯を作製する際、明確な咬合平面の基準がないことは、小児歯科の臨床上大きな問題でした。成人における基準を参考にしたり、側面頭部エックス線規格写真にてある程度の基準を検討するなどしてきましたが、発達期である小児においては、顎顔面の発育だけでなく歯の交換を考慮する必要もあり、客観的な指標はほとんどありませんでした。そのため、小児義歯の咬合平面の決定は臨床家の経験によるところが大きく、近年、客観的な基準作りが切望されておりました。そこで本研究助成では、3～6歳において顎顔面軟組織に対し咬合平面と咬合高径がどのように変化するかを調査する予定にしており、研究結果は小児歯科学会大会にてご報告することになっております。

町田先生のご厚意に報いるためにも、今後も小児歯科に関連する臨床研究を継続しながら、若手の先生達の成長を楽しみに、一緒に歩いていきたいと思っております。



町田幸雄先生と

受賞報告

小児歯科学分野 社会人大学院生 君 雅 水

この度、広島にて開催されました第53回日本小児歯科学会大会におきまして、ポスター発表の機会をいただき、優秀発表賞（臨床分野）ならびに町田賞・優秀学会発表賞を受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。

今回私が発表させていただきましたタイトルは「学童期における口唇閉鎖力とその関連因子についての研究」というもので、某小学校児童全員に口唇閉鎖力の測定と、口唇閉鎖に関するアンケートを実施し、その結果をまとめ、発表させていただきました。今までケースレポート発表経験しかなかった私にとって、今回の発表は非常に高い壁にいくつもぶつかりました。また、私は社会人大学院生として現在週2回、大学へ通学している都合上、データの解釈やポスター作製における修正等をメール頼りに進めるしかなく、直前まで発表にたどり着けるか不安でいっぱいでした。発表当日も、資料を手放すことができませんでしたが、会場の皆様から多く関心を持っていただき、様々

な先生方とディスカッションすることもでき大変有意義でした。今回賞をいただきました町田賞とは、第5代日本小児歯科学会会長町田幸雄先生からのご寄付を原資とした賞で、町田先生のご専門であった咬合誘導等に関連の強いテーマが選考基準でありました。発表にたどり着けただけでも十分満足しておりましたが、この度の発表が町田賞受賞をいただいたと同時に、臨床分野全体における発表でも優秀賞をいただいたことは、大変光栄なことであると同時に、今後のリサーチを継続していく上での責任も重く受け止めております。また、発表に際しまして、御指導いただいた早崎教授はじめ齊藤准教授、お世話になった先生方のご尽力の賜物と感謝しております。これからも私にできることを積み重ねることが今回の受賞に応えることであり、今後の小児歯科の発展に微力ながら貢献できればと考えております。ありがとうございました。



留学で幅広い視野と愛国心を

高度口腔機能教育研究センター／生体組織再生工学分野 加 藤 寛 子

怒涛のごとく過ぎ去った大学院生活の修了11日後、私は人生初めてのアメリカ大陸上陸を果たし、それからミシガン大学のあるミシガン州アーナーバーに2年半滞在することとなりました。率直に言うと留学生活は何物にも代えがたい貴重な経験であり、私の価値観に変化をもたらしました。留学するきっかけを与えてくださり、渡米後も精神的に支えて下さった、大学院時代のメンターであり、現在研究の指導をしていただいている泉健次教授には深く感謝しております。僭越ではありますがこの場を借りて私の経験を述べさせていただくことで、留学をしたいと考えている人の背中を押すことができたらと考えています。

留学生活の最初の1年は初めてのことだらけで英語も不自由な中での生活のセットアップで緊張の連続ではありましたが、それと同時に私と同じように研究留学してきた仲間たちとの出会いや新しい生活自体はエキサイティングでもあったために、どちらかという楽しい思い出の方が多かったように思います。2年目以降は生活も落ち着き英語もある程度聞こえるようになり、周りを見る余裕が出てきました。自分自身も仕事がある程度できるようになってきたために、周りの人間にとってもゲスト的な立場から競合相手という立ち位置になってきたこともあるかと思えます。そのためにアメリカという国、移民を含むアメリカ人の良いところも悪いところもわかるようになり、徐々に納得できないことや不満に思うことが増えてきました。ある種独特な不平等な扱いや人種差別は日本では経験できないことなので嫌な経験であっても重要な人生経験であると今となっては思います。特に今後、日本人以外と仕事をするのがあったとして、相手の態度や発言がどのような意味を持ち、どこまで信じてよいのか、自分が極

端に不利な状況にならないために気をつけなければいけないことは何か、をそのような経験から学ぶことができたと感じています。したがって、2年半の滞在は単に1年目に経験したことの2.5倍の経験値を積めたというわけではなく、2年目以降にはその何倍もの経験を積むことができたように思いますので、留学を楽しいだけではない、より有意義なものにするために期間設定は非常に重要であると認識しました。

もう一つ、留学の非常に大きな収穫は日本、そして日本人の良さを改めて感じる事ができたことです。特に日本人の仕事に対する真摯さは貴重な資質であると感じました。もちろんアメリカにも真摯な方はたくさんいますが、波風立てない部分で例をあげますと、役所でもファーストフードでもだいたいガムを噛んでジュースを飲み、私語をしながら接客をするのが普通で、長蛇の列でも急いで客をさばこうとする努力はまずみられません。そのような努力をしても時給は変わらないのでしょうから、時給分の仕事しかない、ある意味合理的で日本人も少しは見習った方がいいともいえるかもしれません。(つまり、チップを払うような場所ではそれなりのサービスはしてくれます)。ただ、私にとっては日本風の接客や日本で働いた経験が恋しく思うことは多々ありました。そのような日本のスタンダードであることが、世界の中では当たり前ではないのだと実感したときに、日本を誇りに思いましたし、海外を知ることによって愛国心が深くなったことに気づきました。

アメリカの良いところ、見習うべきところもたくさんあります。例えば、大学では雑用要員があり、自分で雑用を行うことはほとんどなく研究に専念できます。また、早退は日常茶飯事ですが、土日2日間とも休めますし、長期休暇を罪悪感な

くとれることは非常に良いシステムであると思います。というのも、私自身アメリカに行く前は社畜（大学畜）であることが美德で、休みをとるということは悪であると信じ切っており、その考え自体が持つ不健全さを全く認識していませんでした。そう信じることで慢性疲労と過労を認識させないように自己を鈍化させることが必要だったのかもしれない。今となってはアメリカのようなバランスのとれた働き方をすることで多くの日本人が失ってしまった心の余裕を取り戻せるのではないかと思いますし、多くの職場がこのようになってほしいと願ってやまないのですが…これはアメリカにおいてガムを噛まずに接客することがスタンダードとなるのと同じぐらい難しいと思います。

今の時世、留学希望者は減少傾向にあります。留学には是非行くべきだと私は強く勧めたいと思います。日本の外に目を向けること、日本の外から内に目を向けることで幅広い視野と多様な考え方を習得し、自身を成熟させることはもちろんですが、自分の属する労働環境においてもより

柔軟で効率的な労働形態について理解でき、実行に移せるような人材が育成されることを願っています。

—ラボ紹介—

最後に少しだけラボの紹介をさせていただきます。私はミシガン大学の口腔外科に所属するDr. Stephen Feinberg の研究室で主に、FDA主導のクリニカルトライアルに携わっていました。このプロジェクトは元ラボメンバーである泉健次先生が開発した培養口腔粘膜のサイズを改良し、より広範な欠損へ適用させようというものですが、この製品開発のプロトコール作成や、Human Application Lab (HAL)、日本でいうCell Processing Center (CPC) と同義の施設で、患者へ移植するための培養粘膜を作成していました。ラボメンバーは6人で、ラボはゆったりとした自由な雰囲気でした。このラボに所属させてもらったことはいろいろな意味で非常に有意義でした。



写真：住んでいたアパート。美しい自然と野生動物に囲まれて生活を送っていました

University of Manchester 留学記

摂食嚥下機能回復部 真柄 仁

はじめに

こんにちは、摂食嚥下機能回復部の真柄仁と申します。この度、「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」の支援を受け、英国のマンチェスターにありますUniversity of Manchesterに、2014年6月～2015年5月まで1年間、留学する機会を頂きましたので、この場をお借りして留学報告をさせていただきます。

マンチェスターについて

マンチェスターはイングランド中部に位置する都市です。緯度は北海道よりも高いですが、いわゆる西岸海洋性気候に属するため、1年中穏やかな気候です。夏は湿気がなく冷房が要らない程度の気温で心地よく、雪はわずかで、青空を垣間見ることができる冬は、新潟を初めて出て生活した私にとっては、本当に過ごしやすく感じました。

滞在先の大学とラボについて

所属した大学には、School of Dentistry（歯学部）もありますが、私の研究先はそちらとは関係なくFaculty of Medical and Human Sciencesの、Centre for Gastrointestinal Sciencesという講座であり、日本でいう医学部

の消化器内科のラボに所属しておりました（写真1）。この講座の主任教授を務めるShaheen Hamdy教授は、ヒトを対象とした摂食嚥下機能の生理学的な研究では世界的権威のお1人です。特に、随意嚥下機能を担う大脳皮質の運動野をターゲットに、経頭蓋磁気刺激（Transcranial Magnetic Stimulation、以下TMS）（写真2）を使ってその神経活動性を評価する研究は、過去10数年にわたり行われてきており、Nature誌を始めとした多くの研究業績を残しています。

自身の研究について

脳血管疾患、あるいは加齢変化によって生じた嚥下障害に対して、感覚刺激を応用した摂食嚥下リハビリテーションの有効性が注目されています。渡英前、日本の研究室では、電気刺激を用いた咽頭感覚刺激が嚥下機能に影響をもたらすかについての研究に携わっておりました。そこで、留学先では、「複数の異なる感覚刺激が大脳皮質の感覚運動野の神経にどのような変化を与えるか」について、ヒト健常被験者を対象にTMSを用いて評価するという内容でした。このテーマは渡英前から漠然と描いていたもので、比較的早い段階で決定しましたが、待っていたのは書類申請と倫



写真1 オフィスでの私。建物は昔、病院看護師の宿舎であった



写真2 経頭蓋磁気刺激装置。8の字コイルから磁気を介して神経細胞を刺激できる

理審査の高い壁でした。英国でのそれらは大変複雑で、プロトコル作成やそのステップに多くの時間を要しました。ようやく実験が始まったとしても、被験者集めにも苦労しました。喉の筋電図をとるために、被験者には電極付のチューブを鼻から飲んで頂くため、まずはこれに耐えられることが必要です。また1人の被験者が、4日間、別日に来る必要があり、被験者と私の予定が合わないなど、ヒト研究ならではの苦労もありましたが、何とか形にすることができました（写真3）。

鉄道王国と連合王国

マンチェスターとリバプールを結ぶ鉄道は、世界初の旅客鉄道路線であったことで有名で、また英国国内には鉄道網の言葉通り、各地に鉄道が網のように張り巡らされています。一方で、英国鉄道の時刻表はフィクションであるとの評判もあるほどで、突然何の前触れもなく、数十分遅れたり、

運休になったりというのはしばしばです。滞在中、車を所有していなかった私にとって、鉄道は貴重な移動手段でした。前述のようにマンチェスターはイングランドの中央に位置しているため、同じイングランドの首都ロンドンだけでなく、連合王国の一国を成すウェールズやスコットランドへも長距離鉄道を使えば2～3時間で訪れることができます（写真4）。

例えばウェールズ北部には、コンウィ、カナーヴォンといった中世の要塞都市があります。そこにある城は、映画「天空の城ラピュタ」のモデルになった場所のひとつと言われており、映画のワンシーンを彷彿させる風景が見られます。この城の塔に登り、城壁に囲まれた街を見渡すと、ウェールズの歴史を感じることができます（写真5）。

2014年、独立問題で揺れたスコットランドで印象深いところといえば、ウイスキー蒸留所です。



写真3 実験中の私と被験者Gさん



写真4 マンチェスターを拠点とする長距離列車 FirstGroup社のTransPennine Express



写真5 コンウィ城の中庭と城下町。お城は何となくですが、天空の城っぽいです



写真6 蒸留所のポットスチル。この形態が蒸留酒ウイスキーの特徴を決める

同年、日本ではNHKドラマ「マッサン」が話題になっていましたが、この中で竹鶴氏がみたウィスキーの原点を、蒸留所見学では垣間見ることができます。数百年前から始まったと言われるその製造過程において、大麦麦芽と水が混合加温される釜、ポットスチルの材質や形の特徴や、樽で熟成させるなどの技術と経験には、それぞれ糖化、発酵、蒸留、蒸発の化学が緻密に織り込まれており、さらにその風土が作り上げるスコッチウィスキーの奥深さは大変印象的でした（写真6）。

最後に

アパート入居後すぐに水漏れが発生し、修理が全く進まず、突然床板をはがされたと思いきや、板の発注が間に合っていないと言われ、数週間床板なしのリビングでの生活を強いられ、結局水漏れから修理終了まで約半年かかるという事態など、私の拙い語学力に加え、さらに万象に対する英国

人気質？に翻弄された困難は多々ありました。しかし、前述の嚙下の研究の苦労と共に、まさに喉元過ぎれば熱さ忘れるといったところで、今ではすべてが良い記憶です。また、研究活動を通じて、Hamdy教授をはじめとしたラボメンバーの親身なサポート、涙と吐気を我慢し参加頂いた被験者の皆さんに対しては、異国での人との繋がりの有難さを実感しました（写真7）。新たな研究手法を習得できただけでなく、考え方の違いも肌で実感でき、自身の研究活動への視野が広まったと感じています。この留学経験を基に、大学での自身の研究活動を発展させるだけでなく、歯科医師として大学に所属することの面白さを教育・臨床を通じて後輩に伝えていきたいと考えています。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった井上誠教授、不在中の業務を快く引き受けサポートくださった医局員の皆様に感謝申し上げます。



写真7（左写真）Leaving dinnerでのラボメンバーと（右写真）Hamdy教授と私と綿織物

教授に就任して



今こそ義歯を学ぼう！

包括歯科補綴学分野（義歯診療科）教授 小野 高 裕

はじめに

歯学部で学ぶ学生ならびに保護者の皆様、包括歯科補綴学分野を担当している小野です、よろしくお願いたします。

最初に自己紹介をしましょう。私は、温暖な兵庫県芦屋市で生まれ育ち、学生時代も温暖な広島で6年を過ごし、卒業後地元に戻って大阪大学大学院に進み、足掛け32年間阪大で過ごした後、昨年10月に寒冷の地・新潟に来ました。新潟の冬は寒くて暗いよ、辛抱できるかな？といろいろな人から脅かされましたが、これまで寒い季節に何度か新潟に講義に来させていただいていたこともあり、また以前ドイツと北欧で冬を過ごした経験があったので大丈夫でした。むしろ、美しい北国の春が来たよるこびをしみじみ感じる事ができて喜んでいます。

さて、学生時代も含めて考えると、私は今年で歯学部39年生ということになります。しかし、新潟大学に編入してきたのは去年の10月ですから、現在まだ1年も経っていません。ですから、1年生の気持ちで、皆様と一緒に学ぶ有床義歯補綴学について考えてみたいと思います。そして、これから私が新潟大学で作っていきたいと考えている新しい補綴学の展望についてお話ししましょう。

歯科補綴学はモノ造りから始まった

歯や歯列の欠損に応じて必要な補綴物をいかに作るかという技術体系から始まった歯科補綴学は、顎口腔の包括的な診断に基づく形態と機能のリハビリテーション医療として進化してきました。

た。この1世紀の間、さまざまな材料や加工技術の進歩はあったにしても、その基本原理はほとんど変わっていません。精密な人工物を製作して体内に装着し、恒常的に形態と機能を回復するという技術は、ある意味人類のモノ造りの精華と言えるでしょう。最近では再生医療やデジタルテクノロジーが応用されつつありますが、学生諸君がまず習う内容は、このハイテク社会の中で稀に見るローテクによる「モノ造り」の世界なのです。誤解しないでいただきたいのは、ここで言う「モノ造り」＝歯科技工ではなく、歯科医師と歯科技工士が連携して行う補綴治療の一連の基本手技ということです。

歯科技工士について、「自分は歯科技工士になるのが目的で歯学部に入ったのではないのに、どうしてこんな面倒くさいことをしなければならないの？」と考える人がきっといると思います。義歯はどうやってできるのかを考えてみましょう。すべての義歯はカスタムメイドであり、義歯造りは家造りに例えることができます。歯科医師は、必要な生体情報を集めて設計する建築士であり、その設計をカタチにする大工さんが歯科技工士ですね。現場の大工仕事を知らない建築士が線を引いてもいい家ができないのと同じで、技工を知らない歯科医師にいい補綴治療はできません。歯科技工士との技術的な信頼関係は、補綴治療を成功させる大前提の1つです。何故なら、形態と機能を回復する主役は、手術でもリハビリテーションでもなく、あくまで人工臓器としての補綴物だからです。

新潟大学では3年次の後期でまず「補綴学総論」を学びます。この科目では、補綴治療の基礎となる咬合・下顎運動理論から咀嚼・嚥下機能まで、古典から最新の研究成果まで一貫して勉強します。また、治療学として重要な、診断から治療計画への流れについて解説します。「モノ造り」のトレーニングに入る前に、なぜそれが必要なのか、どうしたら有効にはたらくのか、しっかりと理論的基盤を作っておくことはとても重要です。

頭と手を動かすトレーニング

4年生になると、いよいよ「モノ造り」を中心とした有床義歯補綴治療の知識（前期の「有床義歯学」）と実技（前期：「欠損補綴学Ⅰ」＝全部床義歯、後期：「欠損補綴学Ⅲ」＝部分床義歯）のトレーニングが1年を通して行われます。そこでは、さまざまな技術と関連する器具、材料を頭だけで理解して済むものではなく、その使い方を体で覚えなければなりません。まさに「頭と手を動かすトレーニング」と言えるでしょう。小学校の工作、中学校の技術科、そういう科目が大好きだった人には楽しいかも知れませんが、それ以外の（大半の）人にとっては慣れないことなので戸惑ってしまうのは当然です。今まで頑張って入試の難関を突破して来た人にとっては、「なんで出来ないんだろう!？」と余計焦ってしまうかも知れません。

でも大丈夫です。現在の新潟大学歯学部の実習は「モノ造り」をはじめて経験する皆さんが、たとえ最初は戸惑いがあってもスムーズに慣れて行けるように、そして期間内に作品を完成し達成感とともに問題点を認識してもらえるように、さまざまな工夫がなされています。実習の前に知識と技術の予習ができるように、実習書だけでなく、eラーニングシステム上で動画や小テストなどの教材コンテンツが用意されており、私の前任地である大阪大学と比べて、ソフトにおいてもハードにおいても充実したシステムだと思います。もちろん、ライターも（私が学生の頃に比べればはるかに優しく）懇切丁寧に個別指導をします。それらを大いに活用し、集中力をもって実習に取り組んでいただければ、「モノ造り」の精神と技術は

必ず1人1人の血肉になっていくでしょう。

最新の咀嚼能力測定システムを臨床実習で

4年次までに学んだ有床義歯補綴学の理論・実技（模型実習）から臨床への橋渡しとして、5年次前期から一口腔単位の治療計画の下にさまざまな治療手技を模型上で行う「総合模型実習」（生体歯科補綴学分野が主担当）と臨床実習の前段階としての「臨床予備実習（通称ポリクリ）」（総合診療部担当）が始まります。ここでは臨床により近い状況で「モノ造り」のスキルアップを図るとともに、診断・治療計画の立て方を復習し、後期からの臨床実習に備えることとなります。模型から生体へ、基本的な「モノ造り」からもっと応用的な「補綴治療」へ、橋渡しの期間と言えるだろうと思います。

5年次後期からの臨床実習は、全国でも非常に恵まれた環境とシステムの下で行われている診療参加型臨床実習です。とにかく患者さんのご協力がこれだけ得られることは素晴らしいと思いますし、私たちも学生諸君も患者さんへの感謝を忘れてはなりませんね。義歯科では、1人1人が有床義歯補綴治療の診断・治療計画・基本的治療手技を体験し習得してもらうことを目標にしています。私が着任して以来、教員の皆さんの協力を得て、臨床にいくつかの新しい試みを取り入れてきましたが、その一環として大阪大学で開発された世界で唯一の全自動咀嚼能力解析装置を導入しました。

これは、患者さんにグミゼリーを30回咀嚼してもらってその表面積の増加量から「どれだけ噛めているか」を数字として示すもので、治療前の咀嚼障害や治療によるその改善を客観的に評価することができます。今までは、患者さんの主訴や感想を頼りに咀嚼機能を評価してきたのですから、大きな進歩と言えるでしょう。義歯診療科では27年度の実習からこの咀嚼能力評価を臨床実習にも取り入れます。患者さんの状態を客観的に評価することが、正しい治療法の選択に繋がります。また本当の意味で患者さんの悩み・苦しみに寄り添うことにもなるのです。

超高齢社会に適した新しい有床義歯補綴学を

学生諸君には卒業してから飛び込むことになる超高齢社会の歯科医療の世界で、一味もふた味も違う義歯のプロフェッショナルになっていただきたい、そういう人材を世に送り出すことが包括歯科補綴学分野のミッション（使命）だと考えています。そのためには、従来からの「補綴装置による治療体系」の幅を広げるだけでなく、新しく「(全身的・局所的な)病態による治療体系」を構築することが必要です。後者においては、とうぜん要介護高齢者の摂食嚥下障害に対する補綴治療も守備範囲に含めなければなりません。2つの治療体系をマスターした上で、患者さんの病態に最適の補綴装置を製作・調整することにより、幅広い患者さんの期待に応えることができる、そんな補綴専門医を養成するための卒前・卒後教育の再編成に取り組んでいるところです。

これまでのところ、「補綴学総論」において、咀嚼から嚥下までの食塊形成のプロセスと、それが障害された時に義歯や舌接触補助床などの補綴装置が発揮する生物力学的な効果を十分理解すること、「有床義歯学」において、顎顔面補綴治療や要介護者への補綴治療に関する内容を取り入れて、咀嚼・嚥下・構音障害の実態と補綴的対応法について知ること、「欠損補綴学Ⅰ・Ⅲ」におい

てより合理的で応用性の広い設計・製作法を習得すること、そして「臨床実習」においては、咀嚼能力測定に基づく診断・治療計画・評価の実践、などを取り入れてきました。それでも、まだ十分ではありません。今、日本の社会の多くの分野と同じように、歯学教育・臨床は人口の超高齢化に置いていかれようとしています。何とか早く現実に追いつくために、これからもどんどん新しいコンテンツを取り入れていきたいと考えています。

おわりに

包括歯科補綴学分野では、今年度から研修医・大学院生を対象とした臨床セミナーと機能評価ワークショップを開始しました。これらは、当分野の現時点での臨床・研究の方向性を示すとともに、これから取り組むべき課題を見据えるという意味も含んでいます。臨床においても、研究においても、チャレンジ精神を持ち、ワクワクしながら取り組んでいくことで、1人でも多くの患者さんの食べるよろこびをサポートできる義歯のプロフェッショナルになりたい、という人に向かって当分野のドアは開け放たれています。研究のことをもっと知りたい人は、分野ホームページをぜひ覗いてみて下さい。



歯学教育研究開発学分野・歯科総合診療部紹介

新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯科医学教育研究開発学分野

新潟大学医歯学総合病院 歯科総合診療部 藤井規孝

おそらく、毎号歯学部ニュースをご覧下さっている皆様方にとって、「歯科総合診療部」は初めて目にされる名前ではないように思います。なぜなら、過去の歯学部ニュースにおいて、学生さんや研修歯科医の先生方など多くの方が歯科総合診療部について紹介する文章を書いて下さっているからです。

しかしながら、このような形で正式にご紹介申し上げるのは、少なくとも私が歯学教育研究開発学分野・歯科総合診療部を担当させていただいてからは初めてです。特に病院内では「歯科総合」という専門性に関連しない名前がついているため、どのような治療を担当するのかよくわからない方もいらっしゃるかもしれません。また、「歯学教育研究開発」という名前も他の分野とは異なり、どのようなことについて研究しているのか今ひとつわかりにくいかもしれません。この度原稿をご依頼いただき、これらの疑問をお持ちの方にとって、少しでもお答えになるような紹介ができれば幸いと思いながら文章を作成しております。歯科総合診療部と歯学教育研究開発学分野の関係

は、歯学部の分野とは異なり少々複雑なのでまずはそれぞれについてご紹介致します。

歯科総合診療部は、平成13年に医歯学総合病院の中央診療施設部門の1つとして設置されました。平成18年度より歯科医師臨床研修制度が必修化されたことをご存じの方は少ないと思いますが、他大学同様、新潟大学においても歯科医師臨床の運営・管理・統括を担当する部署としてこの業務を担当しています。さらには、歯学部臨床実習の管理・統括にも関係しております。現在、歯学部卒業前後の学生、研修歯科医の治療技術の低下が問題視されており、歯学部学生が行う臨床実習（担当医の1人として現場に出て歯科治療を学ぶ歯学部の講義）、臨床研修（国家試験に合格し、免許を取得した新米の歯科医師が4月から行うon the job training）の有機的な接続を図ることの重要性が示されていますが、歯科総合診療部はある意味この役割を任されていると思っています。新潟大学歯学部、医歯学総合病院歯科における臨床実習、臨床研修の設備は大変充実しており、臨床教育に大変熱心で協力的な多数の教員の



スタッフ写真：教員



スタッフ写真：レジデント・医員・大学院生

先生方がいらっしゃいますので、他大学が決して真似ることのできない環境が整っています。そのため、学生さんや研修歯科医の先生方に説明する際、「このような恵まれた環境で勉強できることに感謝してほしい」と常々口にしてはいますが、あらためて紹介文を作成すると、これはそのまま歯科総合診療にも当てはまるような気がしております。

一方、歯学教育研究開発学分野は平成26年度に医歯学総合研究科に新しく設置されました。この分野には2名の教授が配置され、歯科総合診療部の教授と講師1名がこの分野の所属となり、歯科総合診療部を併任することとされています。また、歯学教育研究開発学分野には特任助教2名が設置され、そのうち1名が歯科総合診療部の業務にも加わっています。歯学教育研究開発学分野は、現在のところ臨床教育や学生・交換留学生の短期留学プログラムの管理運営などに関係していますが、昨今歯学教育の充実・改善が叫ばれるようになっていきますので、将来的にはさらに様々な業務を担当する可能性を秘めているように思われます。

以上、簡単にご紹介申し上げましたが、ここから先は歯学教育研究開発学分野、歯科総合診療部の両方を合わせて、私共が担当させていただいている部分について具体的に説明致します。

診療および院内での担当業務について

診療は6名の教員スタッフと7名のレジデント(後期研修歯科医)、医員、大学院生が行っていま

す。

教員にはそれぞれに保存、補綴系処置という専門領域があるため、レジデントと呼ばれる後期研修歯科医や医員、大学院生は必要に応じて教員に相談しながら自己研鑽を積んでいます。研修歯科医や学生にとって、特に若手のスタッフは身近にいる先輩に相当しますので卒後の進路などいろいろな相談にのることもあるようです。

また、歯科総合診療部は本院歯科医師臨床研修の単独型プログラムを担当しており、教員は当番制で研修歯科医が行う治療の指導にあたっています。本院臨床研修単独型プログラムは研修歯科医を担当医とする診療参加型で行うことを最大の特徴としており、研修歯科医は指導歯科医の監督の下、それぞれの担当患者さんを治療します。研修必修化以降、このプログラムでは毎年25名前後の研修歯科医が研修を行っていますが、研修希望者(研修を希望する学生など)の研修先はマッチングという全国統一の方法で決定されるため、必ずしもすべての研修歯科医が本学の卒業生であるとは限りません。過去、国公立、私立の別を問わず、さまざまな大学を卒業した歯科医師が研修を行ってきました。本院各専門診療科と院外の協力型施設で構成される複合型プログラムも含め、これまでに研修を修了した数百名の研修歯科医は、研修期間中、本院臨床研修の理念である「信頼される歯科医師」になることを目指してがんばってきました。おそらく、今現在もそれぞれの活躍の場において引き続き自己研鑽に励んでいることと思います。



単独型プログラム歯科医師臨床研修



単独型プログラム歯科医師臨床研修

さらに、歯科総合診療部は本院歯科を初めて受診される方に対し、最初にお話しをうかがい必要な検査をさせていただいた後、最も相応しい治療を行う専門診療科へご案内する予診業務を担当しております。予診は歯科総合診療部スタッフと単独型プログラムの研修歯科医が担当し、臨床実習中の学生がサポート（口腔内診査の筆記や専門診療科受付、X線写真撮影への案内）していますが、新来患者さんに初めてお目にかかる役割を担当しているため、親切・丁寧な対応を心がけています。臨床実習、臨床研修の大きな目的には歯科医療を実地に学ぶことが含まれますが、直接治療を行わない予診業務も研修歯科医や学生にとって貴重な勉強の場になっていると思います。予診業務を行った際、臨床実習や臨床研修にご興味やご理解を示して下さい方には、本院には教育病院としての役割があることをご説明申し上げ、ご協力願うこともあります。

教育について

歯学部卒後の臨床研修については、前述した単独型プログラムの実践に加え、新潟大学医歯学総合病院における歯科医師臨床研修の運営に関するとりまとめを担当しています。臨床研修の準備は研修開始前年度の6月から参加者（研修希望者と研修施設）がマッチングに参加することによって始まります。マッチングに関する詳細は「歯科医師臨床研修マッチング協議会（<https://www.drmp.jp/index.shtml>）」に掲載されていますので、興味がおありの方は是非一度ご覧下さい。

平成27年	歯学部歯学科		研修関連	
	1月	臨床実習		
	↓	↓	6月初	マッチング・新大研修説明
			6月末	マッチング登録開始
	7月末 ～8月	夏期休業	7月末	マッチング登録締切
	↓	↓	8月	施設見学・採用試験？
			9月初	希望順位登録開始 新大採用試験
	10月	臨床実習引き継ぎ	10月中	希望順位登録締切
	↓	↓	10月末	マッチング結果発表 (再マッチング開始)
	11月	臨床実習引継終了	11月	新大Bコース説明会
	12月	臨床実習修了判定		新大群内マッチング（～12月）
平成28年		試験勉強…	1月	新大群内アンマッチ者再マッチング

図1 歯学科6年生の予定

マッチングに参加登録した後、研修希望者（学生）は「D-REIS (<https://d-reis.mhlw.go.jp/common/ad0.php>)」という歯科医師臨床研修プログラム検索サイトで希望するプログラムを探し、それぞれのプログラムに申し込むために各研修施設が課す採用試験を受験します。通常、研修希望者は複数のプログラムに申込を行い、研修施設には定員がありますので、お互いに採用希望の順位付けを行ってシステムに登録し、この組み合わせをコンピュータで処理して決める方法がマッチングです。新潟大学歯学部6年生の場合、図1のように臨床実習を行いながら、臨床研修の準備を進めることとなります。これらは歯学部卒業前に行われますので、昔に比べると今の歯学部6年生はかなり忙しい1年を過ごしています。学生だけではなく、研修歯科医を受け入れる研修施設にも、学生と同様の準備や手配が求められますが、歯科総合診療部はこれらの業務（各種説明会や採用試験の開催準備や協力要請）を担当しています。



診療参加型臨床実習



早期臨床実習1

一方、歯学部 of 学生教育については、早期臨床実習、臨床実習の運営や管理を担当しています。歯学部歯学科および口腔生命福祉学科の1年次学生が履修する早期臨床実習Ⅰは、歯学部入学直後の学生が新来患者さんの案内や治療見学を行う、臨床実習中の6年次学生に口腔内診査や歯ブラシ指導を受ける等、体験型の実習で自らの将来像を意識することができる刺激的な内容で実施されています。歯学科2年次学生が履修する早期臨床実習Ⅱは歯学科の基礎系科目を紹介する講義と臨床現場の見学を並行して行い、歯科医療は技術だけではなく、専門的な基礎知識の上に成り立っていることを感じてもらえる内容で行っています。その後、3、4年次にさまざまな専門科目を履修した学生は5年次より臨床実習を始める準備に入ります。本学では通称“ポリクリ”と呼ばれる臨床予備実習のコーディネートや、5年次10月から6年次10月までの1年間、行われる臨床実習の管



診療参加型臨床実習



臨床研修・実習診療スペース

理・運営（マネジメント）も私達の担当です。本学の臨床実習は、学生を担当医の1人と位置づけて行う診療参加・実践型で運営されており、主治医制度や臨床実習実施委員会、ヘッドインストラクターの設置、電子ポートフォリオの利用など、全国的に見ても誇れる体制が整備されています。臨床実習中の学生は診療室においては、ほぼ歯科医師として行動することを求められます。歯科総合診療部は臨床実習、臨床研修と診療スペースを共有していますので、この恵まれた環境で彼らが日々頼もしくなっていく姿を目にすることができます。

研究について

専門分野がそれぞれにあるため、個々の教員は各専門分野の領域で研究活動を行っています。教員、大学院生は臨床教育を主なテーマとする研究にも参加しています。歯科医師は技術職であり、治療技術にも言葉や文章では学習者に伝えにくい要素が含まれます。例えば、処置中に術者である歯科医師が見ている場所、特に焦点を当てているスポットなどは当人にしかわかりません。また、治療時に様々な力を加える際、手が滑らないようにレスト（固定源とする指）をおく場所や患部を診る角度、患者さんと自分の体勢など実に様々な要素が絡み合って最適な治療を行うことができるようになります。現在、このような表現しづらい領域の技術要素を動画で捉える、目に見えない治療時の力加減を可視化するなど、効果的な臨床教育方法の開発に着手しています。これらの



歯学科46期生（6年次学生）

研究は、診療参加・実践を旨とする本学臨床実習、臨床研修に大きく貢献できるのではと考えているところです。

以上のようにご紹介申し上げれば、歯学教育研究開発学分野／歯科総合診療部は、決して私達ス

タッフの努力だけではなく、歯学部や本院歯科のさまざまな部署の皆様にご理解いただけるものと思います。今後とも当分野／診療部をどうぞよろしくお願い致します。



歯科衛生士部門より

歯科衛生士 小林 実可子

はじめまして。診療支援部 歯科衛生士部門の小林実可子です。

私は只今5年目の歯科衛生士をしています。新潟大学医歯学総合病院に勤務し、1年がたちました。こちらで働く前は開業医で3年間勤務していました。病院で働くようになり開業医とは少し違った環境に戸惑いながらあっというまに1年が経ちました。

いま私には25人の歯科衛生士の先輩方がいます。また私のいる1・2ブロックには5人の先輩歯科衛生士がいます。みなさん向上心の高い方ばかりで圧倒されていますが毎日歯科衛生士のことや大人の女性の考えなどたくさんのことを吸収させていただき、充実した日々を過ごすことができます。歯科衛生士としてできることがまだまだたくさんあることを知ることができ私自身も向

上心を忘れずに仕事に励んでいきたいと思っています。

話は変わりますが、家に帰るといつもハイテンションで迎えてくれる可愛い愛犬のディンがいます。トイプードルの女の子で私の1番の癒しです。少しおばかなわんこですが家では家族でとりあいをしています。

歯科衛生士として経験も浅くまだまだな私ですが、温かい先輩方に囲まれ日々勉強中です。今後ともご指導の程よろしくお願いたします。



歯科衛生士部門より

歯科衛生士 土田 沙耶香

はじめまして！昨年9月から働かせて頂いております土田沙耶香と申します。歯科衛生士になり7年目ですが、自己紹介を兼ねて御挨拶を書かせていただきます。

母校の明倫短期大学では2年制から3年制に移行した第1期生として3年間地元の北区（旧豊栄市）から電車でゆられ、小針駅から20分かけて歩き、毎日1時間の通学でした。坂が多い小針は道路が凍結すると滑り台のようにツルツルになり、よく転びそうになりながら友人と傘を路面に突き刺し、汗だくになって通学しました。座学よりも実習が好きだった私にとって新潟大学の実習では優しく丁寧に教えてくださる先生方に甘え、今では考えられないくらい失礼なことをしながらもたくさんのお話を教えて頂きました。お世話になった先生、衛生士さん、看護師さんが実習生の私を覚えていない事を祈ります…。

卒業後まだまだ学生気分の自分に反し、あっという間に月日は経ち、共に学んだ友人達にはかわいい子供が…結婚ブームにはすっかり遅れをとってしまいました。ですので、運良く？腕を鈍らせる事なく開業歯科医院で日々患者様のお口の中のクリーニングや診療補助に携わらせて頂いております。

そんな私が昨年9月からお世話になっているのが、小児・障がい者歯科、矯正歯科、通称4ブロックですが、歯科衛生士は私を含めて4人です。その4人のうち2人が“土田さん”で、よく矯正科では『こっちの土田さんじゃなくて…』『あぁ～こっちの土田さんか！』と言われ紛らわ

しい私ですが、私の顔と“土田さん”をセットで覚えて頂けたら光栄です。4ブロックは大学病院ならではの特殊な科だと思います。開業医でも多少非協力的な小児、軽度の障がいを持った方、矯正歯科を診てきましたが、ここではより困難な状況の患者様を診察しており、日々大学病院の必要性を感じております。治療されている先生方の技術や対応の仕方、心のケアまで様々な事が初めての体験で、衝撃的でしたが、とてもよい環境に居られること感謝しています。

日々過ぎていく日常の中で、先生方の診療が円滑に進むようにする事、全体を見る力をつける事、患者様のお口の管理を責任持って努めていく事など、まだまだ努力が必要なことが多くありますが、これからも一医療人として精進していきたいと思っておりますので、日々優しくご指導頂いている諸先輩方、4ブロックのみなさん！これからは迷惑をおかけしてしまうと思いますが、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



(筆者 中央)

中央技工室の紹介～引っ越しから現在～

診療支援部歯科技工部門 長谷川 健 二

はじめまして診療支援部歯科技工部門の長谷川健二と申します。今回は技工室が外来棟5階に引っ越してから初めて歯学部ニュースに載ることですので、新技工室の紹介を中心にお伝えしたいと思います。

まずは簡単ですが自己紹介させていただきます。私は、平成10年に新潟大学歯学部附属歯科技工士学校に入学しました。志望理由は細々した作業が割と得意だったこと、兄が同じ学校を卒業していたので学校自体の存在を知っていたこと、今思えば軽い理由でした。卒業後、新潟市内の歯科医院に就職し、縁あって平成21年より当院に勤務することとなり、現在に至ります。

それでは移転後の技工室の紹介をさせていただきます。我々歯科技工士の使用している技工室は中央技工室という名称になっています。以前の技工室に比べ面積は狭くなったものの、メインのワークスペースと各種作業部屋への動線が良くなり、引っ越しに際し不要なものや、在庫品等の見直しにより随分スッキリしたと思います。

部屋の内訳ですが、入り口を入ってすぐ、ワックスアップや金属研磨などを行うメインのワークスペースがあります。そこには個人個人にそれぞ

れ机が割り当てられており、ほとんどの時間を自らの机で過ごすことになるため、照明や収納など好みに合わせ工夫しています。現在6名の歯科技工士が在籍していますが、それぞれ個性が垣間見えます。全体の写真を掲載したかったのですが、引っ越しから3年が経ち個人のワークスペースは使用感が凄まじいという理由から、載せることを断念いたしました。

その他の部屋は用途別に鑄造・石膏室、ポーセレン室、レーザー溶接室の3部屋に分かれています。業務の紹介も兼ねて現在所有する機器の紹介をさせていただきます。

鑄造・石膏室には真空加圧鑄造機（ネオ・スーパーキャスト）、加圧成型機（エルコプレス）、エルコプレスではスポーツマウスガードやブリーチトレイ、いびき防止用の口腔内装置、放射線治療時に使用する口腔内装置を製作しています。高精度のデンチャー重合システムであるイボカップシステムがあり、それをういたデンチャーシステムであるBPS (Bio-functional Prosthetic System) の認定資格を平成24年に歯科技工士3名が取得し製作に当たっています。その他は石膏関連のものや、義歯の研磨スペースなどがあります。



ポーセレン室には、陶材焼付用のポーセレンファーンエス、硬質レジン等の光重合器、2年前に新規で導入されたプレスファーンエス（プログラマツトEP5000）があります。プログラマツト導入によってセラミックインゴットを軟化、圧入して製作するオールセラミック冠やセラミックインレーなどが製作可能となりました。

レーザー溶接室はその名の通りレーザー溶接機があります。主な用途の1つは部分床義歯やレジン前装冠の様な火をかけてロウ着出来ないような



場合の修理に用いることで素早く修理が出来、患者さんへの時間的負担を軽減すること、2つ目はロングスパンブリッジのロウ着前の仮着に用いることで、ロウ着用埋没材を使用しないでロウ着出来るため精度の向上と材料費削減に効果があります。

昨年ノーベルバイオケア社のプロセラスキャナージェニオン2 Gが新規に導入され、インプラントのアバットメントやインプラントブリッジのフレームなど、ワックスアップした原型をスキャンもしくは、CADソフトでデザインし、データをミリングセンターに送り、チタンやジルコニアを削り出すといったことが技工室からも行えるようになりました。

詳細な説明は割愛させていただきましたがこのような内容で業務に当たっております。私の拙い文章も相まって分かりにくかったと思いますが、もし、興味あることがありましたらぜひ、見学にいらしてください。それでは今後ともよろしくお願い致します。



素 顔 拝 見

口腔再建外科
特任助教

加 藤 祐 介

2014年5月1日付で特任助教を拝命しました口腔再建外科の加藤祐介と申します。自己紹介ということで、出身は新潟県五泉市で、父親は私が所属する口腔再建外科のOBで、母親も新大卒で矯正科のOBというお家柄の3人兄弟の2番目です。優秀？な両親を持ちながら高校では遊び呆け、所属していたテニス部でもこれと言った成績も残さないまま引退しました。それでも父親にあこがれ歯科医師を目指し日本歯科大学に入学しました。大学入学式前の勧誘で騙され、勢いでアメリカンフットボールというこれまで全く縁のないスポーツを始めることとなりました。アメリカンフットボール部では、以前顎顔面外科に所属されていた嵐山貴徳先生（クォータバック：攻撃の司令塔）に駒の様に使われ散々な目に遭いました。卒業後の進路を決めるにあたって父親と相談し口腔再建外科に所属させていただくこととなった6年生の12月のある日、嵐山先生から口腔外科に所属するなら教授に挨拶に来いと言われ、よく分からないまま口腔外科、麻酔科合同の忘年会の二次会に伺い、先輩に言われるがままビールジョッキを抱え教授にご挨拶をさせて頂きました。しかし、その相手が口腔再建外科前教授の齋藤力先生ではなく高木律男先生でありました。結局、齋藤先生には挨拶ができないまま、その日は終了…なんてこともありましたが、それも良い思い出です。

大学6年間のほとんどを執念で五泉から通学し何とか無事卒業することができ、2002年4月に口腔再建外科に入局させていただきました。当初は右も左も分からない全く不慣れな環境でしたが、優秀??な兄貴が同じ医局に所属していたことも手伝って皆さんに良くしてもらい、アウェー感

をあまり感じずに馴染むことができました。入局4年目より当科関連病院の富山県立中央病院に出向させていただきました。そこでの住まいは、救急外来の入口の脇にあるオンボロ官舎でした。臨床に自信がなく赴任当初は救急車のサイレンの音を呼び出しが来るのではないかとドキドキしながら聞いていましたが、そのほとんどが医科の症例で歯科は滅多に呼び出しがかからないことが分かったと、サイレンの音も受け流すことができるようになりました。横林康男先生からご指導いただいた中央病院での経験は口腔外科医としての私の基礎となっています。もう一つ、富山では毎週金曜日の午後、衛生士学校に授業に行くという業務がありました。女子高生の様な制服を着た数十人の女子に対し、口腔衛生という畑違いな内容の授業を行う、これが何とも辛く毎週金曜日の午後は憂鬱でした。とは言え、私の嫁はその学校の教え子であります。嫁候補を捕まえ2年後の2007年4月に大学に戻りましたが、縁あって1年後の2008年4月からは南魚沼市立ゆきぐに大和病院に出向させていただきました。同病院では以前にご指導いただいた当科出身の加納浩之先生という素晴らしい大先輩に再び指導をしていただきました。ゆきぐに大和病院の2年間は加納先生の日々の診療に対する姿勢や素晴らしい手術手技を常に目にすることができ、私にとって非常にありがたい経験をすることができました。

2010年4月に大学に戻り現在に至るわけですが、2014年より医療連携口腔管理チームに参加させていただき、医科歯科の連携に協力させていただいております。今後も諸先生方のご指導のもと、口腔再建外科と新潟大学歯学部への発展に微力ながら貢献できるよう努力していきたいと思っておりますので、何卒宜しくお願いいたします。



歯科薬理学分野
助教

柿原 嘉人

はじめまして。歯科薬理学分野・助教の柿原嘉人と申します。早いもので、新潟に参りまして、もう1年が経とうとしております。出身は、福岡県北九州市で、工場のたくさんある煙突の町で育ちました。これまでに、奈良、大阪と関西までは住んだことがありましたが、日本海側に住むのは、はじめてだったので、新潟に来る前は少し不安もありましたが、今では風光明媚で美酒佳肴な新潟にすっかり魅了されております（初めての冬はちょっと辛かったです…。）。また、新潟は親切な方がとても多く、これまでいろいろな方々に助けて頂きました。引っ越してきて間もなく、ちょっと街を散策するのに自転車があればと思い、自転車店を探しに出かけたのですが、なかなか見つからず困っていたところ、ちょうど通りかかった理髪店から、散髪したてのおじいさんがひとり出て来られました。肌着一枚に短パンと草履、首にタオルを巻いた新潟なのにチャキチャキの江戸っ子系のおじいさんで、足取りも軽く、店の外に止めてあった新品の自転車にひょいと乗って行かれようとしたので、思わず、「すみません、その自転車、どこで買ったんですか？」と聞いてしまいました。おじいさんは、なんの躊躇もなく、「あ、コレ？ドンキ。」と即答してくれました。「ドンキは安いよ～～。なんでもあるよ。」とドンキホーテを薦めて頂いたのですが、駅南のほうにあるらしく、ちょっと遠かったので、「もうちょっと、近いとこでないですかね？」と伺うと、「このへんか～～。このへんはあんまりないんだよな～～。」としばらく考えてくださり、「あっ！イトーヨーカドーにあるわ！」と教えてくれました。そして、「連れて行ってやるよ。」と自転車を押しながら、一緒に歩いてヨーカドーまで連れて行ってくださいました。なんとも粋なおじいさんで、聞けば、その昔、貨物船の船長をされてい

て、福岡の港にも度々訪れ、現地の方にとっても親切にしてくれたということでした。新潟と福岡のなんとも不思議なご縁を感じた瞬間でした。ヨーカドーに到着後、おじいさんは、上階の自転車売り場まで案内してくださり、自転車選びまで手伝ってくれました。折角だったので、おじいさんの自転車と似たタイプのものに決めましたが、それがドンキより安かったので、おじいさんは、「ヨーカドーのが安いな…。」と少し肩を落とされました（ちょっと気の毒でした…。）。その後、自転車の購入手続きをして、おじいさんにお礼がてら喫茶店で珈琲でもと思い振り返ると、そこにもうおじいさんの姿はありませんでした…。かっこよすぎです。それ以来、おじいさんにはお会いできておらず、“探偵！ナイトスクープ”にでも依頼して探してもらおうかとも思いましたが、それもできず、ずっとおじいさんと出逢ったシモ古町の理髪店ヒロに通っているのですが、残念ながらまだお会いできておりません。再会できた暁には、おじいさんと自転車で、古町カフェめぐりをしたいとおもっております。おじいさんのおかげで購入できた自転車で市内を散策してみたいことがあります。新潟はラーメン店さんが多い！ご存知のとおり、福岡は、とんこつラーメンのメッカですので、多いのは当然ですが、新潟は、店舗数も多いし、さらにいろいろな種類のラーメンがあるのにビックリです。みそ、しょうゆ、あごダシとんこつ、背脂チャッチャ系とんこつ、カレーラーメン等々、朝マックならぬ“朝ラーメン”もあるし、新潟人は、どんだけラーメンすいとんどですか？福岡では、“ラーメン＝とんこつ”なので、お店に入ったら、だいたい、チャーシュー麺にするか大盛りにするか、硬麺にするかくらいの選択肢しかありませんが、チョイスの多い新潟のラーメンは、ミスドでどのドーナツを注文するか？くらい迷ってしまいます。まだ数件ほどしか行ってないので、ぼちぼち好みのラーメン店探しをしてみようと思います。麺の話題になってしまったので、さらに“新潟麺事情”を検証すると、新潟においてラーメン店舗数とうどん店舗数は、相反関係にあることがうかがえます。うどん好きには、ちょっと残念です。福岡は、とんこつラー

メンも然ることながら、実はうどん店も非常に多いのです。とんこつラーメンとは異なり、うどんは他県同様、ちゃんと、月見うどんも、ごぼ天うどんも、きつねうどんもありますから、無問題（モウマントイ）！ただ、うどんを注文した後、店のおばちゃんに「これ一皿もらうけね。」と言ってカウンターの際に置いてある、ガラスのショーケースから自分で“かしわおにぎり”を取り出して食べるのは、福岡の独特な習慣かもしれません。かしわおにぎりには、刻んだ鶏肉と、にんじん、ごぼう、こんにゃくなどがバランス良く入っており、いなりもいいですが、コレがうどんと goes well !! なのです。みなさま、福岡へお寄りの際は、是非お試しを。というわけでB級グルメ好きの柿原でした。今後ともどうぞよろしくおねがい致します。



地域保健医療推進部
特任助教

小 玉 直 樹

2015年5月1日付で地域保健医療推進部の特任助教を拝命致しました小玉直樹です。地域保健医療推進部といわれても、何をしているところなのかピンとこない方も多いと思いますので、簡単にご紹介申し上げます。新潟大学医歯学病院の地域保健医療推進部では退院や転院に関する連絡調整などの地域医療連携に加えて、疾病や治療に関連する医療福祉相談なども行っている部署で、おもに医療ソーシャルワーカー（MSW）の方々が社会福祉の観点で患者さんをサポートしています。急性期病院であるため、どうしても退院支援や地域連携といったことが目立ってきますが、患者さんの社会的、経済的、心理的問題まで踏み込み、社会復帰を助ける業務を幅広く行っています。口腔外科では、緩和ケア施設などへの転院調整や、医療費の支払い相談で依頼されたことのある先生方も多いことと思います。院内の医療連携もまた

その業務の1つで、入院患者さんの歯科治療や口腔管理の支援も含まれます。現状では個別に歯科治療依頼を受けていますが、これに加えて、必要とする患者さんが、広い意味での口腔ケアをきちんと受けられるよう、スキームを作成する事がここでの私の当面の業務となっています。また、今回の就任にあたってもう1つ、医療情報部での仕事をいただいております、2016年に予定している次期歯科カルテシステム稼働の準備に携わらせていただいております。また、申し遅れましたが、所属している医局は顎顔面口腔外科で、臨床や研究、教育活動にもこれまで通り参加させていただきます。

私の生まれは福島県福島市で、学童期に郡山市へ移り住みました。福島県には鶴ヶ城（会津若松）や二本松城、白川城、白石城、福島城など数々の名城とその城下町があり、それらが都市発展の礎となっています。一方で郡山市は、今でこそ県の中核都市ですが、もともとは、あまり人の住まぬ荒涼とした土地でした。余談ですが、「郡山城」というと筒井順慶が築城した大和郡山城を思い浮かべる方が多いと思います。しかし、いくつかの古典文学に安積野の「郡山城」が登場し、政宗記には天正16年（1588年）の「郡山合戦」について触れており、反伊達の佐竹や芦名の軍勢が、伊達方についていた郡山太郎右衛門尉頼祐の郡山城に進撃するくだりが書かれていたりします。もっとも、その「郡山城」の史跡は残念ながら残っていません。話を戻しますと、郡山市が都市として栄える基盤となったのは、明治時代に行われた疎水開発でした。当時は不可能とされていた峠越えをして猪苗代湖から疎水を流し、安積原野を開拓して、現在では農業だけでなく経済や工業、流通、交通の要衝として発展を遂げています。私がここで卒業した安積高校は今でも、文武両道や質実剛健とともに「開拓者精神」を大切にしています。2011年3月の東日本大震災と原子力発電所事故の傷痕は深く、4年経った今でも様々な形で影響を残していますが、今でも残る開拓者精神で克服・復興していくことと願っています。

私はその後、1996年に日本歯科大学への入学を機に単身で新潟へ移り住みました。他の方も申込

れますように、当初は日本海側の独特の気候に悩まされましたが、気が付けば新潟での生活も今年で20年目に入り、今ではこの適度な湿気が身体に心地よい感じすらします。日本歯科大学を卒業後は、2002年に新潟大学歯学部の顎顔面口腔外科へ入局させていただき、高木律男教授のご指導のもと臨床研修と研究活動を行い、2006年に学位をいただいております。研究の詳細については割愛いたしますが、京都大学再生医科学研究所の生体材料学分野で歯槽骨再生モデルを作成し、その後、新潟へ持ち帰って再生現象の解析をさせていただきました。大学院在学中は学内外の多くの方々の研究に触れることができ、振り返ってみると、とても密度の濃い4年間でした。学位取得後は群馬

県のぬまた歯科口腔外科医院、新潟県村上市の肴町病院、秋田県の由利組合総合病院へ出向させていただき、2009年から再度、顎顔面口腔外科で診療をさせていただいております。大学院でご指導をいただいた永田先生をはじめ、多くの先生方や、このような機会を下さり、誰にでも惜しみなく教育、ご指導を下さる高木教授や顎顔面口腔外科の先生方には深く感謝しております。歯学部、病院ともにとっても大きな組織で、個人としての力は限られてはいますが、同じ目的や高い目標をもった集団の一員として、これまでの経験を生かして微力ながら尽くしてまいりますので、ご指導、ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。



同窓会だより

歯学部同窓会学術講演「歯科臨床教育の現状」を拝聴して

39期生 塩見 晶

平成27年4月25日に新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて歯科総合診療部 藤井規孝教授による「歯科臨床教育の現状」を拝聴いたしました。

歯科医師の資質を向上させることにより国民に質の高い歯科医療を提供することを目的として平成18年度から歯科医師臨床研修制度が必修化されました。私は臨床研修が既に必修化されていた平成20年度に卒業して新潟大学のAプログラム（歯科総合診療部1年コース）を希望し、藤井教授をはじめとする指導歯科医の先生方のもと臨床研修を行いました。Aプログラムでは研修歯科医を主治医として位置づけているので、指導歯科医に治療方針や治療計画を細かく相談し、責任感を持って治療にあたっていたことが思い出されます。自分が研修歯科医だったときは毎日の診療のことしか頭にはありませんでしたが、昨年度から再び歯科総合診療部所属となり、新潟大学の研修がたくさんの方々に支えられ、内容をより充実させるために改定を重ねていることを実感しました。A・Bプログラムの共通の研修は研修制度の見直しや毎年の研修歯科医アンケートを基にブラッシュアップされていますし、Aプログラムにおいては1人の研修歯科医が担当している患者数も増加しています。今後の研修制度の課題として在宅・訪問診療を研修内容に加えることや修了基準の策定などが挙げられているようで、日本の社会のニーズに対応した内容に変化していくことが期待されました。

さらに卒前臨床実習についても触れられ、歯学部卒直後の臨床能力不足解消のための歯学教育モデル、コア・カリキュラムの改定によって全国の歯学部の教育実態に関する調査が行われるなど臨床実習をさらに充実させるための体制整備が進む中において新潟大学では診療参加・実践型の臨床実習を継続しており、これに関しても新潟大学では充実した臨床教育を提供しているのだと感じました。

また、卒後の臨床研修先を決定するマッチング制度についても説明があり、研修制度必修化以前に卒業された先生方からは「なるほど、こうやって決めるのか」という声が聞こえてきました。マッチングとは、次年度臨床研修予定者（歯科医師国家試験受験者）が研修希望施設をランク付けし、それとは別に研修施設も研修に来てほしい次年度臨床研修予定者をランク付けし、上位からマッチさせていくというものです。新潟大学は、平均マッチ率は97%と高く、自大学率は60%と全大学の中では低くなっています。自大学率が高いことによるメリットとしては研修がスムーズに行えることや大学院を見据えた研修ができることが挙げられ、デメリットとしては「歯学部7年生」という言葉に代表されるように意識改革を起こしにくいことが挙げられます。私は自大学で研修を行いました。やはり保守的な気持ちがあったことは否めません。その点において新潟大学の自大学率の低さは、他大学からたくさんの研修歯科医を受け入れることで治療手技の違いを知り、そこから自分の考えに疑問を持つ良いきっかけになりました。今回講演を拝聴して、新潟大学の臨床研修・臨床実習が全国的に見ても充実していることがわかり、ますますの発展が期待されました。



新潟大学歯学部同窓会学術セミナーに参加して

歯学科41期生 長谷川 真 奈

平成27年4月21日に新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて開催された同窓会学術セミナーに参加させて頂きました。

今回のセミナーは、歯学教育研究開発学分野の藤井規孝教授による「歯科臨床教育の現状」というテーマでした。歯科臨床研修医制度とマッチングシステムについて、歯学部教育の現状、さらに新潟大学における歯科医師臨床研修と臨床実習についてと、充実した内容の講演でした。

歯科医師臨床研修医制度は平成18年度に必修化され、この年以降に歯科医師免許を取得し、診療に従事しようとする歯科医師には1年以上の臨床研修が義務付けられることになりました。研修内容や研修歯科医の処遇、研修施設に関する基準、指導歯科医の資格要件などは事細かに規定がされています。これらは数年ごとに見直しが行われ、研修がより充実したものになるよう様々な改善が行われているそうです。また、研修先（研修プログラム）を決めるためのマッチングシステムについては自分にとっては割と記憶に新しいお話でしたが、マッチング参加人数やマッチ者数などの推移を見ると、歯学部学生や研修歯科医を取り巻く状況が年々変化していることが感じられました。

次いで、歯学教育についての全国的な取り組み

についてのお話がありました。平成18年の臨床研修制度必修化に続いて、平成20年より「歯学教育の充実・改善に関する調査協力者研究会議」が立ち上げられ、「歯科医師として必要な臨床能力の確保」「優れた歯科医師を養成する体系的な歯学教育の実施」「優れた入学者の確保」「未来の歯科医療を拓く研究者の養成」を大きな目標として、各大学に対して歯学教育モデルコア・カリキュラムの見直しや診療参加型実習の充実などの取り組みを求める動きが始まっています。これは数年ごとにフォローアップ調査があり、取り組みが不足と判断された大学にはヒアリングや実地調査が行われるそうです。新潟大学はまだ一度もヒアリング等の対象に入ったことがないということで、さすが！と思いました。

最後に、新潟大学における臨床研修・臨床実習についてのお話もありました。特に臨床実習については、何といても診療参加・実践型で行われていることが最も大きな特色ですが、学生の臨床技能を更に育成していくための実習内容の見直しや環境の整備、評価方法の見直し等、実習を改善していくための今後の展望について聴くことができました。

私は現在総合診療部のスタッフとして、日頃から外来で臨床実習の学生さんや研修医の先生たちと接する機会が比較的多くあるため、今回のセミナーは自分にとっても関わりが深きたいへん勉強になるお話でした。これからもこういった情報に疎くならないよう、常にアンテナを張っていたい



と思います。

最後に、講師の藤井先生、今回のセミナーを企画して下さいました同窓会関係者の先生方に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。



同窓会セミナー「口腔外科の基本手技」を受講して

25期生 百瀬 学



平成27年2月1日(日)、平成26年度新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅢ 口腔外科の基本手技-習得しよう口腔外科医のテクニク-を受講させていただきました。歯学部校舎の全面

改修工事はまだ完成していませんでしたが、歯学部・医学部附属病院は統合・移転し、新たに医歯学総合病院となり、昔懐かしい風景はだんだんなくなりつつあります。誰しも必ず利用した食堂は既にありませんでしたが、学部正面玄関は以前の面影を残しつつ、新しい眼差しで出迎えてくれました。

平成19年度に組織再建口腔外科学分野(旧I口外)の同窓会学術セミナーを受講して以来、久しぶりの口腔外科分野での実習付セミナーは大きな期待と緊張でいっぱいでした。

午前中は歯学部大会議室で小林先生による小手術を行う際の心得や切開・剥離・縫合などの基本術式から難抜歯の術式、新垣先生による外来小手術の基本術式、芳澤先生による偶発症・継発症への対応について、各々の先生方から具体的な症例を提示していただき、大変詳細に、しかもわかりやすく講義していただきました。開業医にとって一般的な外科の知識や診断・治療方法は大変重要であり必須なことであると理解はしているものの、大学を離れてしまうと日々の診療や様々な雑務に追われて自分の専門分野以外に接する機会が少なかったので大変勉強になりました。

午後は補綴実習室でオベガムと豚顎を用いた切開・剥離・縫合の実習を行いました。マンツーマン(もしかしたらインストラクターの先生の方が多かったかも)での懇切丁寧な指導のもと充実した実習ができました。今回のセミナー用に製作されたテキストは大変分かりやすく、いつでも参考にできるように診療室の机の上に置いてあります。

最後にこのようなセミナーを企画・準備された学術委員の先生方、同窓会の先生方、また、講義・実習をしてくださった小林先生をはじめとする組織再建口腔外科学分野の医局スタッフ皆様に心より感謝いたします。

同窓会セミナー「弁護士・歯科医師として気になる各種問題」を受講して

23期生 内藤 義隆

今年度の同窓会学術セミナー第一弾は、新潟大学歯学部17期生にして就職後に司法試験に合格、司法修習を終了され、現在は故郷の香川県で弁護士として活躍される植松浩司先生の講演会でした。

歯科医師と弁護士というダブルライセンスを持たれているすごい先輩が同窓にいらっしゃるこ

を初めて知り、またなかなか聞く機会のない内容が案内に書かれていましたので、ぜひお話しを聞いてみたいと思い講演会に行きました。講演会場は歯学部講堂。17期生の同級生の方がたくさん来られていたようです。

さて講演内容は、同窓生のために用意していただいた特別な内容でオフレコの講演でしたので、守秘義務違反にならないように気をつけて書きたいと思います。

医療事故は交通事故と似ているとお話しされていました。起きたらどうするかを考えておくことが大切。さらに大切なのは予防すること。医療には一次予防、二次予防、三次予防があるが、それを対策に応用できるとの話もありました。

この一次予防、二次予防、三次予防についての内容を忘れていたので、講演後調べました。一次予防、二次予防、三次予防は、「予防医学」から出てきている言葉で、病気を予防するだけでなく、より広い意味で、疾病予防、障害予防、寿命の延長、身体的・精神的健康の増進を目的としています。病気を未然に防ぐだけでなく、病気の進展を遅らせること、再発を防止することも予防であるとされています。それに基づいて分類されていて、健康の増進を図って病気の発生を防ぐなどの予防措置をとることを一次予防といい、二次予防は、病気になった人をできるだけ早く発見し、早期治療を行い、病気の進行を抑え、病気が重篤にならないように努める、さらに三次予防は、病気が進行した後の、後遺症治療、再発防止、残存機能の回復・維持、リハビリテーション、社会復帰などの対策を立て、実行することを言うそ

うです。

今回の場合は、訴訟にならないようにする準備（一次予防）、大事にならないように早期発見（二次予防）、もし訴訟になった場合でも重症にならないようにする（三次予防）が大事、ということなのではないかと思います。

また、講演では、最近種々の治療においてガイドラインがでているが、ガイドラインに合致しないと要注意とのこと。しかしガイドラインは一般的な診療方法であるため、必ずしも個々の患者様の状況に当てはまるとは限らず、今後ガイドラインは読んで理解しつつも、各々の患者様に対して十分な説明と対応をしていくことが必要と思いました。

技術、知識の向上、医療上の人格の向上、さらに教育・指導内容や体制の見直しをすることが大切と話され、自院で普段から備えや、準備をしていかなければと考えさせられました（それがなかなか難しいのですが…）。

盛りだくさんの内容を短くまとめていただいたので、もっと詳しく聞きたいところもたくさんあり、あっという間の講演でした。

最後になりますが、お忙しい中、香川県からお越しいただきご講演いただいた植松浩司先生、そして同窓会学術部、学術委員の方に感謝申し上げます。

追伸

途中で、裁判に関するクイズを出していただいたのですが、ほとんどわからず自分の裁判に関する知識のなさも痛感してきました。

総合診療部を経験して

歯科総合診療部を経験して

歯科総合診療部 渡邊大祐
専門研修医1年

2014年3月に日本歯科大学新潟生命歯学部を卒業し、本学歯科総合診療部での研修を終え、4月から専門研修医として新たにスタートを切る事ができました。振り返ると本当にあっという間だったというのが率直な感想ですが、その短い時間の中でも多くの人に支えられながら、自身を成長させることの出来た有意義な1年間だったと思います。この場を借りて私が歯科総合診療部で経験したことをご紹介したいと思います。

私が本学歯科総合診療部を研修先として選択した理由は、見学説明会の際に設備が非常に整っておりスキルアップのための模型実習等も不自由なく行うことができ、自分が熱心に取り組めば、それに応えてくれる指導医の先生方が数多くいることが感じて取れたからです。この恵まれた環境で自己研鑽に励み、研修を通してまだ漠然としか考えていなかった自分の歯科医師像を少しでも明確なものにしていけたらと考えておりました。

研修当初は他大学卒業ということもあり、全く新しい環境の中で期待はありつつも不安の方が大きかったかもしれません。新しい環境に慣れることに精一杯な上に、担当医として患者さんに接することの責任に、戸惑いや不安を抱く日々がありました。しかし経験を重ねるに連れ、診療にも少しずつ順応し患者さんとの信頼関係が築くことができるようになり、もっとうまく処置ができるようになりたい、色々な症例を経験したいといったポジティブな気持ちを抱くようになりました。今では歯科総合診療部で研修できて本当に良かったと感じています。

私個人の感想として歯科総合診療部の研修で特に良かった点は、自分が担当医として患者さんの診療に取り組むことができることです。患者さん

の治療方針及び計画の立案、実際の治療とその経過・予後という一連の流れを指導医の先生方から助言を頂きながら経験することができました。患者さんの全身状態や口腔内の状態はそれぞれ異なり、全く同じ症例というのは存在せず、1人1人に最適な治療法を考えていくことの重要さとその難しさを痛感しました。そのような経験ができるのも1年間担当医として患者さんと向き合えるからだと思います。

また指導医の先生方の指導が行き届いているところも研修を通して強く印象に残っています。治療前には十分なディスカッションをした上で治療に臨むことができ、治療中も指導医の先生方に確認してもらい、アドバイスを貰いながら安心して治療を進めることができます。処置後には全ての症例に対し、治療で良かった点や改善点などを細かく教えて下さり、今後スキルアップをするには何が必要かを自分たちに考えさせるきっかけを与えてくれます。そうした先生方の熱心な指導のもと自身の治療を振り返り、次回はどのような点に注意するかを考察し実践していくことで確実に技術力の向上が図れたと感じています。

私自身は総合診療部での研修を終え、歯科総合診療部の専門研修医としてお世話になることができました。研修を通してできるようになったことももちろんありますが、まだまだ至らない点も数



多くあります。もう1年この恵まれた環境の中で多くのことを勉強させて頂き、研修医の頃に不足していた部分を埋めていけるよう努力し、自分の抱く歯科医師像に少しずつ近づけていけたらと考えています。

この1年間の研修は自分が歯科医師になったことを自覚でき、今後の歯科医師人生の基盤となるかけがえのないものでした。ここでの経験を忘れずに更に発展・充実した歯科医師人生にしたいと思えます。

歯科総合診療部を経験して

歯科矯正学分野 大学院1年 網谷 季莉子

初めまして。44期生、卒後2年目の網谷季莉子です。私は卒後1年目に歯科総合診療部で臨床研修させていただき、現在は歯科矯正学分野大学院1年生です。

今回、「歯科総合診療部を経験して」というテーマを頂きましたので本学部卒業生として、学生から研修医までお世話になった歯科総合診療部について執筆させていただきます。

実は旧診療室を最後に使用したのも、現在の新しい診療室を初めて使用したのも私達の学年でしたのでそこには特別な思い出があります。そう、私達の代はちょうど学生の臨床実習開始と病院移転が重なった代でした。平成24年10月に臨床実習開始し、翌月11月に歯科総合診療部含め歯科外来全体が新外来棟へ引越しました。臨床実習に少し慣れてきたタイミングでまた新たな環境に置かれ私達学生も混乱する場面が多々ありましたが、藤井教授はじめ多くの方々の手厚くご配慮下さったおかげで大きなトラブルなく臨床実習が継続できたものと思います。むしろ、このような病院の沿革の節目に立ち会えたことを光栄に思います。多くの先輩、先生方の思い出いっぱいの旧診療室を引継ぐことができ、そしてまた新しい診療室での初代臨床実習学年になることができ、私たちの学年は幸運でした。

臨床実習も卒後研修も本当に貴重な経験で、恵

まれた環境だったと感謝しております。どちらも周囲の大きなサポートが不可欠で、指導医や技工士の先生方、先輩、病院のスタッフの皆様が私たちを温かく厳しく導いてくださいました。責任も大きいですが、その分やりがいもあります。1年間担当させていただいた患者さんの最後の診療後にお礼を言うと、非常に喜んでいただき「感謝するのはこっちの方ですよ。毎回毎回頑張ってくれて、こんなにいい入れ歯を作ってくれてありがとう。」とっていただきました。私が未熟なために迷惑かけてばかりだったのにこんなに温かく受け入れてくださったことが嬉しくてありがたくて、これからももっと頑張らなければという励みになりました。

無事卒業、国家試験合格した後卒後研修のために再び総合診療部に戻ってきました。歯科総合診療部での卒後研修を学生の延長ととらえる方も多いかもしれませんが。しかし今度は実習ではなく、あくまで国家資格を持った歯科医師としての研修なので、自分の意識は学生のそれとは大きく異なります。担当となった患者さんの主治医は自分になり、多くの面で自分の裁量に任せられます。ですが困ったときも指導医の先生方が親身的に指導して下さるので大変助かり勉強になりました。また、研修歯科医の同期がたくさんいたことも大きな励みになりました。自分が日々の診療や技工などで悩むことは周りも同じようなことでつまづいていることが多いので、お互いに相談しあったり教えあったりできました。辛いことがあれば励ましあえる仲間は何度も助けられました。

私が歯科総合診療部での卒後研修を選択したの



は、将来大学院生として大学に残ることも考えていたからです。専門診療室に入る前にまずは一般歯科をじっくり経験して基本を身に着けたいと思ったのです。1年間の研修で自分の目指す歯科

医師像を具体的にイメージできるようになりました。歯科総合診療部での経験は私の歯科医師人生の基盤です。いつまでもここで感じた「初心」を忘れずに精進してまいりたいと思います。



歯学部運動会を終えて

歯学科5年 森 昂 大

五十嵐キャンパスで大学生活を満喫する1年生。一方、患者さんを相手に病院で臨床実習をする歯学科6年生や口腔生命福祉学科4年生。さらに、病院で実際に働いていらっしゃる先生方。横の繋がりは狭くても、縦の繋がりの広い歯学部。そんな歯学部で生活する大勢の人が年に一度集まり、学年対抗に競い合い、汗を流して交流を深める行事、歯学部運動会。

○運動会はじまり！

朝から眩しい太陽。今年の運動会は例年より早く5月30日（土）。各学年がこの日のために作り上げてきた、学年カラーの大きなイラストパネル6枚にグラウンドが彩られ、いざ運動会の開幕です。開会式のメインイベントはといえば、やはり選手宣誓。例年、担当部活が趣向をこらした選手宣誓を披露してくれます。さて今年は何が始まるのでしょうか。

○新競技大縄とび

「では、続いては新競技大縄とびです」のアナウンスを合図にざわざわし始めるグラウンド。久しぶりに触れる大縄に、どの学年もそして先生チームも大苦戦。グラウンドに響くのは、やたらと「せーの！」の掛け声ばかり。おや、ちらほらと軽快なリズムも聞こえ始めました。

○優勝の行方は…

「優勝は…5年生！」の声と同時に、歓喜をあげる5年生チーム。

喜ぶ顔も悔しがる顔も、みんな真っ赤に日焼けしています。お疲れ様でした。

例年、新潟大学附属小学校のグラウンドをお借りして行っていた運動会ですが、今年から旭町キャンパス内に新設された学内グラウンドにて開

催することができました。新グラウンドということで、準備には大変なことも多くありましたが最終的には、無事運動会を開催させていただくことができました。ご協力いただきました学生支援委員の山村教授、学務係の皆様、そして学生の皆様ありがとうございました。



かわいい笑顔と歌声を披露するバレーボール部1、2年生

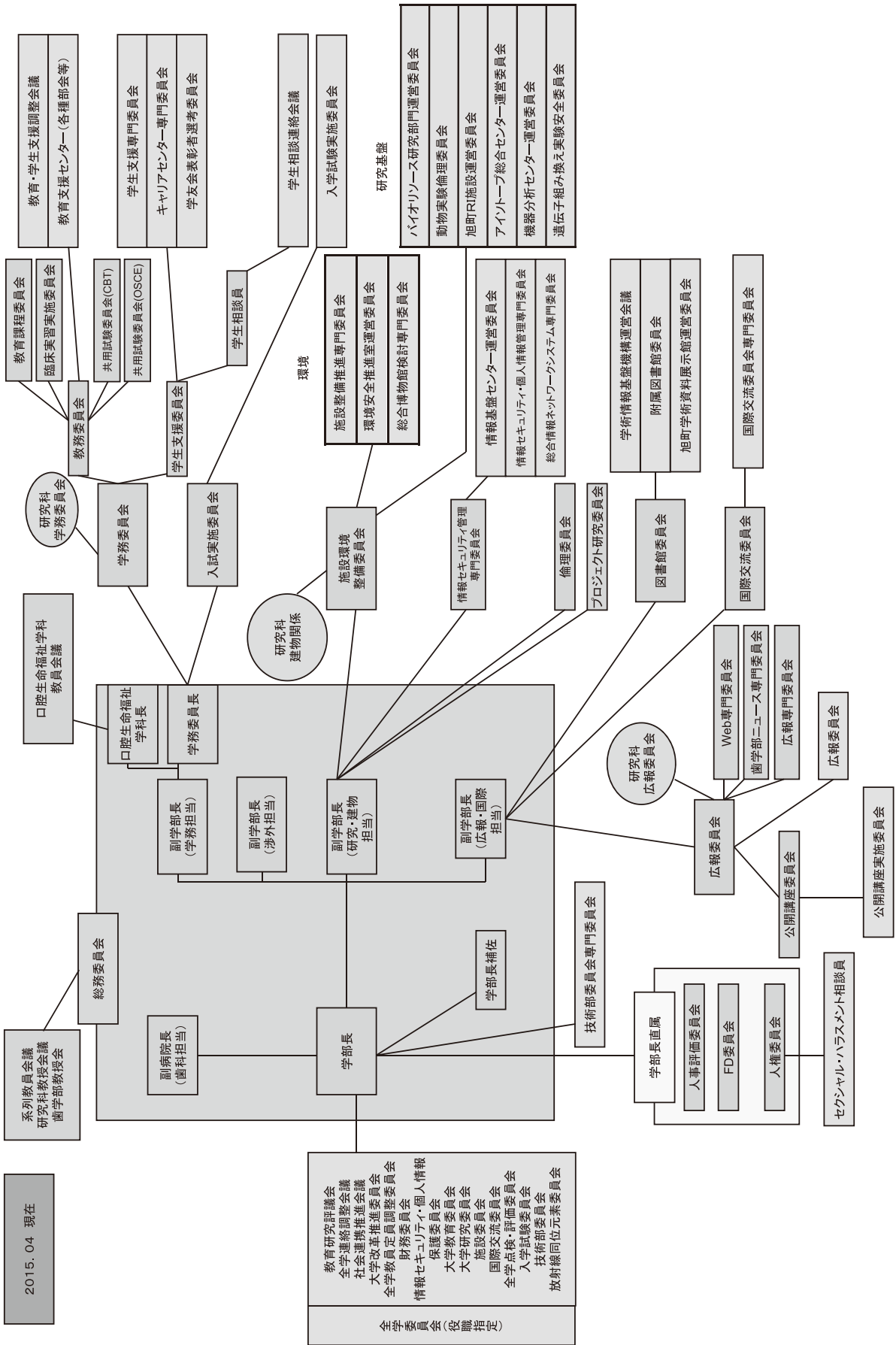


大縄跳び



優勝した5年生（筆者は最前列中央）

《歯学部各種委員会》



平成27年度歯学部内委員会

平成27年 4月 1日現在

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
—	前田 健康	系列長		任期 25.4.1～28.3.31
総務委員会	前田 健康	歯学部長		総括
	高木 律男	副病院長		歯科担当
	小野 和宏	副学部長		学務
	宮崎 秀夫	副学部長		渉外
	魚島 勝美	副学部長		広報・国際
	寺尾 豊	副学部長		研究・建物
	宮崎 秀夫	歯学科長		
	葭原 明弘	口腔生命福祉学科学科長		
	大内 章嗣	学部長補佐		
	小野 和宏	学務委員会委員長		
学務委員会	小野 和宏	学務委員会委員長	全学教育委員会	総括
	齋藤 功	教務委員長		教務
	寺尾 豊	入試委員会委員長	入試実施委	入試
	山村 健介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤井 規孝	臨床実習委員会委員長		臨床実習
	葭原 明弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
教務委員会	齋藤 功	教務委員会委員長		総括
	堀 一浩			
	大内 章嗣			教育課程 (口腔生命福祉学科系)
	ステガロク・ロクサーナ			教育課程 (口腔生命福祉学科系)
	井上 誠			◎共用試験 (CBT)
	中島 貴子			◎共用試験 (OSCE)
教育課程委員会	小野 和宏	オブザーバー		
	齋藤 功			
	小野 和宏			
臨床実習実施委員会	井上 誠			
	藤井 規孝	委員長		
	児玉 泰光	46期ヘッドインストラクター		
	竹中 彰治	歯の診療科		
	多部田 康一	歯周病科		
	五十嵐 直子	義歯診療科		
	秋葉 奈美	冠・ブリッジ診療科		
	小田 陽平	口腔再建外科		
	勝見 祐二	顎顔面口腔外科		
	丸山 智	口腔病理検査室		
	池 真樹子	歯科放射線科		
	中島 貴子	歯科総合診療部		
	和田 晶子	歯科外来ブロック1		
	高野 綾子	歯科外来ブロック1		
	照光 真	歯科麻酔科		
	廣富 敏伸	予防歯科		
	辻村 恭憲	口腔リハビリテーション科		
	河野 承子	小児・障がい者歯科		
	越知 佳奈子	矯正歯科		
	福島 正義	口腔生命福祉学科		
石川 裕子	口腔生命福祉学科			
共用試験委員会 (CBT)	井上 誠			必要な都度委員を指名
共用試験委員会 (OSCE)	中島 貴子			必要な都度委員を指名
学生支援委員会	山村 健介	学生支援委員会委員長	学生相談室相談員・学生相談連絡会議	総括
	依田 浩子			歯学科
	小松 康高			歯学科
	秋葉 奈美			歯学科
	石川 裕子			口腔生命福祉学科
	佐伯 万騎男		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
学生相談員	伊藤 晴江			研究科
	山村 健介			全学の学生相談室相談員・学生相談連絡会議は、井上教授、程准教授
	依田 浩子			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
入試実施委員会	寺尾 豊	入試委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	山崎 和久	前入試委員会委員長		補佐
	泉 健次			
	瀬尾 憲司	オブザーバー		
研究科学務委員会	齋藤 功			総括
	葎原 明弘			教務
	井上 誠			学生支援
施設環境整備委員会	宮崎 秀夫	副学部長		総括
	佐伯 万騎男		施設整備専門委	◎
	吉江 弘正		総合博物館検討専門委	
	大峡 淳		動物実験倫理委員会	
	寺尾 豊		遺伝子組換え実験安全委	
	福島 正義		口腔生命福祉学科(施設担当)	
共通施設専門委員会	宮崎 秀夫	副学部長		
情報セキュリティ管理専門委員会	西山 秀昌		情報基盤センター運営委	総括
	鈴木 一郎			IT一般
	中島 俊一			
	小田 陽平			
図書館委員会	魚島 勝美	副学部長		
	吉江 弘正		附属図書館委員会	
	八木 稔		附属図書館委員会	
国際交流委員会	魚島 勝美	副学部長		
	泉 健次			
	齋藤 功			
	依田 浩子			
	大峡 淳			
	長澤 麻沙子			
	柿原 嘉人			
	石田 陽子	オブザーバー		
広報委員会	魚島 勝美	副学部長	歯学部ニュース専門委	総括
	大島 勇人		研究科広報委web担当	◎
	小田 陽平		学部広報web専門委	◎
	ステガロク・ロクサーナ		広報委員会(学部)	◎
	吉羽 邦彦		広報委員会(研究科)	◎
	黒川 孝一		口腔生命福祉学科	◎
	加来 賢		公開講座実施委員会	◎
研究科広報委員会 (Web担当)	大島 勇人			◎
	鈴木 一郎			◎
歯学部広報委員会 Web専門委員会	黒川 孝一			◎
	小田 陽平			
	田中 礼			
歯学部ニュース専門委員会	魚島 勝美			他の委員は准講層、助教層からローテーションで選出
広報専門委員会	ステガロク・ロクサーナ		学部	
	吉羽 邦彦		研究科	
歯学部公開講座委員会	加来 賢		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	寺尾 豊	副学部長		
	山崎 和久			
	泉 健次			
	小野 高裕			
倫理委員会	宮崎 秀夫	委員長		
	前田 健康	学部長		
	高木 律男	副病院長		
	織田 公光			
	葎原 明弘			
	小野 高裕			
	渡邊 修	学識経験者 法学部より		任期 27.4.1~29.3.31
人事評価委員会	前田 健康	系列長		
	山村 健介	任期制教員で基礎系の教授		
	林 孝文	任期制教員で臨床系の教授		
	小田 陽平	任期制教員である准教授、講師及び助教のうちから2人		
	土門 久哲			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
FD委員会	秋葉陽介	委員長		
	佐伯万騎男			
	寺尾豊			
	多部田康一			
	池真樹子			
	諏訪間加奈			
	真柄仁			
	伊藤晴江			
	吉羽永子			
	新美奏恵			
	藤原茂弘			
	前田健康	顧問		
小野和宏	オブザーバー			
井上誠	オブザーバー			

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成27年4月1日から平成29年3月31日まで
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員



教 職 員 異 動

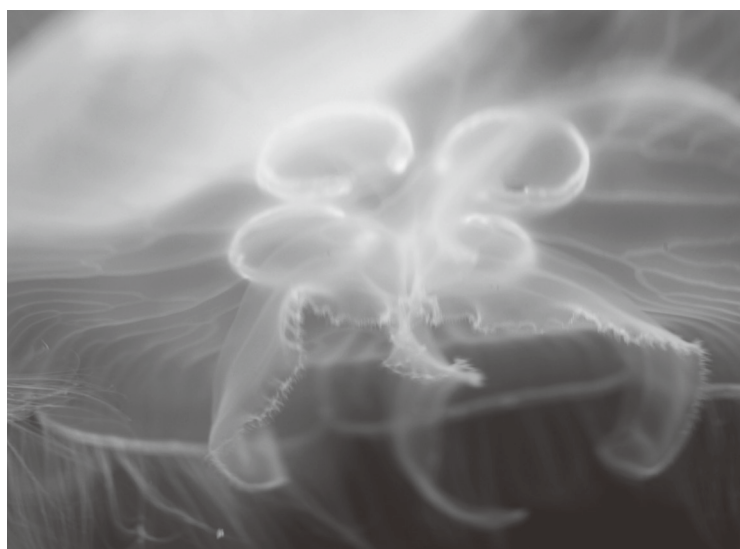
学 部

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
配置換	27. 4. 1	堀 一 浩	包括歯科補綴学分野准教授	摂食嚥下リハビリテーション学分野准教授
昇任	27. 4. 1	辻 村 恭 憲	摂食嚥下リハビリテーション学分野准教授	摂食嚥下リハビリテーション学分野助教
採用	27. 4. 1	藤 原 茂 弘	包括歯科補綴学分野助教	
採用	27. 4. 1	前 川 知 樹	高度口腔機能教育研究センター助教	高度口腔機能教育研究センター特任助教
採用	27. 4. 1	川 崎 勝 盛	高度口腔機能教育研究センター助教	高度口腔機能教育研究センター特任助教
採用	27. 4. 1	加 藤 寛 子	高度口腔機能教育研究センター助教	高度口腔機能教育研究センター特任助教
採用	27. 4. 1	狩 野 祥 司	口腔生命福祉学専攻特任教授	大学院教育開発センター教授
採用	27. 4. 1	鈴 木 絢 子	小児歯科学分野教務補佐員	
採用	27. 4. 1	白 石 成	摂食嚥下リハビリテーション学 分野研究支援者(科研費技術者)	
名称変更	27. 4. 1	竹 石 龍 右	摂食嚥下リハビリテーション学 分野特任助教	摂食嚥下リハビリテーション学 分野特任助手
採用	27. 4. 8	大 口 繭 美	摂食嚥下リハビリテーション 学分野産学官連携技術者	
採用	27. 4. 13	目 黒 友 美	歯周診断・再建学分野産学官 連携技術者	
退職	27. 4. 17	小 柳 美和子		歯周診断・再建学分野産学官 連携技術者
退職	27. 4. 30	白 石 成	医歯学総合病院医員	摂食嚥下リハビリテーション学 分野研究支援者(科研費技術者)
採用	27. 5. 25	浅 妻 直 美	包括歯科補綴学分野研究支援 者(科研費技術者)	
配置換	27. 6. 1	前 田 健 康	高度口腔機能教育研究センター 教授	口腔解剖学分野教授
採用	27. 6. 1	白 石 成	摂食嚥下リハビリテーション学 分野助教	医歯学総合病院医員
採用	27. 6. 9	神 田 知 佳	摂食嚥下リハビリテーション 学分野産学官連携技術者	
採用	27. 6. 11	佐 藤 茜	摂食嚥下リハビリテーション 学分野産学官連携技術者	
採用	27. 6. 11	保 田 麻 里	摂食嚥下リハビリテーション 学分野産学官連携技術者	
退職	27. 6. 30	IDRUS ERIK		予防歯科学分野助教
退職	27. 6. 30	河 野 芳 朗		口腔解剖学分野助教
採用	27. 7. 1	岡 本 圭一郎	口腔生理学分野准教授	
採用	27. 7. 1	加 来 咲 子	歯学教育研究開発学分野特任 助教	医歯学総合病院医員

【事務等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
配置換	27. 4. 1	野 口 寿 子	歯学部事務室学務係主任	学務部教務課教職支援係
配置換	27. 4. 1	玉 木 友 子	歯学部事務室総務係	学務部学生支援課総務係
配置換	27. 4. 1	半井野 浩 明	施設管理部施設管理課総務係	歯学部事務室総務係
配置換	27. 4. 1	松 井 淳	医歯学総合病院総務課人事企画係	歯学部事務室学務係
採用	27. 4. 1	櫻 井 拓 仁	歯学部事務室学務係	
採用	27. 4. 1	今 井 夏 子	歯学部事務室総務係事務補佐員	



病院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	27. 4. 1	中山 美和	口腔外科系歯科助教	新規
昇任	27. 4. 1	真柄 仁	摂食嚥下機能回復部講師	摂食嚥下機能回復部助教
採用	27. 4. 1	金丸 祥平	口腔外科系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	菅井 登志子	口腔外科系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	塙 健志	口腔外科系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	成松 花弥	口腔外科系歯科レジデント	継続
採用	27. 4. 1	齋藤 直朗	口腔外科系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	倉部 華奈	口腔外科系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	須田 大亮	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	小玉 直樹	口腔外科系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	大貫 尚志	口腔外科系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	齋藤 太郎	口腔外科系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	上松 晃也	口腔外科系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	新垣 元基	口腔外科系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	深井 真澄	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	渡部 桃子	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	原 夕子	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	永井 孝宏	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	隅田 賢正	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	北村 厚	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	曾我 麻里恵	口腔外科系歯科レジデント	継続
採用	27. 4. 1	小林 太一	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	吉川 博之	口腔外科系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	金丸 博子	口腔外科系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	山崎 麻衣子	口腔外科系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	佐藤 由美子	口腔外科系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	小玉 由記	口腔外科系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	平原 三貴子	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	山田 友里恵	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	須田 有紀子	口腔外科系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	鹿児島 暁子	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	村上 智哉	矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	黒澤 美絵	矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	花崎 美華	矯正・小児系歯科レジデント (パートタイム)	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	27. 4. 1	中 島 努	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	左右田 美 樹	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	小 原 彰 浩	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	篠 倉 千 恵	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	吉 居 朋 子	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	高 橋 功次朗	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	大 竹 正 紀	矯正・小児系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	網 谷 季莉子	矯正・小児系歯科レジデント	新規
採用	27. 4. 1	市 川 佳 弥	矯正・小児系歯科レジデント	新規
採用	27. 4. 1	藤 田 瑛	矯正・小児系歯科レジデント	新規
採用	27. 4. 1	西 野 和 臣	矯正・小児系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	坂 上 馨	矯正・小児系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	佐 藤 知弥子	矯正・小児系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	眞 舘 幸 平	矯正・小児系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	大 倉 麻里子	矯正・小児系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	上 村 藍太郎	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	大 森 裕 子	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	阿 部 遼	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	新 島 綾 子	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	村 上 智 子	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	中 田 樹 里	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	栗 原 加奈子	矯正・小児系歯科レジデント(パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	皆 川 久美子	予防・保存系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	船 山 さおり	予防・保存系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	野々村 絢 子	予防・保存系歯科レジデント	新規
採用	27. 4. 1	佐 藤 美寿々	予防・保存系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	笹 嶋 真 嵩	予防・保存系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	本 田 朋 之	予防・保存系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	野 中 由香莉	予防・保存系歯科医員	継続 (育児休業中)
採用	27. 4. 1	堀 水 慎	予防・保存系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	宮 澤 春 菜	予防・保存系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	花 井 悠 貴	予防・保存系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	岡 田 萌	予防・保存系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	有 松 圭	予防・保存系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	皆 川 高 嘉	予防・保存系歯科医員(パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	中 島 麻由佳	予防・保存系歯科医員(パートタイム)	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	27. 4. 1	小島 杏里	予防・保存系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	松田 由実	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	島田 惇史	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	佐藤 圭祐	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	根津 新	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	保苅 崇大	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	黒木 歩	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	山田 実生	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	横地 麻衣	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	大倉 直人	予防・保存系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	大墨 竜也	予防・保存系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	若松 里佳	予防・保存系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	遠間 愛子	予防・保存系歯科レジデント	新規
採用	27. 4. 1	伊藤 崇史	予防・保存系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	日向 剛	予防・保存系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	坂上 雄樹	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	末山 有希子	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	枝並 直樹	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	竹内 亮祐	予防・保存系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	加来 咲子	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	水 薫 一尊	摂食機能・補綴系歯科レジデント	新規
採用	27. 4. 1	三上 絵美	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	山鹿 義郎	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	金子 広美	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	小飯塚 仁美	摂食機能・補綴系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	大川 純平	摂食機能・補綴系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	菊地 さつき	摂食機能・補綴系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	設楽 仁子	摂食機能・補綴系歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	27. 4. 1	渡邊 賢礼	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	林 宏和	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	27. 4. 1	辻 光順	摂食機能・補綴系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	氏原 泉	摂食機能・補綴系歯科医員	新規
採用	27. 4. 1	羽尾 直仁	摂食機能・補綴系歯科レジデント	継続
採用	27. 4. 1	酒井 翔悟	摂食機能・補綴系歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	長谷川 真奈	歯科総合診療部医員	継続
採用	27. 4. 1	八田 あずさ	歯科総合診療部医員	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	27. 4. 1	金子 美奈未	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	27. 4. 1	永井 裕子	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	27. 4. 1	渡邊 大祐	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	27. 4. 1	中村 太	歯科総合診療部レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	佐藤 拓実	歯科総合診療部レジデント (パートタイム)	継続
採用	27. 4. 1	高嶋 真樹子	顎関節治療部医員	継続
採用	27. 4. 1	河村 篤志	顎関節治療部医員	継続
採用	27. 4. 1	永井 康介	顎関節治療部レジデント	新規
採用	27. 4. 1	山崎 裕太	顎関節治療部レジデント	新規
採用	27. 4. 1	小川 信	インプラント治療部医員	継続
採用	27. 4. 1	清水 太郎	インプラント治療部医員	継続
採用	27. 4. 1	外島 彩	インプラント治療部レジデント	継続
採用	27. 4. 1	阿部 達也	病理検査室医員	継続
採用	27. 5. 1	小玉 直樹	地域保健医療推進部特任助教	口腔外科系歯科医員
採用	27. 5. 1	白石 成	摂食機能・補綴系歯科医員	医歯学系研究支援者 (パートタイム)
退職	27. 5. 31	渡邊 賢礼		摂食機能・補綴系歯科医員
退職	27. 5. 31	氏原 泉		摂食機能・補綴系歯科医員
退職	27. 5. 31	白石 成	(27.6.1 医歯学系助教)	摂食機能・補綴系歯科医員
採用	27. 6. 1	大貫 尚志	口腔外科系歯科助教	口腔外科系歯科医員
採用	27. 6. 1	辻 光順	摂食嚥下機能回復部助教	摂食機能・補綴系歯科医員
育児休業	27. 6. 24	金丸 博子		口腔外科系歯科医員
退職	27. 6. 30	加来 咲子	(27.7.1 医歯学系特任助教)	摂食機能・補綴系歯科医員

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
命	27. 4. 1	山野井 敬彦	歯科技工部門主任歯科技工士	歯科技工部門歯科技工士
採用(再雇用)	27. 4. 1	熊 倉 喜久夫	歯科技工部門歯科技工士(パートタイム)	歯科技工部門歯科技工士
採用	27. 4. 1	上 村 由紀子	摂食嚥下機能回復部言語聴覚士(パートタイム)	医歯学系技術補佐員(パートタイム)
採用	27. 4. 1	居 城 恵 実	看護部東3階病棟看護師	新規
採用	27. 4. 1	櫻 田 仁 美	看護部東3階病棟看護師	新規
採用	27. 4. 1	高 橋 恵 美	看護部東3階病棟看護師	新規
育児休業復帰	27. 4. 1	河 合 由美子	看護部外来4・5階看護師	
育児休業復帰	27. 4. 1	伊 藤 麻 衣	看護部外来4・5階看護師	
所属換	27. 4. 1	河 合 由美子	看護部外来4・5階看護師	看護部外来2・3階看護師
所属換	27. 4. 1	小 竹 洋 子	看・東9階病棟	看護部外来4・5階看護師
所属換	27. 4. 1	谷 藤 高 子	看護部外来2・3階看護師	看護部東3階病棟看護師
所属換	27. 4. 1	村 山 愛	看護部外来エントランス・1階看護師	看護部東3階病棟看護師
病気休職	27. 4. 5	石 井 絵 美		看護部外来4・5階看護師
退職	27. 6. 30	山 田 亜 紀		歯科衛生部門歯科衛生士
復職	27. 7. 1	石 井 絵 美	看護部外来4・5階看護師	

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	27. 4. 1	吉 澤 初 記	事務部長	総務部総務課長
配置換	27. 4. 1	江 口 正 樹	総務課長	学務部教務課長
配置換	27. 4. 1	齋 藤 正 志	総務部総務課長	医歯学総合病院総務課長
配置換	27. 4. 1	泉 井 文 男	総務課副課長	医事課専門員(安全管理)
配置換	27. 4. 1	大 熊 忠	管理運営課副課長	研究企画推進部産学連携課副課長
配置換	27. 4. 1	島 田 彰	医事課副課長(医事総括)	総務課副課長
配置換	27. 4. 1	片 桐 孝 昭	医事課副課長(診療)	研究企画推進部研究推進課副課長
配置換	27. 4. 1	土 田 啓 子	医事課専門員(安全管理)	学務部キャリア支援課就職情報係長
配置換	27. 4. 1	小 島 清 市	人文社会・教育科学系学務課副課長	医歯学総合病院管理運営課副課長
配置換	27. 4. 1	大 谷 正 榮	医歯学系総務課副課長	医歯学総合病院医事課副課長(医事総括)
配置換	27. 4. 1	佐 野 正 典	人文社会・教育科学系総務課副課長	医歯学総合病院医事課副課長(診療)
昇任	27. 4. 1	小 嶋 貴 幸	総務課地域医療推進係長	総務課主任
配置換	27. 4. 1	清 野 暁	経営企画課財務企画係長	管理運営課医薬品係長
配置換	27. 4. 1	小 林 孝 夫	管理運営課管理係長	研究企画推進部産学連携課産学連携係長
配置換	27. 4. 1	野 水 忠 宏	管理運営課契約係長	医事課医療支援係長
配置換	27. 4. 1	星 野 智 裕	管理運営課医薬品係長	管理運営課管理係長

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	27. 4. 1	齋 藤 芳 章	医事課患者支援係長	医事課地域連携係長
昇任	27. 4. 1	吉 田 誠 司	医事課診療請求係長	医事課主任
配置換	27. 4. 1	石 川 和 彦	医事課救急医療係長	学務部教務課学校教員研修係長
配置換	27. 4. 1	福 井 努	医事課収入係長	財務部資産管理課支出係長
配置換	27. 4. 1	伊 藤 能 成	医事課公費医療係長	研究企画推進部研究推進課研究推進係長
配置換	27. 4. 1	齋 藤 俊 夫	総務部企画課専門職員	医歯学総合病院経営企画課財務企画係長
配置換	27. 4. 1	中 澤 文 子	研究企画推進部産学連携課産学連携係長	医歯学総合病院経営企画課再開係長
配置換	27. 4. 1	伊 藤 憲 興	総務部人事課人件費・給与計算係長	医歯学総合病院管理運営課契約係長
配置換	27. 4. 1	渡 邊 利 昭	財務部契約課五十嵐地区契約係長	医歯学総合病院医事課収入係長
配置換	27. 4. 1	一 久 真由美	総務部安全管理課安全企画係長	医歯学総合病院医事課公費医療係長
配置換	27. 4. 1	山 岸 広 茂	学務部教務課学校教員研修係長	医歯学総合病院医事課診療請求係長



編集後記

今回編集に参加させていただき、歯学部内でこれほどまでに多岐にわたる活動があるのかと改めて実感し、またそれぞれについて多くの情熱を注いでいらっしゃる方がいることに感激いたしました。素晴らしい活動もそれを伝える術がなければ、一部のメンバーのみ共有できるものになってしまうため、編集を通じてこの歯学部ニュースの重要性を実感した次第です。快く原稿依頼に御承諾いただいた皆様、本当にありがとうございました。

歯科総合診療部 奥村 暢巨

今年も歯学部ニュースの第1号ができ上がりました。お忙しい中、急なご依頼にも関わらず、快くご寄稿いただきました皆様に御礼申し上げます。編集作業の難しさや、これまでの編集委員の先生方のご苦勞を改めて思い知った次第です。新潟大学歯学部で学んでいる学生や保護者の方、現在在籍している職員、卒業して開業された先生方や、今は遠くで生活・勤務されている方々など、新潟大学歯学部にかかわる多くの人々を繋ぐ一つのツールとして役立つことを願っています。

口腔再建外科 新美 奏恵

編集責任者の魚島教授より任命され、編集委員を務めさせていただきました。ご多忙中にもかかわらず、執筆依頼を快くお引き受け下さった教職員および学生の皆様に深く感謝申し上げます。皆様の短期間での執筆力に感銘を受け、原稿依頼を通じて今まで接点のなかった学生さんを知る機会がもてたことも大変有意義でした。また、秋葉編集長をはじめ編集委員の先生と協力して発行にこぎつけたことを嬉しく思います。本号が歯学部内外の皆様の交流の一助となれば幸いです。

口腔解剖学分野 原田 史子

今回、初めて歯学部ニュースの編集員を担当させていただきました。急な執筆依頼にもかかわらず快くお引き受けいただき、皆様に感謝いたします。この歯学部ニュースが皆様のお役に立てれば幸いです。ありがとうございました。

組織再建口腔外科学分野 船山 昭典

時間はかかってしまいましたが、どうか今回も皆様に歯学部ニュースをお届けすることができました。学生の活動、診療、研究、教育など、「歯学部の今」を読者の皆様にお届けできればうれしく存じます。寄稿にご協力頂いた皆様、4名の編集委員の先生方、貴重なお写真を提供いただきました林孝文教授、度々の修正に根気強くお付き合いいただきました(株)ウィザップ渡辺様、皆様に厚く御礼申し上げます。

生体歯科補綴学分野 秋葉 陽介

歯学部ニュース

平成27年度第1号（通算127号）

発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 秋葉 陽介、魚島 勝美
編集委員 奥村 暢旦、新美 奏恵
原田 史子、船山 昭典
印刷所 (株)ウィザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮 影 地：魚沼市（西福寺開山堂）

撮 影 日：2015年 8 月

使用機材：OLYMPUS E-M10/M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro／絞り：F4.0・シャッター速度：125分の 1 秒

裏表紙の撮影データ

撮 影 地：胎内市（長池憩いの森公園）

撮 影 日：2015年 4 月

使用機材：OLYMPUS E-M10/M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro／絞り：F4.0・シャッター速度：2,500分の 1 秒

コメント：今回は、地元である新潟県内の名刹や風物詩を対象にして、35mm判換算焦点距離で120mm相当の望遠マクロレンズを使って、緻密感や凝縮感を表現してみました。表紙には幕末の名匠、石川雲蝶の彫刻を被写体として選びました。想像上の異形の神秘的存在に、生き生きとした強い生命力や意思の内在を思わせる造形は卓越したものがあると思えます。

マクロレンズは精緻な近接・拡大撮影を目的としていますが、中・遠距離の望遠レンズとしても優れた描写性能を持っています。その一方で、フォーカスの合った部分のシャープさとトレードオフで、若干、前後のアウトフォーカス部分のボケがざわついてくる傾向が出てしまうところに難点があるように思います。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS E-M10

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0, M.ZUIKO DIGITAL 25mm F1.8, M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro

撮 影 者：林 孝文

